
たった、ひとこと

雪野おと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった、ひとこと

【Nコード】

N2940Q

【作者名】

雪野おと

【あらすじ】

幸せを見つけれず、夢を諦めて過ごしていた19歳の少女が、事故で異世界へトリップ。必要とされた世界で、自らの幸せを探します。王道、糖度高め、魔法あり戦いありの恋愛ファンタジー。

R15、戦闘描写有の為苦手な方は注意。

はじまり

夢は、毎日笑顔が生まれるような、暖かい家庭を持つこと。時には喧嘩してもいいから、望むのは普通である幸せ。

そんな事を考えていたのは、いつの日だったか。

諦めていた。

……幸せになる事を。

どんなに願っていても、私は

——え……、ここ、は……

「ねえ、おかあさ……」

「うるさい」

私と、……お母さん？

お母さん……どうしてそんな目をするの

「お母さんはねえ、あんたより舞の方が好きなのよ」

嘘。やめて、やめてやめてやめて！

「おかあさ……」

帰りたい……ここは、キケン

ここは、家だ。

なのに、私は

帰りたい、なんて。

「……ん」

じりじりと、頭に響く目覚ましの音を止めようと手を伸ばして、叩く。

……嫌な、夢見た
仕事、行かなきゃ

ああ、疲れた……今日も駄目だ。熱っぽい。

帰りたい……

「行つて来ます」

誰もいない家。返事は返ってこないけれど。

かえりたい……

朝から皮膚が痛む程照りつける日光の下を、黒い傘をさしながら
アルバイト先に向かって歩く。

残暑が厳しい、九月。じりじりと焼けるアスファルトに、黒い影
が揺れる。

今時少し珍しい真っ黒な長い髪が、時折吹く風になびいた。

あおい
蒼井涙、十九歳。

目は黒目がちでぱっちりとしていて、それなりに整っているのは
という容姿は長い前髪によってほぼ隠れてしまっている。化粧は
薄く、黒のロングスカートのワンピースが体型をすっぽり隠してし
まっていてわかりにくいが、傘を握る手の指はほっそりとしている。
百五十三センチとあまり高くない身長もあるせいか、年齢の割には

酷く幼く見える。

彼女はどこかふらふらと歩いていて、健康的には見えない。

（朝ごはん、食べれなかった。薬飲まないといけないのに）

朝見た夢のせいで、胃のむかむかを抑えそんな事を考えながら傘を顔に日が当たらないように傾けて歩いていた彼女の目の前の歩行者信号は、点滅を終えて赤く光る。

（一応薬は持ってきたけど……食べないで飲むと、吐いちゃうんだよな）

一歩、また一歩踏み出す。

キキイーーーー！

周囲に耳を塞ぎたくなるような、暑い中に寒気のある音が響いた。

そう、その音だけが、少女の頭に響いた。

見知らぬ土地―1

ふわふわ

身体が、浮いている。

「……うわぁ、綺麗」

目をゆっくり開けると、身体は……そう、例えるならば真っ白な雪の中。

……懐かしい

冷たいのか、そしてどこにいるのかなんてわからない。

いや、足がどこか地面についているのかもわからない。足を動かしてみる。……どこかについた様子はない。

不思議と恐怖や焦りを感じることなく、その感覚を楽しんだ。

空から、ふわりふわりと雪が舞い降りてくる。

なんて、綺麗。

ああ、私、しんじやったのかな……

痛くなかった。

うん、よかった痛くなくて。

最期に、雪も見れたし。

あんなに生きたかった筈なのに、どうしたんだろうわたし

あんなに、頑張ったのに……

私

ひとりぼっちの、ままだった。

何も感覚がなかったはずなのに、冷やりと冷たい風を感じる。急に意識がはつきりしてきて、涙は目をゆつくりと開けた。

（どこだろう、すごい日差しが暑かったはずなのに）

視界がぼやばやしてよく見えないが、どうやら薄暗いようだ。涙はぼんやり考えて、体を起こそうと腕を動かして顔を歪めた。

ちくちくと肌に何か刺さるのはさほど気にならないが、体中が酷く痛む。何かに強くぶつかったようだ。やはり車に轢かれたのだろうかと考えて、何でさっきの白い世界では平気だったのにいきなり痛みが出てきたのだろうと少しむっとしたように目を閉じた。

自分は、死ななかったのだろうか……

仕方なく何が起きたのだろうと、痛む身体を押さえながら何とかゆつくりと起き上がった。涙は、驚いて目を見開いた。

涙の目に映る景色。それは、どう考えても自分が車に轢かれた場所でもなければ、病院でもない。暗く、湿った空気、冷たい風が吹き付けるそこは、鬱蒼とした森の中。

真っ直ぐに伸びた木々が辺り一帯に生い茂り、空を覆う葉は暗いせいでその青々とした色は見せず、昼間ならば美しい森なのかもしれないが今は涙の不安を煽り、その体を震え上がらせた。身体がびくりと跳ねた涙は、すぐに痛みで眉を顰める。相当痛い。おかしいな、と、どこか怪我してるんだろうかと見てみるが、よくわからず溜息をついた。とにかく、こんなところでぼんやりしているのはまずそうだと辺りを見回す。

（三途の川……じゃなさそうだなあ。花もなければ、肝心の川もないし。さっきからちくちくするのは、枯れた葉っぱみたいだし……）

仕方ない、と立ち上がった涙は、すぐに「ひっ」と声をあげた。

それは、いつのまにか目の前を黒い大きなものが塞いでいたから。

「く、ま……！？」

「見つけた！ 何をしているんです、逃げますよ！」

突然強く腕を後ろに引かれ、その瞬間涙の目の前にバチバチと光るものが横切り、熊が大きく仰け反った。

見知らぬ土地―2

「こっちです！」

「痛っあ、待ってっ、くださ……っ」

頭に響く男の声。強く腕を引かれた涙は、痛みに悲鳴を上げる。

「え？ どこか怪我をされているんですか！？」

涙の手を引いた男は慌ててその身体を戻し、涙を見た。痛みに歪む視界の端でその声の主を見た涙は、少し驚きに目を見開く。

さらりと長すぎず短すぎない美しい金の髪に、整った顔立ち、そして薄い唇から紡がれ低すぎず高すぎず、透き通るような思わず聞き惚れてしまう声。

何より、切れ長の目から覗く瞳は引き込まれてしまうような海を思わせる青で、息を飲んだ。

（が、外人さん？ 顔は、そんなに日本人離れてない気がするけど……）

「服の上だとわかりませんね。すみません、強く引いてしまって走れそうですか？」

「えっと、あ、その……」

とりあえずずりりと足を引きずって、男から顔を逸らし先ほどの熊とは反対の方へ移動しようとした涙は、がつくりと膝をついた。

「駄目そうですね。すみません、戦います。隠れていてください」「た、戦う？」

自分でも驚く程すんと地面に落下するように膝をついた涙は少し涙目になりながら質問したが、彼は答えず涙の腕をゆっくりと引いて自分の後ろに下がらせた。

「少し驚くかもしれませんが、必ず護りますから」

「は……い」

半ば呆然とし、頷くや否や涙は傍にあった割と大きめの木の傍に

押しやられ、一瞬だけ穏やかな笑みが向けられたが青年はその場から離れてしまう。

ペタリと座り込んでしまい枯れた葉が手の平にちくちくと刺さって痛んだが、そんな事も忘れて涙は目の前に現れた巨大な熊に驚いて悲鳴を上げた。

「落ち着いて下さい。隠れていて！」

青年の声が聞こえて、痛む身体を押さえつつ慌てて木に身を隠す。唸り声を上げるものはよく見ると全体の雰囲気は熊の様に大きく手に爪が覗くものの、頭は狼のようで口からは鋭い牙が覗き、長い尻尾が見える。尻尾がダンダンと地面を叩いて木の葉が舞った。

（違う……熊じゃない）

「なに、これ」

つい口から出てしまう言葉。ありえない。あんな生き物知らない。そう呟きながら首をふるふると横に振ってみるが、視界からそれが消える事はない。

青年はなにやら腰から外すと、手を大きく振った。

「あなたの相手は、私です」

熊らしきものが悲鳴を上げた涙に向かってこようとしたところを、青年が剣を突き出し止めた。

剣は青いような、紫のような光を放っていて、パチパチと音がする。

（……雷みたいに見えるのだけど、そんなまさか）

涙が目を見開いて少しだけ身を乗り出してしまったその時、熊が手を振り上げる。青年に鋭い爪が向かい、思わず頭を抱えて叫んでしまう。あんなものに当たったら、人なんて、そんな恐怖が頭を支配して。

しかし果然と木にしがみついてそれを見ていた涙の目の前で青年はその光を放つ剣をあつという間に熊に突き刺し、刺された巨体は強く光ったかと思うと大きな肉片となつてばらばらとその場に崩れ落ちた。

「……っ！」

あまりの光景に絶句し、ひどい吐き気が涙の身体を襲う。

（そんな、そういうえば薬、飲んでなかった）

涙が必死に耐えて口元を手で覆っていると、背に暖かいものが触れた。

手だ。

さっきの青年が心配そうに顔を覗き込んでいて、その手は涙の背をゆつくりと撫でている。

「……ご、めんなさ」

「謝る事はありません。目の前で戦闘をしてしまい申し訳ありませんでした。立てそうですか」

ここから離れたい。そう思い頷こうにも、胃の不快感に耐える事もできそうになく涙は無言で小さく頭を振った。

「そうです、ね。すみません。先程の戦闘で、驚いてますよね？
とりあえず、この先に私が使ってる小屋がありますから、一旦そこ
に行って話をしましょう。休ませてあげたいところですが、ここは
危険です。先程の戦闘でまたあれが寄ってくるかもしれません」

「……はい」

ゆっくりと手を貸してもらい涙は立ち上がり、状況を把握しよう
と深呼吸し顔を上げた。

やはり景色は変わらない。鬱蒼とした薄暗い森の中。数歩先には
先程の怪物の肉片。そして、自分の身体を襲う痛みは本物。これは、
夢ではないのだと涙は一度目を閉じ首を振った。

一体先程のあれは何なのか。ここはどこなのか。
支えられたままゆっくりと歩き、唇を噛み締めた。

……それにしても、よく見ると彼は変わった服装をしている、と、
涙はそつと青年を見た。

黒のパンツに濃い青色の何やらバッチのついたジャケットを羽織
っでいて、それはまだ普通の範囲……、と何とか自分を納得させた
が、腰のベルトには涙にはよくわからない形の綺麗な石や杖に見え
る物等がついていて、腕や、上着に隠れているが足にも同じように
ベルト。小さな短剣もある。微妙に、生地も涙にとって馴染みある
物とは少し違うようだ。

そういえばさっきの剣はどこにいったんだろう。そこまで考えて
ふと顔を上げると、彼も涙の様子に何か思うところがあるのか、そ
の視線が涙の身体をじっと見つめている。

「あ、あの」

「ああ、すみません。えっと、鞆に何か護身用の武器は入っていますか？」

「ぶ、武器!？」

（何言ってるの、そんなもの、普通持つてない……っ）

焦る涙が困惑した表情で背の高い青年を見上げると、一度その表情を見て「あ」と呟いた青年は少しだけ視線を泳がせて、口元に考え込むように握った手を当てた。

「ない……ですよね」

「いや、えと、あの」

絶対おかしい。そうは思うのに、彼が冗談を言っているようには見えない涙は、返事にならない言葉を繰り返す。

「あ、小屋が見えました。少し待っていてください」

そんな涙を苦笑して見つめ、青年は涙を引いて小屋の傍までくると、中を確認してほっと息をつく。

「……大丈夫そうですね。中に入って話しましょう。守護壁を張りますから、安心して下さい」

守護壁って何。そうは思ったのだが、涙はそのまま扉を押さえている青年にぺこりと頭を下げて、小屋の中へと足を踏み入れた。

小屋の中は棚とテーブルに椅子が二脚、ベッドが一つ。殆ど必要最低限と思われる物しか置かれて折らず、極稀に利用する程度といった様子が見て取れる。

彼は扉を閉めるとベルトから外した何かを手の平で握り閉め、ぼそぼそと何か呟いた。途端に冷え切った小屋の中が少し暖かく感じ、張り詰めていた気が少し軽くなる安心感に包まれる。

「……寒いですか？」

「少し」

震える涙を見て、彼は優しく声をかけてくれる。

ぽつ、と急に灯りがついて、はあと深く息を吐く。

寒くて震えているのか、恐怖で震えているのか。

「これを」

青年は腕のベルトを外し、ジャケットを脱ぐと涙の肩にそっとかける。暖かいジャケットが、涙の震える身体を包む。

「あの、私」

「待って。落ち着いて、ゆっくりお話ししよう」

青年は安心させるようにか、にっこりと微笑んだ。

見知らぬ土地―4

「まず、そうですね……私の名前はカイトと言います。カイト・フォルストレ。フォレストーン騎士団の能力者です。お名前、伺っても？」

目の前の青年はさらりと笑顔で自己紹介してくれる。でも（どこから……、でも、ちょっと待って）

「フォル、フォレス……え、外国、じゃないし……やっぱりここ、日本じゃ……」

「ニホン？」

「えっと、私、日本の」

駄目だ。落ち着こう。そう考えて涙は息を吐く。説明してもわからないかもしれない。先程の熊にしても、雷のような剣にしても。

「やはり、異世界の方なのですね」

「……え？」

涙が驚いた顔をするのも無理はない。思った矢先に、目の前の人物から異世界だと言い出すのだから。

「私、この世界の人じゃ、ないの？ 騎士団って、何？ あなたは、何？」

涙は今更ながらどうして黙ってついてきてしまったのだろうと唇をかみ締めた。化け物が出て、混乱して、ただ一人目の前にいる人間についてきてしまった。……助けてくれたのは、間違いないのだけれど。

「落ち着いて……私はあなたに何かしようとしているわけではありません。騎士団は民を助ける者です。あなたに何もしないと誓いますから、落ち着いてください」

「……すみません……私の名前、るいです。えっと、蒼井、涙でる

いが名前」

「ルイさん、ですね」

どうするのがいいのかわからないものの、今はこの人を信じるしかないと名を告げて顔を上げれば、カイトはその整った顔を複雑そうに歪め困ったような表情をしていた。その表情が今の状況を考えて微妙に違和感を感じて、涙はその顔をまじまじと見てしまう。しかし、視線に気がつくとかイトはすぐに表情を戻し、柔らかい優しそうな笑みを浮かべて「すみません」とだけ言った。

「何か、ご存知なんですか」

「……いえ、そうですね、とりあえず、詳しい事は明日にでも。今日はもう遅い。明日、王都にお連れします」

「えっと……」

いきなり王都と言われても、意味がわからず涙は黙り込んだ。わからない事だらけだ。このまま休むと言われても、確かに疲れきっているけれど正直無理そうだ。

好きでよく読んでいた本の中にあったように、異世界に飛ばされるなんて事がまさか自分の身に起きたのだろうか、と少ない情報の中から考えて、眩暈がした。それに、目の前の何も言ってくれない青年は明らかに何かを知っている。

しばらく涙を見ていたカイトは、急に目を見開いた後、すみません、と頭を下げた。

「突然こんなところに来られたのに、何も知らないというのは落ち着きませんね。気が利かずすみませんでした。そうですね、この世界の事をお話しましょうか」

「……すみません、助かります」

カイトは微笑んだ後ゆっくりと話し始めた。

「まず、ここは王都フォレストンより少し北にある森です。この……世界は、王都フォレストン、それから各守護神の町が集まっている世界です。王は統べる者、平和の象徴、光の神の加護を受けたもので、光の民。他、4つのその町を守護する神の加護を受けた

民と長がおり、成り立つ世界です」

ゆつくりと、一言一言を選ぶようにカイトは言葉を続ける。異世界の住人に説明するのが慣れている、というわけではなさそうな不安げな表情で、一旦区切り涙の顔を覗き込んだのは、確認の為だろう。……正直難しくてよくわからないのだけど、涙は一度頷いた。

「もし話の途中で疑問があれば、どうぞ遠慮なくおっしゃって下さいね」

「じゃ、じゃあ、他の4つって」

「王都は光の民。他は水の民、風の民、地の民、火の民になります。それぞれその土地の神の加護を受けています。水の民なら、水の神の加護を」

「……カイトさん、は」

「ああ、そうですね。私は、光の民です。先程魔法を使用しましたが、あれは光の民にしか仕えない魔法なんですよ」

そう、青年は先程、何もないところから剣を取り出した。しかも、雷の様に光る剣を。

「民の中には、魔力を高く持って生まれてくる者もいます。そういった人間はその地の加護を強く受けており、水の民なら水の魔法、風の民であれば風の魔法を使用します。私の場合は光の民ですので、各地の神に加護を受ける事ができればすべての魔法を使用できます」

「……光の民は強いんですか？」

「光は統べる者ですから……ですが、強いとはいえませんが。いくらすべての魔法を使えたとしても、威力が強いかどうかはその使う人間次第ですから」

「なんか、難しいです」

話の内容が自分の住んでいるところとは違いすぎて、混乱した涙がそう言えば、すみません、とカイトは笑顔のまま申し訳なさそうに眉尻を下げた。

「あ、すみません。えと、説明がわかりにくいんじゃないかって……あ

まりにも、違いすぎて。私の世界に、魔法なんてないんです。物語では出てきたりするけど、見るのは始めてだし……正直見ても実感が、ないんです」

慌ててまくし立てるように言葉を続ければ、カイトはふつと笑ってその手を涙の頭に優しくのせ、落ち着くように、と声をかけてくれる。

随分と大人っぽい人だなと涙は顔を上げて、そこで、ああ、私が子供扱いされてるのかもしれない、と少し落ち込んだ。自分の見た目もあっていつも少し幼く見られるのは慣れていたのだけけれど。

見知らぬ土地―5

「疲れましたか？ 明日には、王都にご案内します。ここは闇の者……魔物がいて、危険ですから」

「闇の者、ですか」

もう、これ以上言われてもわからないかもしれない。とぼんやりと目の前にいる人物を見上げれば、彼は優しくそこに微笑んだまま。
「ええ、先程説明した町以外に、闇の神の加護を受けた……闇の民も存在します。最も、魔物と呼ばれる存在で人間を攻撃してくるものが多く、拠点がありますが町があるわけではありません。先程の大きな生き物もそうです。町を一步出ればそこはいつ魔物が現れるかわからない危険な場所になります」

「……怖い、世界ですね」

「すみません。こうなったのも……いえ。そろそろ、休みましょうか」

「えと、最後に一つだけ、いいですか？」

突然顔を上げた涙に、カイトは一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに穏やかに笑う。何ででしょうか、と言われて涙は少し迷ったように視線を泳がせたが、一度ぎゅっと目を瞑り、そして真っ直ぐカイトを見た。

（説明してくれたのは、この国の事、だけ）

「……あなたは私が異世界から来たってすぐに認めてこの世界の事を教えてくれたんですよね。……つまり、こんな事をすんなり信じる理由あるんですよね、知ってるんですよね？ 私はそれが一番知りたいです」

ぐ、と前に詰め寄り、涙はカイトを見る。彼は視線を泳がせることなく真っ直ぐに涙の瞳をしばらく見つめ、その後息を吐いた。

「……すみません。そうですね。……ですが、申し訳ありません。心当たりはあるのですが、詳しくは」

「いいです、教えてください。何もわからないほうが、その、落ち着かなくて」

「……占い、で。異世界の少女現る、と。探すように言われて、私はここに来ました。けど、まさか本当に異世界から来られた少女に私がこうして会うことが出来るとは思わず」

「占い……？」

「ええ、数ヶ月前、ですね。王都の占い師が、そう預言しました。異世界の光の加護を受けた少女現る、と」

「え？ 光の加護、ですか」

「すみませんが、ここでは詳しくは……」

「あ、そう、ですよ」

つまりどういう事なのだろう、と涙は考えて首を捻った。よくわからない。今まで普通……かどうかは置いておいたとしても、日本で暮らしてきて、魔法なんかなくて。

そんな話をいきなり飲み込めといわれても難しい。

そう考えて俯いた涙は、視界の端に映る輝きにぎよつとした。

「えっ!？」

「どうしました？」

カイトは、急に髪の毛を引っつかんで驚愕の表情を浮かべる涙を覗き込む。

涙は少し青い顔をして、自らの濃い金色、蜂蜜のような色の髪を見つめた。

「金髪……!」

「……え？ そうですね、綺麗な色だと」

「で、でも私、黒髪の筈で」

「黒？ ですが、あなたは光の加護を受けた者の筈ですから、金で間違いないと……」

光の加護を受けた者は、ほとんどが金色の髪を持っています、とカイトは首を傾げて呆然としている涙に教える。

（色、変わるんだ……もう驚く事がありすぎて、あまり驚けなくなってきた）

「……私からも一つ、いいですか？」

「え？ あ、はい」

考え込んでいる時に、突然カイトから話しかけられ涙はびくりとその顔を見上げた。

「その……泣きたくは……怖くは、ありませんか」

「……怖いですよ？」

（今だって、びっくりして、怖くなって、あ……）

そうか。もしかしたら、普通に考えたらいきなり異世界になんて飛ばされたら、と考えれば、こうして話しているのはおかしいのかもしれない、と、そこで漸く涙は気がついた。もっと、泣き叫んで喚いて、……帰して、なんて訴えるものかもしれない。そう、泣くはずなんだ。けれど、もともと表情にあまり出ない上に、涙はそれをする事ができない。いや、泣くことを思いつくことすらなかった。そんな事は、言うなれば『慣れてない』

「……驚いて、ます。ただ、そうですね。驚きすぎて、どうするのが普通かわらなくなっちゃいました」

涙が困ったように瞳を伏せてしまい、その様子をじっと見ていたカイトは、そうですかとだけ言葉を返してすぐに、ではと続ける。

「お疲れでしょうから、そちらでお休み下さい。簡易の休息所ですので、寝心地は……あまりよくはありませんが」

カイトが指差すのは、確かに硬そうな小さいベッド。しかし涙はそれを見た後きよきよと辺りを見回して、あの、と恐る恐ると言った様子でカイトを見た。

「ベッド……」

「すみません。初対面の男がいては寝にくいとは思いますが……とはいっても、私が外に出ては守護壁も張れませんし、申し訳ありませんがこちらで休んで下さいね。私はここで休みます。もちろんあなたが困るような事はしませんから」

少し距離を取り、ここで、とベッドからは大分離れた位置でカイトは座り込んだ。涙は言いたい事はそうではないと、慌てて手を振った。

「いえ、そうじゃなくて……あの、私、ここで休みますからベッド使ってください」

「……え？ なにを言っているんです。女性を床で休ませるわけには」

「でも、見たところベッド以外に毛布の類もないですし。風邪ひきます」

困ったように涙は俯いた。

自分も床で寝たら風邪をひくかもしれないというのは、わかっているのだろうか……カイトはふっと笑い、どうするべきかと部屋を見渡した。確かにベッドに申し訳程度に薄い布があるだけで、他に体を包むような物はない。守護壁を張った事で多少部屋は暖かいが、気温は低い。今部屋を照らすのは小さな火一つで、守護壁を張っている今その火を大きくして気温を上げる事はカイトの体力的に望めなかった。

ふとそこまで考えたところで少女の身体がカタカタと震えている事にカイトは気がついた。薄明かりでわかりにくいのが、指先も唇も白く、涙の着ている服はかなりの薄手。小屋に到着した時にジャケツトを肩にかけたものの、スカートで足はむき出しで、おそらくとてつもなく寒いのだろう。

「……何もしないと誓いますから、一晚我慢できますか？」

「え？」

カイトはゆっくりと驚かさないように立ち上がり、涙の手を取った。たった一つしかないそのベッドに向かい布を寄せると、涙の身体に腕を回した。

「手、これ程冷たくなるまで気づかず、申し訳ありません。この薄い布団では身体は温まりませんね」

「え？ あの」

涙は抱き込まれ混乱した頭で、おろおろと視線をさ迷わせる。

カイトは落ち着かせるように手を涙の頭に動かして、髪を梳く様に上下に動かした。

「怖がらせて、すみません。絶対に何もしないと誓いますから、一晩だけ信じてください」

「信じる？」

カイトは撫でていた手はそのままにもう片方の腕でゆっくりと涙を引き寄せ、そのままベッドに座らせると、横たえる。自分が抱き込むような形で。

「……つか、カイトさん……！」

涙は引き寄せられた彼の胸に手を添え、慌てて押してみるも、まるで抱き枕の様に抱えこまれていてぴくりとも動けない。暖かい体温に、髪をくすぐる彼の吐息に驚いて、涙は目をぎゅっと閉じた。

「初対面の女性に、とても礼儀の欠いた事をしているという事はわかっています。ですが……もう少し魔力が高ければ部屋を温める事もできたのですが、申し訳ありません」

「カイト、さん」

（そういえば、彼はずっと謝っている気がする。魔法の事はよくわからないが、守護壁というので彼はもしかして魔力とやらを随分と使っているのだろうか。自分を護る為にあの魔物と戦った時も、魔法を使用していたのだし）

考えながら自分を包み込む腕を押すことを止めた涙は、ふ、と一
つ息を吐いた。「……すみま、せん」

一人暴れるのが申し訳なくなつて、一言謝罪して離れようともが
くのを止めた。彼は優しくあやす様に頭を撫で続けていて、涙の顔
は丁度彼の胸の辺りにある為に表情は見えないが気を使ってくれて
いるのが何となくわかる。

（すごい……いい人なのかもしれない）

落ち着いていて、大人で。ずっと自分を気遣っていた事を思い出
して、暴れた自分が恥ずかしくなる。

と、包まれる温もりに、涙は疲れなのか急速に眠気に襲われた。
そういえば、身体は重くてもものすごく疲れている。いろんな事があ
ったから、当然かもしれない。

涙は初対面の男の人に抱かれているのに、いい人なのかもしれない
いけれど完全に信用していいものかすら迷っている状態なのにおか
しいな……と、ぼんやりした頭で自分は結構神経が図太いのだろう
かと考えて、肯定して、ゆっくりと襲い掛かる睡魔に抵抗する事を
諦めた。

――何故、泣かないの？

ルイは、ぼんやりとした意識の中でゆっくりと誰かの声を聞いた。それは、自分がきつとおかしいからだ、と答えた。

慣れているから。自分は、幸せを諦めてしまったから。何が起きても、きつと未来を危惧してしまう事を止めてしまったから。

母と、仲が悪かった。ルイは母が好きで、好きで。ずっと母の為にと努力したつもりだったのだが、結局妹の舞と「同じ」にすらなる事はなかった。

これ以上居場所のないそこにいるのが嫌で、家を飛び出して。フリーターで生活を繋いで、将来はいつか、友人から聞くような暖かい家庭を持つことを夢に見て、夢を持ち、何とか生活していたルイを襲ったのは病魔だった。原因不明の病は、僅かだが熱が下がらないという微妙な症状を続けルイの身体から体力を奪い、生活力をゆっくりと奪っていく。その中でとうとう、少女は将来幸せな家庭を持つという最大の夢すら諦め始めてしまった。

諦め。それはいけない事だと頭ではわかっているのだが、身体がどうしてもついていかず心も納得はしなかった。その状況で必死に、なんとか一人でも暮らせるようにという事だけ考えて生きていたルイは、何が起きてても、もういいや。と思っていたのかもしれない。夢を抱いていた時は、あんなにも未来に期待して、生きたいと強く願い続けていた筈なのに。

（明るい……）

うつすらと視界に光が入り込み、ルイはゆっくりと瞼を押し上げ

た。揺らぐ視界に入り込む光に、今日はバイトの日だったか、と考
えたルイは、自分を包み込む温もりに気がついてびくりと身体を奮
わせた。

「……起きました？」

「……、あの、えっと……おはようございます……っ」

「おはようございます。そんなに怖がらないで」

（そうだ。私、変なところにきちやっただけだっけ）

カイトはふつと笑ってゆつくりと身体を起こす。離れた温もりに
身震いし、身体を縮めれば、同じ体勢で固まって眠っていたせいか
酷く体が痛んだので、仕方なくゆつくりと身体を起こした。

（絶対ありえない。男の人と寝るなんて。私、さいあくだ……）

昨日は酷く疲れて眠かった気がする。そのせいだろうか。でも、
神経図太すぎる。そんな事を考えていたせいかころころと表情を変
えるルイを見て、カイトは少しだけ安心した。

「……大丈夫、ですか？」

「え？」

カイトの手がゆつくりと伸び、ルイの頬に指先が触れた。

「昨日はすみませんでした。……怖くないはずは、ないのに」

「え？……私、何か言っていました？」

「……いえ、特には。食事、できそうですか？」

「え、えつと、はい。あ、できれば、お水いただけますか。薬飲ま
ないと……ああ、昨日、飲んでいないや」

カイトは立ち上がり荷物を置いている一角に移動しながら、少し
心配そうに振り返る。

「どこか、体調が優れないのですか？」

「あ、その、持病で。微熱が、下がらなくて。そのせいでいろいろ
……昨日もそのせいで随分寒かったんだと思います。すみません、
迷惑かけて」

「……いえ」

カイトはそれで体温が少し高かったのか、と何となく自分の手を見た。彼女は細く、でも柔らかくて、確かに体温が少し高いのかとても暖かかった。柔らかく暖かい、ふわりといい香りがする女性を抱き締めて眠る事で、カイト自身は驚く程ゆつくりと休めたのだが、それは彼女が体調を崩しているサインだったのかと気づけなかった自分に少し苛立ちを覚える。

「薬は、熱を下げるものですか？」

「いえ、熱は微熱で、たいした事なくて薬使えないんです。飲むのはその……吐き気止めといいますが」

「すみません。辛そうですね。実は、ここには簡単なものしかなくて。食べれそうですか？」

そういつてカイトは荷物からパンを取り出し、ルイに見せた。それは柔らかさうには見え、日持ちするジャムが一つあるだけだ。

「大丈夫です。すみません」

「いえ。食べたら、出発しようと思うんですが」

「はい。お願いします」

ルイはパンを受け取りながら、自分の体力で大丈夫だろうか、とベッドの脇にある小さな窓の外を見つめた。天気はおそらく、悪くはない。

「ここから四時間程歩かなければならないと思います。休憩を挟みながら行きましょう」

「……すみま、せん」

自分は明らかに足手まといになるだろうと考えて、ルイは俯いた。でも、ここで彼においていかれてはルイはどうする事もできない。そこまで考えて、どうして彼はここまで自分に優しくしてくれるのだろうか、と首を傾げた。優しくされるのに、慣れていなかった。

「いえ、気にしないで下さい。一晩あなたで暖をとらせてもらいま

したので、お礼にとでも」

カイトはそういつて、にっこりと笑った。少し楽しそうな声に、ルイはすぐに顔を赤くする。

「わ、私……っ」

「すみません、意地悪が過ぎました」

くすくすと楽しそうに笑うカイトの手がルイの頭を撫で、子供っぽかっただろうか。ルイは俯いて少し唇を尖らせた。そんな姿が、子供っぽいとは本人は気づかないが。

パンを食べ終え、水を貰い薬を飲んだルイは何やら荷物を漁っていたカイトに、布を手渡される。広げてみるとそれは服で、厚めの布で出来ているズボンと、首まで覆う長袖の上着は、男物だ。大きい帽子も一つ渡される。

「服が、それしかなくて。今の服ですと、日は昇りましたが寒いですね。それと……その、もしかしたら目立つかもかもしれません。男物ですが、そちらの方が王都に入った時も目立たないと思います」

申し訳なさそうにカイトがそう言って、出ていきますね、と外に消えた。

どうしようか、と考えて、今の自分の服はきつとこの世界では目立つ格好なのだろうと思いつたルイは、それは嫌だとすぐに着替え始める。

しかし、身長も低く細身のルイの身体は服の中で泳ぎ、姿見はなががおそらくずいぶんと変な格好をしているだろう。

なんとかズボンはベルトで絞り上げ、大きな上着はどうしようもないのでそのままにして諦めて、慣れない金の長い髪を高いところで結い上げ帽子で隠す。どうせなら、格好だけでもぱっと見男のほうがマシだ。最後に来ていた服を丁寧に畳み鞆に入れると扉をゆっくり開けた。外で待っていたカイトが、少し驚いたように目を見開

く。

「すみません、そこまでサイズが合わないとは思いませんでした」

「えと、あの、ごめんなさい」

居た堪れなくなつて俯けば、上から少しだけ笑い声。

「王都についたら、服を揃えましょうね」

「……あ、の。私、お金……これ、使えませんか？」

鞆から取り出した財布の中のお札を一枚取り出すが、カイトは首を傾げる。

取り出したのは、一万円札。元の世界であればこれである程度できたのかもしれないのだが

「それが……あなたの世界のお金、ですか」

「やっぱり使えないんですね」

どうしよう、とルイは項垂れた。これでは、王都についてもどうしようもない。

「まあ、いろいろな事を含めて話し合ひましょう。安心して下さい。護りますから」

「……、何で、ですか？」

「……？ いけませんか？」

しばらく思案するように顎に手を当てていたカイトは、ふといきなり少し困つたように笑い、下心はありませんよ？ と言つた。

「そ、そんなつもりじゃ」

カイトはまだくすくすと笑っている。悪い事を言つたと少し俯けば、ふわりと頭にのるのは彼の手。

「気になさらないで下さい。いきなり何もわからないあなたを放つておく事もできませんし、好きでやっている事です。……子供は甘えていいんですよ」

「こ、子供？」

「ああ、そういえば……私は23歳なのですが、あなたはおいくつですか。13、4くらいでしょうか」

「……19、なんですけど」

「……ええっ？」

しばらく目を見開いて呆然とルイを見ていたカイトは、我に返るとすぐに頭を抱えた。小さな声で、「すみません」と聞こえる。

「……大変失礼な事をしてしまいましたね、昨日も含めて」

「わ、若く見られるのは、慣れてます……」

（何か、昨日からの態度に妙に納得がいった気がする……）

ルイはそう思いながら「昨日」という単語についてふと考えて、昨晚の事だと思い至り顔を真っ赤にしたルイの頭上で、もう一度「すみません」と声が聞こえた。

カイトはどうするべきかとしばらく様子を見ていたが、行きましようかとそつと手を引いてみれば意外にも素直にルイが従ったので、とりあえず二人はゆっくりと小屋を後にした。

カイトは宣言通り、ルイの様子を見ながら休憩を挟み、ゆつくりと進んでいた。途中昨日の熊程ではないものの、現れた蝙蝠のような魔物はすぐに魔法で倒している。

本で見るより実際に目にする魔法のすごさにルイは目を丸くするが、カイトはどこか慣れている様子で雷を出現させ、敵を一瞬で切り裂いていた。

「なるべく見つからないようにと術を施してはいるのですが、何回か戦闘になるかもしれません」

「すみません」

確実に足手纏いだと自覚しているルイは、ただただ申し訳なくて俯く。護身用の武器すらない。ここではカイトに護られるしかなかった。

「ありがとうございます、の方が嬉しいです」

「え？」

「昨日から、すみませんばかり聞いていますから」

「……それは、たぶんカイトさんもだと思えます」

「そうでしたか？」

顔を上げると、カイトはにこりと微笑んでいて。

（綺麗な顔だなあ。背、高いし。もてそう）

そんな事考える余裕が出てきた事に、ルイは苦笑した。

「……ありがとうございます」

「ええ、どういたしまして」

王都への道は、初めこそ獣道を歩くようなものだったが、徐々に道らしくなり、今歩くその場は確かに人の手入れがされているものだ。

しかし、それはルイにとって見慣れているアスファルトではない、

土の道。あたりは緑も多く、時折咲くのは白、赤、黄色と色とりどりで美しく、景色は素晴らしいものといえる。ただ、見える草木も花々も見知らぬものだった。わかるのは、空の雲は同じというだけ。

「私は……」

「え？」

「何で、ここにいますか……？」

ぼんやりと空を見たまま呟くようにカイトに尋ねるルイの表情からは、何も読み取れない。

その表情を見て、昨日から違和感があつたが、随分と表情が変わらない子だ、とカイトはその瞳を見つめる。ルイの瞳にはただ青い空と、自分が映し出されているだけだ。

「詳しい話は、王都でという事になりますが……昨日お話した闇の民の事を覚えていますか」

「人を襲う者達ですよ」

「ええ。そいつらは……光の民にしか、倒す事はできません」

「水や、風は駄目なんですか？」

「ダメージを与えることは可能です。ですが、この世から消し去る事はできません。それをできるのは光の民だけです」

「……光の民は、すごいですね」

「ですが、その代わり光の民は能力者の数が少ない」

民の数は光、そして他の四つの民も、そう変わらない。ただ、魔法を使う事ができる能力者の数は光の民は極端に少ない、とカイトは説明した。

つまり自分は、とルイは考えて、検討をつけた。

「私は、能力者ですか？」

「……おそらくは」

「……わかりました」

それ以降、ルイは特に何もその事に触れることなくただ黙って力

イトの横を歩いた。

カイトは何かしら抗議の声があると思い構えていた為、拍子抜けしたように呆然と横目でルイを見ていた。

気づいている筈だ。ここに来てしまった自分が、能力者として利用されるといふ事を。まだ出会ったばかりではあるが、少し感情に乏しい感じはあるもののそれに気づかない程抜けているというわけでもなさそうなのに、と。

そんな事をカイトが考えている横で、漸くルイが名前を呼ぶ声が聞こえて慌てて返事をすれば、ルイは前を指差していた。

「王都は、あそこですか？」

ルイが指差す先には、確かに町が見えていた。

白く高い建物と、人々が生活する沢山の家の屋根が見える。そしてそれをぐるりと囲う堅い石に守られた街。

「ええ、そうです。もう少しですから、頑張ってくださいね」

「大丈夫です。あの……」

「はい？」

「私、お役に立てますか？」

その台詞に、カイトは驚いて足を止めた。この少女は、一体どういう考えを持っているのだろう。

「……私が言うのもなんですけど、嫌ではありませんか？ 私の話を聞いて、あなたは自分が何をさせられるか気づいたのでしょうか」

「まだ、詳しく聞いたわけじゃないですし……それにカイトさんは私を助けてくれたんです。あそこであんな熊さんにやられて死んだよりは、マシかもしれないし……話聞いてみないと、わからないから。それに……」

ルイはそこで一度言葉を切って、カイトの顔を覗き込んだ。急に目の前にさらりと金の髪が見えて、カイトは小さく「わ」と声をあげた。

「カイトさん小屋を出た時に、安心して下さい、守りますからって

って言ってたじゃないですか」

「……そうですね」

ルイはあくまで真剣な表情だったのだが、カイトが少し赤くなっている頃。王都の門からは二人の姿を見つけた青年が一人、ふつと笑って二人のほうへと歩き出していた。

見知らぬ土地―8

「あら、お帰りなさい」

少女の楽しそうな声が、暗い室内に響いた。月明かりすら届かない部屋で、ギィ、と扉が開く音がする。

「そう、あいつを殺すのは失敗したの。……いいわ。話を聞いて、どう抵抗するか見せてもらうのもいいかな、なんて思っていたところよ。こちらにも、準備が必要なものね……？」

少女以外にこの部屋に人間はいない。少女が話しかける相手は、暗闇に溶け込んでいるのか、それともいないのか。

「楽しそうだから、あいつらにおもしろい事だけ先に教えてあげようかしら。ねえ、あなたにも身体をあげる。あいつらに勝てる、極上の身体よ？ 嬉しいでしょ？」

少女がそう言って笑う。暗闇の中で、闇が集まる。

少女の目の前で、背の高い影がにやりと笑った。

「よお」

王都へ入る門の前で立ち止まっていたら、急に後ろから声をかけられて、ルイはびっくりして後ろを振り返った。

「何してんだ、カイ」

「……ライ兄さん」

そこにいたのは、カイトと同じ長身で、金の長い髪を一つに括った青年で。腰には長い剣を携えていた。

（顔、似てるなあ…… お兄さん、って言ったよね）

すつと整った金の眉に、長い金の睫。微笑む口は薄く引かれ、カイトと同じく吸い込まれそうな青い瞳。

ちらりと顔を見れば、その人物はじつと自分を見つめていた為にルイは困ったようにカイトを見た。

「ああ、私の兄なんですよ。怖がらなくて大丈夫です」

「はじめまして、ルイ、です」

「ライトって言うんだ。よろしく。で？ お前が連れてきたって事は、母さんの占い当たってたわけ？」

「……そうですよ」

ライトという青年はおもしろそうにルイをじろじろと見ていて、身長差のせいで見下ろされたままのルイは困ったように眉を顰めカイトの横から少し下がる。カイトの後ろに隠れるように身を引いたルイを見て、ライトはおもしろそうに笑った。

「ん？ お前に懐いてるな。珍しいな、何かしちゃったのか？」

「何かって何です。兄さんが怖いんだと思いますけど」

「何でだよ。美男子に見つめられて悪い気する奴はいないだろ？
なあルイちゃん」

「……怖いです」

「っ……くっ」

正直に口にしてしまったルイに、カイトは口を押さえて笑いをかみ殺した。ルイはいええ、しまったという顔をして「あ、あの」と謝罪しようと言葉を搜しているようだ。

「いいんですよ、ルイさん。ほつといて」

「なんだよ。結構言うなあ。で？ 何でそんな格好なわけ？」

「ああ、ちょうどよかったです、兄さん。彼女の服あまりにも寒そ

うだったから、小屋の着替え借りたんですけどサイズ合わなくてどこかい店知りませんか？」

「まあこの格好のまま母さんのところ行ってもなあ。よし、案内してやる」

ライトはそう言うとさっさと王都の門を抜けてしまった。門の脇には、兵士らしき人間が両脇に二人立っている。

（通れるのかな）

不安になって上を見れば、ルイの様子を見ていたのかカイトがにっこりと微笑んで「大丈夫ですよ」と手を引いてくれた。

門の兵に何か一言二言告げると、あっさりと門を通過できてしまう。

門の中はいきなり人が増え、ルイは思わず息を呑んだ。

（商店街……？）

門からまっすぐ大きな通りが続き、両脇にはたくさんの店が並んでいた。カゴを持って買い物を楽しむ人、店先で商品を持ち呼び込む人、ずっとまっすぐ続く道の先には、大きな城も見える。遠くに馬車も見えた。

店と店の間にある細い通りを覗けば、洗濯物が干された一般の家のような建物も見える。少し時代は違いかもしれないが本で見る西洋のような町並みだ、とルイは見入った。

「兄さん何で門に？ 王女はいいんですか？」

「母さんに言われてね。来るから、迎えに行けって言われて。まあ、いちゃついて帰って来るとは思わなかったけど」

「……いちゃついて？」

「お前が珍しく顔赤かったから。手なんか引いちゃってたし？」

「違います」

なんとなく話についていけず、店先を覗きながら歩いていたルイ

は、急に振り返ったライトに帽子を取られて足を止めた。

長いストレートの金の髪が、さらりと落ちて驚く。

「ひゃっ!？」

「お、可愛いじゃん!」

「兄さんっ」

「なんだよ、服選ぶなら似合う服選びたいだろー？ 髪で顔隠すのもったいないな。ついでに髪留めも買うか？」

ライトは楽しそうに言いながら、ルイの頬に手を触れそのまま髪を掻き揚げた。

（ど、どうしよう……!）

もちろん今までそんな事を男にされた事はなく、まして目の前で髪に触れる男性は自分で美男子だと言っていただけあって本当に綺麗な顔をしていたから、ルイは軽くパニックを起こした。

と、ぴつたりと固まってしまったルイの髪にそのまま触れていたライトの手が、ぴしやりと叩かれる。

「何してるんです兄さん。女性の髪に勝手に触れるのは失礼ですよ」

「でも、せっかく可愛いしさぁ。ルイちゃん大人になったら俺とどう？」

「え？ ど、どう？」

「兄さん！ 早く服屋に案内してくださいっ」

とうとう怒ったカイトがルイの手を引いて離れた。何だこの状況。ルイが混乱したまま辺りを見渡せば、店先で何事かとこちらを見ている数人を見つけて、恥ずかしくなる。

（二人ともかっこよくて目立ってる気がする……っ!）

今更ながら自分を連れて歩く二人の顔は美形すぎると認識して、ルイは手を伸ばして帽子を奪い取ると、慌てて被った。

「被っちゃうの？」

「……すみません」

「兄さんのせいで目立ったんじゃないですか。ほら、とっとと進んでください」

どん、とカイトに背中を押されて、ライトはぶつぶつと文句を言いながらも歩き出した。

「ほら、ここ」

そうライトが言つて案内してくれた場所は、木造の柔らかい雰囲気、可愛らしい外装の店だった。

扉を開けると、カランカランと音がして奥から優しそうな女性が現れた。

三十後半位だろうか。綺麗な金の髪を巻いていて、とても大人の女性だ。

「ライトくんじゃない」

「お久しぶり、ミラさん」

店員さんとライトさんは知り合いなのかな、とルイが考えていると、ミラさんのお店はこちらだったんですね、と驚いたカイトの声が聞こえて、どうやら二人とも知り合いのようだなとルイは二人を見た。

と、急に腕をつかまれて前にいたライトに引っ張られ再び帽子を取られた。

「突然で悪いんだけど、この子の服上から下まで見立ててくれない？ あと出来れば髪留めとかあるといいんだけど。いくらかかってもいいから」

「あら、新しい彼女さんかしら？ 随分若い子捕まえたのね」

「ら、ライトさん、困ります。私、お金……」

「いいんですよ、ルイさん。私が出しますから」

後ろからカイトが現れて、優しく頭に触れてそういった。

（そ、そういう問題じゃない……）

「あら？ カイトくんの方の彼女だったのかしら？」

「くそ、カイのいいとこ取り。違うよミラさん。まあ、任せていい

？」

「大丈夫よ、うちには雑貨も結構あるから、気に入るアクセサリーも見つかると思うわ」

ミラと呼ばれた女性はそう言っただけ微笑むと、こちらにどうぞとルイを奥へ案内してくれた。可愛らしい服がたくさんあって、出入り口付近には確かに髪留めやネックレスなどが並び小物も揃っている。「どっぴった服が好みかしら」

そう言われて、ルイは首を傾げた。並んでいる服は確かに可愛らしいが、自分が向こうで見るような服とは雰囲気が違う。この世界の服ってどういふのが普通なんだろうと考えてみたが、知らないものはどうしようもない。

「……えっと、あの、お任せします。できれば、あまりその……」

「ルイさん、値段は気にしないでくださいね」

いつの間にか横に来ていたカイトにそういわれて、ルイはまさに言おうとしたことを止められて俯いた。

とりあえず、隣に来てくれたのはチャンスだとちよいと袖を引いて、小さな声でカイトに「私、こういう服が普通なのかわかりません」と訴えてみれば、カイトは少し考えるように目を逸らした後微笑んだ。

「そうですね……ルイさんが特に希望がなければ、私も一緒に選んでも？」

「はい、助かります」

「少し待っていて下さいね」

そう言うときカイトはミラの元へ行き、何やら話し出すと二人で服を選び出した。

その間どうしようかときよろきよろきしていると、後ろでライトに呼ばれ、手を引かれる。

「ルイちゃん、いつこっちに来たの？」

「えっと、多分昨日ですけど」

「……え？ 昨日？」

驚いたように目を見開くライトの様子に、ルイは首を傾げた。

「ごめん。驚いた。……結構落ち着いてるから。いい子だね」

ルイが不安そうにしたのに気がついたのか、ライトがぼんと頭に手をのせてゆっくりと撫でた。

（……どうしよう、ライトさんも、私が子供だって思ってるっぽいなあ……）

否定しようかと口を開く前に、カイトに呼ばれる。どうやら服を選び終わったようだ。

「一着、着てみてください」

指差された方向を見れば、五着は並んでいる。どれもワンピースのようだった。一着ドレスのようなものがあるので、それは除外して、ルイは黒い長袖のワンピースを掴んだ。

生地はやはり知っている物とは違うようだ。袖口や裾、胸元に白いレースが施されていて、可愛い。

（……こんな可愛いのは、似合うかなあ）

悩んだものの、その服は一番レースなどが控えめなものだった。ピンクのフリフリしたワンピースには、さすがに手を伸ばせない。

「それがいい？ じゃあこっちに試着室があるから」

ミラに言われてルイは大人しく従い、もともと着ていた大きい男物の服を脱ぎ黒のワンピースを身に着けた。もちろん着こなす自信はないが、男物のサイズが合わない服よりはいい。

ここは好意に甘えよう。そう思いながらボタンを止め終わり、膝丈のふわりとしたスカートを少し摘んでくると服を見ながら鏡の前で一回りしたルイは、そのまま自分の顔を見つめて硬直した。

金の髪もひどく違和感があるのだが、それを見つめる自分の瞳の色が緑だったことに驚いたのだ。いや、よく見ると緑というよりは、青緑だ。

(……はあ。これも、光の加護が何とかって、関係あるのかな)

正直な話、髪が変わってるので驚いてしまったから今更瞳の色なんていいや、と軽く考え、改めて全身を見て、黒いワンピースは随分と長い金の髪を目立たせている事に気づく。以前であつたなら、黒髪に黒いワンピースは目立たなくてよく選んでいたはずなのだが、今回ばかりは失敗したかもしれないため息をついた。

「ルイさん？ 試着、終わった？」

ミラの声が聞こえて、慌ててルイは返事をして外に出る。

出てすぐに目が合ったのは、カイトだ。カイトはしばらくじっと見たあと、似合っていますよ、とにっこりと微笑んだ。

「サイズが合っていて良かったです。ミラさん、髪留めも見せていただけますか。あと、残りの服はうちに送っておいてください」

「ええ、わかったわ」

「の、残りの服？」

「気にしないで。ああ、これがいいですね」

カイトが微笑んだまま手に取ったのは、黒地の布に白いレースが縫い付けられた細いリボン。

ルイが何か言う前に、ミラがつけてあげると言つてすぐにルイの髪を結い上げ、リボンを結んでしまった。

その間どこかに行つていたカイトが戻ってくると、満足そうに頷いてルイに手を差し出す。

「いいですね。では行きましょう」

「え？ でも」

「お金ならもう頂いているわ。また来てね？ ……ライトくんは？」
言われて、そういえば扉の傍にいたはずのライトの姿がない事にルイは気づいた。

「母さんに呼ばれて、先に」

「……そう。わかったわ」

ミラにお礼を言って、カイトに少し急かされるように手を引かれて店を出たルイの目の前を、数人の男達が走り抜けた。

なんだか店に入る前と街の様子が違う気がする。そう思ってたきょろきょろと見回すルイに、カイトはゆっくりと声をかける。

「少し慌しいですが、大丈夫です」

「あ、はい。あの、服、ありがとうございます」

「ええ、どういたしまして。それで、この後ですが……お気づきでしょうが、王都の占い師……あなたがこちらに来ると預言した占い師は、私達の母親です。これからそちらに向かう事になりますが……具合は大丈夫そうですか？」

「大丈夫です」

どんな人だろう。どんな話を聞くことになるのだろう。

私はいつたい、何故ここにいるのだろう。

きっとその答えがわかる筈だ、とルイは唇を軽く噛み、カイトに続いて街を歩き出した。

「急げ！ 王女の護衛は！？」

「ライト様が戻られている！ 王は無事か！」

ばたばたと大きな門の前を、鎧に身を包んだ兵士達が走り回っている。見た感じ、会話の内容からしても、どうやらこれがやはり城らしいと納得したルイは、その様子に首を傾げた。

街を歩いている時に感じた違和感は、城に近づくにつれ確信に変わっていた。何かあったらしい。

「……カイトさん、何か、あったんですか？」

「大丈夫ですから、安心して下さい。あなたは私から離れないで下さいね。母は城で待っているそうですから、中に入りましょう」

城で待つって、ものすごくすごい人なのだろうか。すたすたと門を通り過ぎるカイトに手を引かれたまま城に足を踏み入れてしまったルイは、その内装にぎょっとした。

赤い絨毯、大きな階段。煌びやかな内装は、どこから見ても日本には存在しない洋風の城そのものだ。

やばい、自分は場違いだ。そう思うのに、先ほどからばたばたと走る兵士は、カイトを見て礼を取るものはいるがルイを気にしている感じはない。

もしかして、カイトはものすごい立場の人なのだろうか。城にもあつさりと入ることができたのだし……と考えてしまうと、ルイの身体は緊張で少しぎこちない動きになる。

「……ルイさん？ 大丈夫ですか？」

つい緊張してか、ルイが手を握り締めているのに気づいたカイトが顔を覗き込んできた。

「ひゃっ！ わ、あの、大丈夫です。すみません。緊張、して」

「城の中が少し慌しくて、申し訳ありません……大丈夫ですから」

カイトは相変わらずにこりと微笑んだままだったが、そこで初めてルイはカイトの様子がおかしい、と感じた。

よくわからないが、困ったように笑っているのだ。やはり、この城の混乱は何か嫌な事があったという事なのではないのだろうか。

「母が待つ部屋はここです。……いいですか？」

「はい。大丈夫、です」

本当は大丈夫なのかよくわからないが、どうにもできないのでルイは一度目を閉じて、深呼吸した。

カイトがノックすると奥で女性の声が聞こえて、カイトはゆつくりと扉を開けて、ルイの手を握り中へと入り込んだ。

「すみません、遅くなりました」

「ああ、待っていたのよカイト。……まあ、あなたがそうなのね。

わたくしは、リルと申します。どうぞ、お疲れになられたでしょう。こちらへ」

出迎えた女性は、なぜか緊張した面持ちで部屋の奥の長椅子を勧めてくれる。

「リル、さん。はじめまして、ルイです」

（……カイトさんに、似てる）

金の髪に青の瞳。優しそうなこの人が、カイトの言う占い師なのだろうと覚悟を決めて、女性の向かい側の長椅子に腰掛けた。

リルはにこりと微笑んだが、その表情は少し曇っているようだ。

「……あの、カイトさんは」

「あなたもこちらに」

声をかけられたカイトはそのままルイの座る長椅子の少し離れた場所に折り畳みの椅子を運んで座り、報告しなさいといわれすぐに口を開いた。

「昨晚北の森にて魔物に襲われている彼女を保護しました。彼女は……」

淡々と説明を始めるカイトの言葉は、母親にするものというよりは仕事の報告といった雰囲気だ。二人の表情を見るに、そうなのだろう。

「以上から、彼女が御告げ通り神子になるべく異世界より呼ばれた少女に間違いないと」

「……、神子？」

何も知らないと言っていた筈のカイトの言葉にルイは驚いて彼を見たが、カイトは目を伏せ「すみません」とだけ呟いた。

「お許し下さい。王によって、すべての話は私から話すように口止めされていたのです」

カイトとルイの様子に気づいたリルが、すぐにそう言葉を続けた。
「カイト。……いくつか教えてしまったのでしょうか？ どこまで？」

「……この国の五つの民と、闇の民の話は」

「はあ。気の優しいあなたの事ですから、そうではないかと思っていましたよ。ルイ様、これからわたくしがすべてお話致しますから」

ゆつくりと話し始めたリルは、ほぼカイトと同じ事を言った。国の事、光、他の民の事。

しばらくそれを聞いていたルイだが、不意に各地の神子という言葉葉を聞いて、ぴくりと反応した。

「各地には、神子という存在がございます。大抵は、その地の長の娘、町の姫が選ばれています」

「……、水の民なら、水の民の姫が、水の神子になるということですか？」

少し考えたルイがそう続けると、リルはちらりとカイトを見た。カイトが驚いて首を振ったので、ルイは慌てた。カイトが話したとなればまずい内容なのだろう。

「カイトさんから聞いたわけじゃ……そう聞こえたんですが、違いますか？」

「いえ。ご理解が早いので少し……随分と聡明なお方ですわ」

「……母さん、彼女は、十九歳だそうだよ」

「ええ？」

その様子について苦笑したルイを見て、リルは慌てて頭を下げた。

「え、あ、気にしないで下さい。えと、お話、続き聞いてもいいですか？」

神子と言った言葉が気になっていたルイが慌てて言うと、そうですねと同じく苦笑したリルが、では、と話を続ける。

「神子は、その民を護れるお力をお持ちの方です。守護の魔法を駆使し、闇の民から町を護れるお方です。王や街の長の守護結界とは違い、自由に動き戦える者」

「重要な役割という事ですよね」

「そうです。ですが……実は、王都にだけ神子がおりません」

「え？」

「今はまだ闇の民の勢力も弱く、光の民の騎士達や、他の民の力でまだ普通に過ごせておりましたが……もう何年も王都には神子様になられる方が、お生まれにはならず。このままではいけないとわたくしは、この地に伝わる神に、祈りをささげておりました」

そこまで聞いて、ルイはまさかと手を握った。先ほどカイトはルイを、神子になるべく呼ばれた少女の筈だと言ったのだ。

「あなた様は、異世界から来られた方でお間違いないませんか」

その言葉は、酷く緊張しているように聞こえた。少し、震えているかもしれない。ルイは首を傾げた。

「間違いないです。ここは私のいたところじゃ……つまり神様は、異世界の女を神子の代わりとして送り込んだって事ですか」

「……申し訳ございません……！」

ばつと、リルとカイトが頭を下げたのに、ルイは驚いて立ち上がった。

「わたくしたちの祈りは確かに聞き届けられました。しかし、まさか他の地の少女の人生を犠牲にする事になるとは思わず」

「え？」

違和感の正体に気がついた。リルは、自分の祈りのせいでルイを犠牲にしたと悔やんでいたのだ。

ルイは、この展開を呆然と「よくある異世界召喚ファンタジーだ」などと軽く考えていた。もちろんそんな話の主人公がする事をやる自信はないが、実感が沸かなかったのかもしれない。

呼ばれた理由が町を護るため。まさに、小説か漫画の世界だと。そして、そういった時は大抵町の人達は「やってくれ！」と言う流れなのだろうと思っていた。

謝罪されるとは思ってもみなかったルイは、本来驚くべきところとは別のところで驚いたのだ。

「えっと、え？ あの、頭を上げてください」

どうするべきかと頭を抱えなくなる。

自分はそんな大それた人間ではない。何もできないかもしれない。そして、正直な所ここに来たからと悔やんでもいなかった。まだ、何をさせられたわけでもなく、酷い扱いどころかとても親切にしてもらっている。そして、元の世界に執着もないから。

「カイトさん、あの」

「はい」

「私、何をすればいいんですか？」

「え？」

「だって今のままで私が何かできるわけじゃないんですよ？」

その言葉で、漸く二人が頭を上げた。驚くように目を見開いてこちらを見るのは、予想外の答えを言ったからだろう。

「お怒りでは」

「ないですよ。私、カイトさんに助けて頂いて感謝してます。そうでないと、私はえっと……北の森、で、死んでましたし」

呆然とルイを見る二人に、ルイは困ったように微笑んだ。

きつと、必要とされているのなら元いた場所よりルイにとって価値がある場所だという思いは、説明したところで理解はしてもらえないだろう。そんな事を考えて。

「それより、さっきからばたばたしてるのって、何なんですか？」

「あ……それは」

「闇の者が、南の門に現れました」

「母さん！」

「隠すのは失礼でしょう」

リルは、ぐつと手に力を入れ何かを決意したようにルイを見ていた。

「私、皆さんの力になれるような自信はありません。努力はしますけれど、魔法すらない世界から来ました」

「お気持ち、深く感謝致します」

深く頭を下げられ、ルイはすくと椅子に落ちた。

「本当に、何かできる自信はないですから」と続けたが目の前の女性はあるふると首を振る。

「王に報告して参ります。こちらでお待ち下さいね。カイト、あなたは神子様の護衛を」

「はい」

ぱたぱたと現れた兵士と共に部屋を出るリルを見送って、ルイは大きく息を吐いた。

大変な事だ。わかつてはいるが、元の世界に戻りたいという思いが沸かない自分に苦笑する。

この後いっただいどうなるのか。漠然とした不安を抱えて、ルイはカイトと共に静かにリルの帰りを待った。

王都南の門に現れた闇の者は、人だったらしい。

カイトに聞いた話によると、人型をした闇の者が現れ始めた事は、脅威らしい。動物の形をしたもの達より、知恵があるそうだと。そしてそれは、闇の神が力をつけた証拠だと。

――我々はずいに神子を手に入れた。その挨拶に來ただけだ。

そう言つて南の門に現れたニンゲンは、南の門の兵士を二人、空高く放り投げ、殺した。

南門の通りに、無残に変わり果てた二人の兵が落ちたそうだと。

その話を聞いたルイは、漸くその恐ろしさに身体が震えた。護れるのだろうか。何も力のない、何も知らない、元の世界ですら何もできなかった私が。

「神子、よく我が国へと参られた。話は聞いた。我ら光の民は、そなたを新たなる同胞と認め、協力を惜しまない。感謝する」

迎えに來たリルに連れられて行つた場所は、恐ろしく広い部屋だった。少し先に、大きな椅子に座つた男がいる。

この人が、王様なのだろう。

もう、後には引けない。でも、後悔という感情はなかった。

あの世界では死んだ。いや、すべてを諦め死んでいたような自分が、もう一度何かできるのなら。

「……頑張ります」

酷く頼りない言葉に聞こえたけれど、仕方ない。
リルは涙を流していた。

「神子様の護衛は、引き続き我が息子、カイトが任命されました」

リルが部屋に戻った私にそう言った。

「カイトはほぼすべての魔法を使う事ができます。きっとお力になりますわ」

傍にいた金の髪の兵士が、「カイト様は我が民の一番騎士です」と付け足した。

「やっぱりすごい人だった」

「え？」

「なんでもないです。カイトさん、ご迷惑をおかけしますが、よろしくお願い致します」

「とんでもないですよ、神子様」

必要とされているのなら、今はそれでいい。最大限の努力をしてみせるから……

第一章終了

契約と魔法―1

二日間。王都についたその日、王に謁見したその夜に、体調を崩したルイは高熱を出して寝込んだ日数だ。

原因が不明で医師が処置できず、二日目に漸く目を覚ましたルイが鞆にあつた解熱剤を飲んで何とか微熱にまで下がった。

三日目の朝訪れたカイトに、ルイはすみませんとずっと謝ってばかりだ。

しかも今いる場所は、カイトの家の一室らしい。城の敷地内にあるそうだから、恐れ入る。カイトの父が王の側近との事だった。

「頑張るって言うてすぐ倒れるなんて」

「いいんですよ。身体が弱いと聞いていたのに無理をさせてしまった私がいけませんでした」

高熱が続いていたせいで身体が痛み、ほとんど動けない為ベッドに横になったままのルイは、申し訳なくてカイトを見れずにいた。

朝からカイトはただ自分の隣にいて、こまめに濡れたタオルを取り替えては額に乗せてくれていた。

「もしや昨日、一昨日もそうだったのだろうか」と考えると、本当に申し訳なくて泣きたくなってくる。

「カイトさん……お仕事、は」

「騎士団には所属していますが、神子様^{カイト}の護衛に任命されましたので。あなたの傍にいるのが今は仕事ですよ」

ずっと無言が続いていた中突然の質問に、カイトは少し目を見開いた後すぐ微笑んでそう答えた。

「すみません……」

「神子様、謝罪は」

「その、神子様じゃなくて、ルイって呼んでもらえませんか？　すごく、変な感じがします」

その一言に困ったようにカイトは苦笑した。いけない事なのだろうか、とルイは考えて、それでもそんな大それた名前で、しかも様をつけられて呼ばれるのは嫌だところそりため息をついた。

「私まだ何もできないんです。カイトさんには、名前で呼ばりたいです」

自分の名を呼んでくれる人がいないのは寂しい。名前が好きだったわけではないのだが、どうも神子という呼び名は不安を煽り、寂しさを増徴させる。

「我儘、でしょうか」

「……そちらの方がよろしいですか？　では、元通りルイさんと」

「……呼び捨てで、いいですよ？　カイトさん、年上なのに」

「年齢は関係ありませんよ」

くすくすとカイトは笑う。とりあえず呼び方が戻った事にほっとし、ルイは目を閉じた。

「まだ本調子ではありませんね。ゆつくり休んで下さい」

「カイトさんは、暇じゃ、ないですか」

再び目を開ければ、タオルを取り替えようとルイの額に手を伸ばしていたカイトと目が合った。綺麗な青い瞳は真っ直ぐにルイを見ていて、少しだけ心臓がどくりと音を立てる。

「暇ではありませんよ。こうしてあなたの傍にいますから。それに、静かな時間は好きなんです」

（……すごい台詞）

あなたの傍にいますから、なんて、普通に聞いたら誤解を受けそうな発言だ。神子の存在ってそんなにすごいのだろうか、と考えて、落ち込む。何もなくても自分にそう言ってくれる相手がいたら、どんなにいいものなのだろうか。

ゆつくりと目を閉じたり、天井を見たりしながらぼんやりとした

時間を過ごす。やりたい事、確かめたい事、覚えたい事がたくさんあるのに、まったく自分の身体はいつもその邪魔をする。

いつの間にか眠ってしまったルイが次に目を開けた時には、窓から朱色が差し込んでいた。

「ん……」

「起きましたか？」

「夕方、ですか？」

そうですよ、とカイトの声が聞こえる。ずっと、いてくれたのだろうか。

パタンと音がして首を横に倒すと、カイトは本を読んでいたようだった。テーブルの上に何冊か本が積まれ、一冊にしおりが挟んであった。

ゆっくりと身体を起こすと、痛みは殆ど取れていた。これなら、いつも通りだとルイは手を握り感覚を確かめる。

「休んでいたほうがいいですよ」

「慣れてますから。もう起きてても大丈夫です」

「ですが、まだ熱が」

「微熱は……下がりませんから」

笑ったつもりだったのだが、カイトは「あ」と小さく呟いた後、申し訳なさそうに俯いた。

「あの、本当に大丈夫ですから。いつも通りです」

「……はい。何か、食べれそうですか？」

「そういえば、お腹空きました」

その言葉に安心したようにカイトは微笑んで、食事を用意します、と部屋を出て行った。

「えっと、神子って騎士団所属になるんですか」

「ええ。神子は魔法を駆使して、民を護る者……あなたは光の神子ですから、クォーツ隊に所属する事になります」

やわらかく煮込んだ野菜のスープだけの食事を終え、大丈夫という言葉で押し切ってルイはカイトにいろいろ聞き始めた。

簡単に説明されていただけで、まだわからない事だらけだ。

妥協してベッドに横になっているのなら、という条件だった為、

ルイは枕とクッションを背もたれに少しだけ身体を起こして話を聞いていた。本当は、文字が見たいから本を読みたい。外を見てみたいと言っていたのだが、それは明日以降に回された。

「クォーツって、水晶ですか？」

「そうですね、光の神の名です」

「神様の名前……」

どうやら知っている知識とはやはりズレがあるらしい。言葉が通じてよかった、とルイは安堵した。文字が読めるかどうかは、わからないが。

「魔法って、石を使うんですよね。水晶を使うんですか？」

「……ええ、そうですね……知っていましたか」

「だって、カイトさんが森で守護壁を張るって言ってた時、ベルトから石を外してたから」

そうでしたね、とカイトはルイの額を撫でた。熱は大分下がっている。

気になったルイが他の神の名を聞けば、それもすべて宝石の名前だった。

水がサファイア、風がエメラルド、火がルビー。少しだけ違和感があったのは地がダイヤモンドだった事だ。色で選んだのかな、なんて考えはあっさりと否定された。

ルイの感覚からすると、ダイヤモンドが光という感じがするのだ

が、この世界ではどうやら価値も違うらしい。

「よし、覚えまして」

「あまり無理はなさらないで下さいね。王と、母にも怒られてしまいます」

「でも、闇の者、力をつけてるんですよ」

「ですが、あなたが無理をする事はありません。我々王都の能力者や、他の民の協力もあります。あなたが倒れては意味がありません」

「……はい」

体調がよくなった分、ただ休ませてもらっているのは申し訳なかった。部屋は広いしベッドは大きいし、食べ物もとてもおいしい物を食べさせてくれた。何かしたいなあと思うのは当然だ。

しかし今は休んでいなさい、と言いつけられるように、頭に大きな手に乗って、ゆっくりと撫でられた。

子供扱いされているのかもしれないが、頭に触れられるのは気持ちよかった。

なんとなくその手が、自分の手とは随分大きさが違うなと考えたルイは、ふと気になる事を口にした。

「カイトさんは、身長高いですよ」

「え？ ええ、まあ、高いほうですね」

「どれくらいあるんですか？」

「百八十五センチですよ」

その言葉に、ルイは驚いて「わ、高いっ」と声を上げた。

（高いとは思ってたけど……そんなに高かったんだ。どうりでそんなに身長差があるわけで……）

「ルイさんは？」

「……百五十三センチです。道理で十三歳に間違われる程の身長差」「三十二センチ差は確かに大きいですね。まあ、それだけではありませんが」

どう言う意味ですか、とむくれて問えば、いえ、秘密です。何て笑顔で返されて、ルイは唇を尖らせた。

「歳は四つしか離れてないのに。ライトさんにも私子供に間違われてたんですよ。訂正する暇、なかったですし」

「いいんじゃないですか？ 口説かれますよ。口説かたいのなら、まあそれなりに覚悟を決めて……」

「ち、違います。いいです。このままで」

いったいどんな覚悟が必要なんだとルイは突っ込みたかったが、ここは聞かない方がいいだろう。

それにしてもカイトはライトに対して厳しい気がする。それだけ仲がいいという事だろうか。

「そろそろお休み下さい。明日、何か本を持ってきますね。文字が読めるといいんですが」

「ありがとうございます」

「これを」

カイトに何か手渡されたルイがそつと手のひらを見ると、小さな透明の石だった。

「伝達石です。弱いものですが、強く握って呼んでくだされば、私の持つ石に伝わります。何かあったら呼んでください」

「……ありがとうございます」

ではおやすみなさい。そう言って部屋を出るカイトを見送って、ルイは渡された石をしばらく見つめた後、ほんの少しだけ嬉しそうに微笑んで、ベッドに潜り込んだ。

契約と魔法―2

カイトからもらった石はその日出番はなかったけれど、なんとなく安心するな、とルイは朝早く目が覚めてしまった為、ベッドの脇にあるサイドテーブルに石を置いてずっと見つめていた。

携帯電話なんてないのだろうな、と考えて、こんな世界で一人迷子になるのは勘弁したいところなので、大事にしなければとルイは手を伸ばす。

自分は結構落ち着いている。わかっていた。きっとそれは、帰りたいと思っていないから。

(……これ、握ったらすぐ伝わってカイトさん来ちゃうのかな。詳しく聞いておけばよかった)

透き通った透明の石。お守りのようだ、と、考えていると、扉からこんこんと音がする。

「……はい？」

「失礼致します、おはようございます、ルイ様」

「え？」

てつきりカイトだと思ったのだが、現れたのはふわふわとした短い髪をピンで留めた快活そうな女性だった。もちろん髪は金。黒に、白いエプロンをつけているその姿は……メイドだろうか。

「本日付けで光の神子様のお手伝いをさせていただく事になりました、アイラと申します。身の回りのお世話はお任せ下さいませ」

にこりと微笑まれ、ルイは混乱した。さっそく、と手渡されたのは、シンプルなワンピースで。部屋の奥に浴室があるからと手早く準備に取り掛かり始めたアイラに驚いて、ルイは待ってと声を掛けた。

「身の周りの世話って」

「ふふ、カイト様が仰っていた通りの反応ですね。失礼ながら、カイト様に伺って参りました」

でも駄目です。そう言つて、アイラはぱたぱたと浴室に消えた。

その後はもう、言われるがままルイは入浴し、着替え、髪はアイラに乾かされて。慣れずに混乱したのだが、こればかりは慣れてくれ、とアイラも引く様子はない。

「遅くなつてすみません」

「カイトさん……！」

昼食も終えた頃に現れたカイトは、自分の名を呼ぶルイの困つたような表情を見て、思ったとおりの反応です、と笑っていた。

「あなたの世話をする人間をつけるのは決まっていた事なのですよ。あなたは遠慮するでしょうから、友人だと思つてくださればいいんです。アイラは適任です」

そう言い聞かせて来ましたから、と笑うカイトに、ルイはため息をついた。世話をする時点でどう考えても友人ではないだろう。確かに変に畏まれるよりは、アイラは親しみ易い笑顔でにこにこ話をしてくれていて、昼までの間少しばかり楽しい時間は取れたのだが、メイド服を着た女性に世話をされるとするのはなんとも妙な気分だった。

「慣れて下さい」

問答無用でそう言い切つたカイトは、そうでした、と言つて本を数冊、ルイに手渡した。

「読めない場合、教える人間が必要でしょう？」

そう言つて手渡された本に目を落としたルイは、小さくため息を吐いたあと「はい」と頷いた。……読めなかったのだ。

その日から数日、ルイは体調を見ながら、アイラとカイトに文字や世界の事を教えて貰いながら過ごした。文字は、まったくわからないというわけではなく、安心した。言葉が通じるだけあつて、文

法が一緒だったのだ。

困ったのは文字の形が違う事だが、どうやらローマ字と同じように母音と子音を組み合わせるような読み方で読めるようだ。ルイは英語を苦手としていたので、それには大きく安堵した。特に文句も言わず勉強を続けるルイに、二人は丁寧に教えてくれる。

数日たったある日、魔力を見るからと言われ、一度だけリルが訪れた。まだ微かなものだが、確実に光の民の魔力を持っている、と占いに使うような水晶に触れたルイにリルは説明した。

だが、光の神子は、四つの属性すべてを扱えなければいけないと言われ、混乱を防ぐ為に、ある程度ルイの力が育つまでは異世界から神子が現れた事を一部の人間を除き伏せるそうだ。

カイトに護られたルイは、表向き「記憶消失の少女が有望な能力者だった為」らしい。怪しすぎる。それにしても過保護なのでは、という疑問は、カイトに笑顔でどこかに追いやられた。

そんな理由のせいで、一度だけカイトの父親と、ライトが挨拶に来たが、それ以外はアイラとカイトとだけ過ごしたルイが文字の勉強を始めてしばらくたったある日の朝、アイラがいつも以上にここにこと部屋に現れた。

「おはようございます、ルイ様。今日は、カイト様が外に連れて行つてくださるそうですよ」

「え、本当ですか？」

思わず驚いて飛び起きれば、ええ、と嬉しそうにアイラが頷く。

「漸くお外に出れますね。とは言っても、近場なのですけれど。騎士団の本部に行くそうですわ」

そついいながら用意してもらったオフホワイトのワンピースに着替え、その間にアイラが食事を並べてくれ、ルイは紅茶を口にしたトーストとサラダだ。今のところ食べ物にあまり違いがないので助かっている。たまに、知らない果物が出てくるが。米や味噌と言っ

た日本食もないようだったが、悪く言えばあまり自分の欲に執着がないルイは早々に諦めたようだ。

「今日はサファイアの四十ですから……丁度こちらに来て二週間目にしてやっとですわね」

「……え？ アイラさん、今、何て言っただんですか？」

「え、二週間目……」

「あ、そこじゃなくて。サファイアの」

「すごく聞きなれない言葉を聞いた気がする。そして、嫌な予感がある。そう思っただけで聞いたルイの言葉に重なって、部屋にノックの音が響いた。」

アイラが「はい」と返事をして扉に駆け寄る。どうやら、カイトがもう部屋についていたようだ。

「カイトさん！ おはようございます」

「おはようございます。ルイさん、もう聞きました？」

「はい、今日、外に連れて行ってもらえるって」

「ええ、お待たせしてすみませんでした」

微笑むカイトに、そうだとルイは先ほどの疑問を、慎重に尋ねた。

嫌な予感程、当たるものだ。

「カイトさん、あの、こつちの世界の暦ってどうなってます？」

「暦？」

心配そうに様子を見ていたアイラが、「ああ、まさか」と口元を手で押さえた。

「ルイ様の世界では、違ったのでしょうか。今日はサファイアの四十と申しあげましたわ」

「……そうなんですか？ ルイさん、今日は、年始から始めて九番目の月の、四十日目です」

瞬時になんとなく理解したカイトが、アイラの言葉を噛み砕いて

説明した。ルイの目が驚きに見開く。

「一ヶ月、何日ですか……？」

「……、七十日です」

「じゃあ、一年は何月？」

「十二、ですが」

ルイはさつと青くなつてすぐに計算をした。十二、掛ける、七十。

「い、一年八百四十日もあるの……！？ そんな、えっと、一年で一歳ですよね！？ そんなっ」

珍しく混乱しているルイを見て、カイトは少し驚いてルイに目線を合わせられるように屈み、落ち着いて、と言って肩に手を乗せた。
「あなたの世界では、違うんですね？」

「私の住んでいたところは一年三百六十五日です。どうしよう、私、ここの人たちの二倍以上早く歳を取るの？」

誰よりも先に歳をとる。やれる事も、やれないかもしれない。それがどんな影響を及ぼすかもわからない。

そしてまた一人ぼっちになってしまふのだろうかという考えが頭に浮かんでしまい、ルイは珍しく混乱を露にした。

「落ち着いて下さい、ルイさん。あなたはこちらの世界に来て、髪の色も瞳の色も変わったのでしょうか？」

一瞬考えるように視線をさ迷わせたが、しっかりとルイの目を覗き込んで言葉を続けるカイトに、ルイがゆっくりと肩の力を抜いていく。

「身体がこちらに合わせて変化している事も考えられます。後で一緒に医者様の所に行きましょう。ですから」

「……すみません」

ルイが落ち着いたのを確認して、アイラがほっと息を吐いた。
「驚きましたわ」

「あ、騒いでごめんなさい。もう大丈夫です」

物分りが良すぎるのもどうかと思うのだが、とカイトは少しだけ思ったが、それを言葉にはせず、朝食の終わったテーブルを確認した。

では、行きましようか。と声を掛ければ、少し不安そうに眉を下げたルイが立ち上がる。

本当は喜んで、笑顔でも見れるのでは、と思っていたカイトとアイラの二人は目を合わせ、小さく首を振った。

「何も言っではいませんでした、外には出たがっと思っていますすわ。この話をしたら、喜んでくださるでしょうか」

「笑ってくれるといいんですが」

ここに来る前、アイラとカイトはそんな話をしていたのだ。ルイは遠慮がちに微笑む事はあったが、いくらアイラが笑わせようとしても、楽しそうな笑顔を見せた事がなかったのが、数日ルイと共に過ごした二人の心配事だった。

騎士団の本部は城の門を出て、すぐ隣だった。とは行っても城の敷地が広いので、歩いて十分程かかったのだが。

「カイトさん、あれってどれくらい時間かかるんですか……？」

ここに来る前、城の敷地内にある医者所に行つて、ルイは髪の毛を数本、検査するからと言って切られていたのだ。

本当にこの世界の人間より早く歳を取るのか調べるらしい。科学的な感じなのかと思つたら、魔力がどうのこうのと言っていたのでおそらく聞いてもわからないだろうとルイはカイトに話を進めてもらっていた。

「そうですね、一週間はほしい、とお医者様は言っていましたか…

…、不安ですか？」

「うーん、今はどちらかと言えば、大丈夫です」

（何て言っているのかかわからないけど……慣れてるし）

ルイはそう考えて、大丈夫ですから、と微笑んだ。

しかし、ルイの反応にカイトはこっそりとため息をついた。何があったのかかわらないが、二週間以上共にいて、泣くこともなく、そして「帰りたい」とも言わない笑わない少女に、何かあるのだろう、と気にして。

「カイトさん、ここ、中入れるんですか？」

「ええ、今日は魔法を少し、お見せしますよ」

「い、いよいよですね……」

「その前に、今日は各隊の隊長が丁度任務報告で集まっているので、挨拶でもしに行きましょうか。事情は説明して連絡しておいたので、全員に会えると思います」

カイトの言葉に、ルイは他の町の人に会えるのかと少し喜んでいった。王都についた時に、髪の色が違う人を街で見かけていたから気になっていたんです、と、笑顔を見せる事はなかったが、声が少し弾んでいた。

「時間はあまり取れませんから……ああ、もう時間ですね。行きましょうか」

「はい」

建物の中に入り、広いフロアを真っ直ぐと突き進んで、大きな扉をカイトが開けて中に入る。

全体的に白い内装の建物で、敷地内には宿舎もあるそうだ。かなり大きな建物だ。

「お、待ってたんだぜカイトっ」

カイトに手を引かれて部屋の中に入ったルイは、まず赤い髪の少年と目があつた。歳は同じくらいだろうか。しかし、身長差がある

せいで見上げる形になってしまっ

「そのちっこいのが光の神子か？　なんだ、楽しみにしてたのにガキかよー」

「が、がき……」

言われた言葉になんともいえないショックを受けて、思わずしょんぼりと俯いて復唱してしまったルイの隣で、カイトが「何を言うんです」と赤い髪の少年を注意していた。

「駄目だよレン、そんな事言ったら」

「ま、確かに小さいな」

「……お前も失礼だな」

「っーか何で手繋いでるんだ？　カイトって年下好きだったのかよ」
落ち込んでいたルイの前がふっと急に暗くなり、顔を上げるとどやといきなりルイの前に、緑、茶、青色の髪の男達が現れて、驚いてルイは固まってしまっ

（な、何……？　何で一気にこんなに増えるのっ）

ぴったりと固まってしまったルイは混乱の余りカイトと手を繋ぎっぱなしだった。しかも、少し強く握ってしまっている。

「はあ、皆さんお久しぶりです。……ちゃんと紹介しますからちよつと離れてください」

少しだけルイの前に出てカイトはそう言っ、赤い髪の少年を押しゃってルイの方を振り向いた。

「騒がしくてすみません。紹介しますね。まず奥にいる青い髪の方が、サファイア隊のスイレン、その隣にいるのがダイヤモンド隊のラトナです」

カイトがそう言っ、長い濃紺の髪の青年が頭を下げ、ルイにとっては少し馴染みのある茶色の短い髪の青年がよろしく、と片手をあげた。

「そしてこの子はエメラルド隊のイオ」

よろしく願います！　と人懐っこい笑みを浮かべた、緑の髪

の少年が元気に頭を下げる。

「最後に一番失礼なのがルビー隊のレンです」

「おい、一番失礼ってどういう事だよ！」

「失礼でしょう」

さらつと受け流すカイトは、微笑んだままだ。……若干怖い気がするのは気のせいという事にしようと、ルイは改めて四人を見る。

「えっと、スイレンさん、ラトナさん、イオさん、レンさん。ルイと申します。どうぞよろしくお願い致します」

手を揃えて、ぺこりと頭を下げる。名前あってるよね。そんな事を考えながらどきどきとしてルイが顔を上げると茶色の髪の青年……

…ラトナが、にやりと笑った。

「レン、お前よりよっぽど礼儀がなってるし頭は良さそうだぞ。精神年齢は負けたな」

「はあ！？ 俺の方がっ」

「はい、喧嘩は後でいいので。ルイさん、せっかいですから、皆さんに魔法を見せてもらいましょうか」

「……いいんですか？」

「本っ当に魔法知らないんだなー」

ルイが首を傾げてカイトに聞くと、誰かの驚いたような声が聞こえた。が、すぐに緑の髪の少年……イオが、手を上げて喜んで「僕やります！」と叫んだ。

「行きますよ」

そう言ったイオの前髪が、どこからか吹きつけた風に舞い上がった。はっと気づいたルイが部屋を見渡したが、窓はどこも開いていない。

ふわりとイオの身体が浮かび、ひゅつと音がしたかと思うと、離れていた筈のイオが目の前に現れて、ルイは「ひゃ」と小さく悲鳴を上げた。

「風の民の特徴は、その速さなんですよ」

微笑んで説明するカイトに、何が起きたのだろうと目を見開いていたルイは、すごいです、と呟くように言った。

「そんなんで魔法なんて言うなよ。おい、俺が見せてやる。イオ手伝え」

「え？ 何するんです？」

赤い髪の少年、レンが問答無用でイオの手を引き、自分の前に立たせると、レンは何故か腰の剣を抜いた。

「レン、本気でやっては……」

いけません。おそらくカイトがそう言おうとしたのだろうが、次の瞬間レンは走りだしていた。

「うおおおっ」

「え、わっ！」

慌てたイオが何事か呟くと、パン、と音がして、イオの周りにうつすらと球体が見えた。だが、その球体に剣が触れた瞬間、勢いよく炎が燃え上がった。

「きゃああ！？ イオさん……っ」

ルイが叫んだかと思うと、イオのいたその炎が燃え上がる場所に手を伸ばしたので、カイトがさつと顔を青くし「いけません！」とその手を遮る。

何かが弾ける音がして、炎が迫った。ルイはそれを視界に捉えていたが、動かなかった。

「くっ」

カイトは咄嗟にルイを引き寄せ自分の身体でルイを隠し、炎に腕を突き出した。ジュッと音が室内に響いて、次にルイが目を開けカイトの腕の中から部屋を見た時には、どこにも赤く燃え上がる炎はなかった。

変わりに、ばしゃあつ、と盛大に水が流れる音がする。

「何をしている」

「ぐえっ！？ つめてえ！」

青い髪の青年、スイレンが、これもまた魔法なのか、大量の水を

レンに浴びせたのだ。頭を冷やせ、と付け足して。

「大丈夫ですか、ルイさん」

ずぶ濡れになったレンをよそに、すぐに心配そうに眉を寄せたカイトにルイは顔を覗き込まれる。

大丈夫です、と答えたのだが、なぜか目の前のカイトの顔は歪んだ。

「額に、怪我を」

「え？」

言われてカイトの視線の先、自分の額の左側に手を添えたルイは、なんとも言えない生暖かいぬるりとしたものに触れ、あ、と呟いた。「ついていながら私は……っ！ スイレン、治してもらえませんか」
「構わない」

濃紺の髪を揺らしながらゆっくりとした動作で、それは優雅にスイレンが近づき、ルイの額に触れた。ひやりと冷たい感じがしたかと思うと、淡々とスイレンが「これでいい」と告げる。

「綺麗に治ってよかったです。……レン」

「う……ごめ……」

じつと全員に見つめられて、レンがじりじりと下がる。

「……すごかったです」

そんな中間こえた声は、ルイのものだった。少し興奮した様子の声に全員がそちらに注目したが、ルイはそんな事を気にせず、レンを見ていた。

「なんか、魔法って感じてました。ちょっととききますけど、見せてもらえて嬉しいです。あ、でも……イオさんは大丈夫なんですか？」

「え？ ええ、僕はすぐ防御壁を張りましたから……」

「やべ、それって俺がやればよかったんだよねー、俺だけ何もしてないじゃん」

あーあ、と大袈裟に頭を掻いて、ラトナが俺は護りの術が得意なんだぜ、とルイを見て微笑んだ。

「今度、見たいです。スイレンさんも、ありがとうございました」
スイレンもふつと笑い、カイトだけが少し難しい顔をしていたが、レンにくるりと背を向けてルイの手を取ると、微笑んだ。

「今使わなくてもいいんですよ？」

少し屈んだカイトに、小さな声でそう言われる。え？ とルイは首を傾げて、すぐに顔を赤くした。

手にカイトから貰った伝達石を握りこんでいたのに、言われて気がついた。

「あつ……こ、これ、なくしちゃいけないと思って……っ」

（な、なんかもものすごく恥ずかしい気がする……っ！）

「頼っていただけののは、嬉しいですけどね」

「おいおい、何二人きりで話してるんだよ、レン、怯えっぱなしだけど」

「お、怯えてねえっ！」

明るい声が聞こえて、カイトは「ああ」と皆の方へ振り返った。

「レンは、後でお置きです。さて、時間……過ぎてしまいましたね、すみません」

「……私はもう行く」

「あ、俺も戻らないと」

スイレンが小さく「また、光の神子」とだけ告げて部屋を出て行き、ラトナも「またね」とルイの頭を撫でて、スイレンに続いた。
「私はルイさんを屋敷まで送ります。……レンとイオはしばらく王都に滞在でしたね。また連絡します」

カイトがそう言って扉に向かうので、慌ててルイも二人に頭を下げてカイトを追った。

「……変な女」

「ええ？ いい人だったじゃないですか」
残された二人は、そう言ってルイを見送った。

「それでカイト様がお怒りでしたのね」

屋敷にルイを連れて戻ったカイトが、早々に「用事がありますので」と部屋を出て行き、アイラと二人きりになったところで時間は三時。夕食にはまだ早いお茶の時間に、今日の出来事を話せば返ってきた意外な返事にルイは首を傾げた。

「怒ってました？ カイトさん」

「そうですね…… もんのすごく、わかり辛いとは思いますが、オーラが」

「お、オーラが怒ってるって……」

「まあ、ルイ様に怪我を負わせてしまったのですから、仕方ありませんね。お気の毒ですけど、レン様は今頃大変でしょうね」

苦笑するアイラに、ルイは俯いた。

「や、やつぱりレンさん怒られちゃうんだ……」

「あら、ルイ様、レン様を気に入られたのですか」

「……へ？」

楽しそうに笑うアイラに、ルイは間抜けな返事をした。気に入る、どこにそんな話題が出ただろうか。

「皆様、素敵だったでしょう？ それはもう皆様今をときめく騎士団の隊長メンバーですから……知っていたら、ついていきなかった位です」

確かに全員それぞれ魅力のある人達だった気がするが、ルイは首を傾げた。実際に耳にする機会が殆どないような単語が出たからだ。

（今をときめくって…… あ、アイドルみたい）

変な所に突っ込みをルイがいられている間にも、アイラは胸の前で手を組み、どこに視線を向けているやら夢心地な表情でうっとり

語りだす。

「スイレん様は今の隊長方の中では一番長く就いていらつしやる方ですよ。若干無口ではありますがすけれども、希少な治癒術を難なく使いこなす素敵な方ですわ。ラトナ様はその明るい雰囲気でもとても周りを楽しませてくださる、守護能力に長けた方ですの。イオ様とレン様は、つい最近隊長に就任したばかりの方ですわ。確かお二人とも十八歳ですから、ルイ様とお話も合うと思います」

つらつらと淀みなく説明してくれるアイラは、頬を染めている。その内容を聞けばもはや確かに、騎士団隊長というのはアイドル的存在のようだ。

「ですが、スイレん様とラトナ様には確か婚約者がいらつしやいましたのよ。イオ様は……どうだったかしら。レン様はいないらしいって話ですけど」

「婚約者……綺麗な方達でしたもんね。それにしても、アイラさん詳しいですね」

恋人がいて当然って感じの綺麗な人達だったもんね。そんな事を考えて納得したルイの前で、もちろんです！ と拳を握るアイラはその次にやりと笑う。

「ですが、今一番の話題と言えば、何と言っても光の民のフォルストレ兄弟ですよ！」

「話題？ え、カイトさんと、ライトさんですか？」

「もちろんです！ ライト様は言わずもがな、王女様の護衛と言うのはご存知ですよ？ 最近、二人に婚約の話が出ておりますの！」

「ほえ……、ライトさんが、王女様と婚約」

いきなり出た話題に、ルイはぽかんと口を開けた。話の相手の存在の大きさに、何か、現代の女性向け雑誌でも見ている気分だ。

「もともと仲が言いことは噂されておりましたので……親衛隊に引き抜かれるまでは、ライト様がクォーツ隊隊長でしたのよ」

「騎士団と親衛隊って、別だったんですね」

「もちろんです。騎士団は民を護る為ならばどこにでも向かいますけれど、親衛隊は主に王族や各町の長の護衛専属ですから……ってそうではなくて！」

純粹に気になった事を質問しただけなのだが、アイラの関心は今はそこではないらしい。

そっちの話題の方が気になるんだけどな、と呟いてみたが、声を大にして言えないのは興奮した様子のアイラに圧倒されているからだろう。

「そして何より、カイト様ですわ。今まではライト様と比べて……ってこれも失礼な話ですけど、浮ついた噂一つ上がらなかったカイト様が、街で可愛い少女と手を繋いで仲良くお買い物を楽しんでおられた……街ではそんな噂で持ちきりですよ、ルイ様、これってすごい事なんですから。あの、カイト様が！」

「ま、待ってアイラさん。あのカイト様がーって言われても、私わからないし……」

自分がここに来たのは、それこそ二週間前なのだ。しかも屋敷に籠りっぱなしで、過去からの話題についていけない筈がない。

しかしとりあえず、と理解したのは、カイトに彼女がいるようだ、という事だ。そこを聞いて、ルイは若干顔色を悪くした。

自分の存在は、大分その「彼女」にしてみれば、嫌なものなのではないだろうか、と一瞬で考えてしまったのである。

（ただでさえずっと一緒にいてくれるし……護ってくれるって……うわ、嫌だろうな）

彼氏どころか、元いた世界では考える事が多すぎて恋焦がれるという感情すら持った事がなかったが、常識的に嫌なものだろうと考え頭のどこかで理解する。

自分の存在がまだ知らぬ女性に迷惑を掛けるというのは正直辛い。かといって、カイトの傍にすぎたはいけない、と考えたルイの心

臓は何かつかまれたように苦しくなり、知らない人ばかりのこの世界で最初に出会い、常に優しく接してくれるカイトという存在がルイの中では大きなものになっているのだと気づく。

（お兄さん、みたいだもんなあ……）

実際に兄がいたわけではないが、友人に聞く優しい兄の像に似ていると納得し、そして手の中でころりと転がる石を見つめて、ルイはため息をついた。

「ルイ様？」

「え、あ、何です？」

気がつけば心配そうに顔を覗き込んでいたアイラの手が、そっと額に触れる。

「また、熱が上がってしまわれたのかと。今日、お疲れになりました？」

「え？ あ、大丈夫です。えと、これ悪いなあって思ってた」

「これ？ まあ、綺麗な石ですね」

「カイトさんに貰ったんです。お守りみたいで気に入ってたんですけど、伝達石だって……でも、今日実はレンさんの魔法見てたとき少しだけ怖くて握っちゃって、カイトさんに迷惑かけちゃったし。それに、彼女さんがいるならこれって多分、嫌ですよ」

「これ、想い石でしたの！？ まあ、カイト様から！ 素敵ですわ、少しだけ見せてもらえます？」

「え？」

一人興奮し驚いたように立ち上がるアイラが、ルイの手の中をまじまじと見つめる。と、少しだけ残念そうな顔をした。

「桃色ではありませんのね。ですが、想い石なんて素敵な贈り物ですわ」

「うー、アイラさん、一人で納得しないで下さいよう。想い石って何ですか？ これ、伝達石だって言っていましたけど」

「ああ、すみません。伝達石は、別名想い石って言うんですよ。桃

色の想い石は、恋人達の愛の証！ 魔法を使う能力者の間ではパートナー契約にも必要とか。ああ、やっぱり噂通りなのかしら」

「あのー、アイラさん……」

ぱたぱたとアイラの前で手を振ってみるが、彼女はその手をがしつと掴み、大事になさってくださいませ、と頬を染めて言うだけで、ルイはしばらくこれは自分の聞きたいことは聞けないだろうとため息をついた。

（後でアイラさんが落ち着いたら聞くか……でもまた同じ事になるかな。能力者のパートナー契約っていうのも気になるし、カイトさんに聞こうかな。でも、本人に彼女さんにご迷惑ですからってこれつき返すのも、なあ……）

「怖くて石を握っちゃったなんて、カイト様喜ばれたでしょうね！」
にこにこアイラが話し出すが、とりあえず質問しても答えは返ってこないだろうな、とルイは苦笑して、「まさか」と曖昧な返事を返した。

契約と魔法―4

「まあ、カイト様、お疲れ様です。ルイ様、カイト様がいらっしやいましたわ」

二日後、昼食も終えた時間、アイラに時折意味を尋ねながら本を読んでいたルイの部屋に現れた訪問者は、カイトだった。

「あ、こんにちは、カイトさん」

外に出ることが出来た次の日は用事があるから、とカイトに会うことはなかった為に、なんとなく伝達石を手放せずに傍に置いていたルイは、時間が経つにつれてどこかで手放したくないな、と思っ
てしまっている事に気づいて、困っていた。

会えない日があると、妙にカイトから貰った石を見て安心して
いるのは、やはり一人じゃないと最初に思わせてくれた物だからだろ
うか。

「こんにちは。すみませんでした、一昨日に引き続き詳しいお話も
できないまま昨日もお傍にいれなくて」

「えっと……いえ、大丈夫です」

なんとなく顔を見れずに俯いたルイの前で、カイトが少し困った
ように微笑んだ。

その様子を見ながら、アイラは私は一旦失礼します、と言って部
屋を出て行ってしまう。アイラの声を聞いて「え」とルイが顔を上
げたが、戸口でひらひらと手を振ってアイラは出て行ってしまった。

「一昨日はすみませんでした。傷は、痛みませんか？」

「傷って。スイレンさんがすぐに治してくれたし……大丈夫です。
魔法って、すごいですね。……あ、レンさんって、やっぱり怒られ

「ちゃったんですか……？」

「レンですか？ …… あそこで攻撃魔法を使用した件については。まあ、火の民が使う魔法は攻撃系が殆どなので、使用する前に止めなければならなかったのですが」

「そうなんですか。と少し俯いて小さな声で呟くルイに、カイトは苦笑して「大丈夫ですよ」と言う。

「軽いお仕置きだけですから。三日間クォーツ隊の下級騎士の訓練に付き合って貰っているだけですし」

「訓練…… そうなんだ」

「それなら大丈夫そう。そう思っただけで顔を上げたルイの目の前にカイトが来ていて、ルイは少し驚いて後ろに下がる。

「熱、あまり高くなさそうですね。調子がよければ、ルイさんも少し魔法の訓練、してみましようか」

「え、いいんですか！」

「もちろんです。ただ、具合が悪くなったらすぐに言う事。場所は騎士団の使用している訓練所にしましょう。おそらく、レンもいると思いますよ」

微笑んで手を差し出すカイトの手について手を重ねて扉に向かったルイは、頭に「彼女」の存在を思い出し慌てて手を引いた。カイトが少しだけ振り返ってルイを見たが、ルイは気まずいのか目をさ迷わせていて、気づかないまま部屋を慌てたように出る。

「訓練所って、一昨日行ったところにあるんですか？」

「え？ ええ、そうですが」

「わかりました」

ぱたぱたと小走りになるルイの後を、少し首を傾げたカイトが追う。屋敷を出る頃には追いつかれてしまったが、今度はルイは意図してカイトの少し後ろに下がり歩き出して、前を歩くカイトは少しだけ眉を顰めた。

今日アイラに用意してもらった紺色のワンピースのポケットの中で、ルイはころりと転がる石にそっと触れる。

（……後で。後で、返すから）

少し歩けば見えてくる大きな建物を見つめながら、ルイはまた少し小走りに、カイトを追い抜いた。

「わ、広い」

案内された部屋は、余計な物が置かれていない広い空間。窓もなく、白い壁に茶色の床の部屋は、攻撃魔法が当たっても壊れないように魔力がかかっているらしい。

レンがいるだろうかという期待に反して、部屋にはカイトとルイの二人だけ。レンは別の部屋にいるようだ。

「簡単な魔法から使ってみましょう。まずはこれを」

カイトがポケットから出したのは、透明でひし形の透き通った石だ。

なんとなく形が、好きだったドロップ缶に入っていた飴玉のようだななんて考えて指で目の高さに持ち上げると、透明の石の周囲がゆらりと揺らいで見えて、首を傾げる。

「見えました？」

「と、溶けてる？」

まるで湯気でも出ているように見えて手の平に乗せて観察するルイに、カイトは違いますよ、と優しくルイの手に乗る石に触れる。

「揺らいで見えるのは、石が放つ魔力です。私が持つもののよう加工装飾されているものは、魔力が逃げ出さないようにされているものなので見えませんから、敢えて装飾される前の石を用意しました。とは言っても、魔力を扱う事ができる能力者にしか見えませんが」

「……なんか、初めて自分でも使えるんだーって納得しました」
くすくすと笑うカイトは、そのまま石を乗せるルイの手の平を石

「ご大きな手の平で包み込むと「少しだけ我慢してくださいね」と言って目を閉じた。

暖かい手に妙に意識が取られ慌てて離さなければと手に力を入れたルイは、すぐに石の持つ熱に気がついて意識をそちらに集中した。

「そうです。いいですね。そのまま身体のを抜いてください。まるで、宙に浮いているように」

宙を浮くって、難しい……そう思いながら、ゆっくりと身体のを抜いたルイは、いきなり襲われた浮遊感にぎよっとした。

「わ!？」

「ルイさん!」

まるでジェットコースターが丁度天辺から落ちている時のような不快感に、つい手を離してしまったルイを次に襲ったのは肘を打ちつける衝撃。

「い、痛……」

「っ……すみません、手を離してはいけないと最初に言うべきでした」

近い声に、え、と目を開いたルイは次の瞬間、きゃあと声を上げた。

腰にカイトの腕が回されていて、カイトは思いつきり床に倒れこんでいる。少しだけ浮いた頭を支えるようにカイトは空いた手で押さえていて、恐らく床にぶつけたのだろうと想像できた。

倒れこんだルイは、肘をしたたかに打ったものの、殆どカイトが庇っていたおかげで無事だったようだ。

そう、カイトの身体の上に、ルイの身体が抱きこまれるような形だったのだから。

「わ、あの、すみません……っ!」

ぱっと身体を離すルイを見ながら、カイトが情けないです、と苦

笑する。

「宙に浮く魔法なんですけど、手を離したら落ちるんです。すみませんでした」

「宙に浮く……うう、キモチワルイ」

胃を押さえて何とか立ち上がるルイの顔色は少しばかり先ほどに比べると青く、伏せた瞼と長い金の睫がその緑の瞳を覆う。

「私、絶叫系苦手なだけだな」

「絶叫系？ そんなに怖くありませんよ」

いや、十分怖いです。それよりあんなにくつついちゃってどうしよう、気をつけようって決心したばかりなのに……そう考えたところで、ボタンと扉が開いた。

「お、良かった」

「……あ、レン、さん。こんにちは」

扉を開けたのは、若い騎士隊長、ルビー隊のレンだ。

彼は何も言わず中に入ると、転がったままの回とに目を向ける。

「レン、何をやっているんです、訓練は……」

「何だよ、三時だし、休憩だろ？ それより何寝転んでんの」

「あ、その、私が転んじやって何というか」

「ふーん？ で、何やってんの、ルイ」

レンは扉を閉じると、楽しそうな様子でルイの傍まで来た。ルイの前に転がっているひし形の石を見て、ああ、と納得する。

「飛ぶ練習してんだ。どう、おもしろーだろ？」

「面白いというか……転んだばかりで……」

「何だ。まあ最初はそうだって。そうだルイ、俺も手伝ってやるよ」
「レン、あなたは持ち場に戻りなさい。それに、神子を呼び捨てにしない」

「いーじゃんか。俺よりガキの神子って始めてだから何かなー。ほらルイ、手」

つい手の平に石を乗せたレンの手に手を伸ばしながら、ルイはア
イラがレンは十八歳だと言っていたのを思い出して自分の年齢を言
うべきか迷う。

横で、はぁ、とカイトがため息をついた気がしたが、再び先ほど
と同じように自分より大きな、しかし先ほどとは違う手に握りこま
れたルイは、今度こそ落ちないようにと石に意識を集中した。

ふわり、と身体が浮かぶ。強烈な浮遊感に、やはり顔を歪ませる。
少し視線をずらせば、床の位置が遠い。僅かだが確かに自分は浮い
ている。

「なんだ、出来たじゃん」

「レン、だめです。降りなさい、神子はまだ」

「きゃ!?!」

浮くだけでもいっぱいだったルイの身体が、大きく横に
ずれた。レンが移動しようとしているのだと気がついて、顔を青く
する。

（無理、無理無理……！ 目が回るっ）

集中できない。そう思っただけで再び、今度は額に強い衝撃を受け
た。今度こそ、何があったかすぐに把握する。落ちたのだ。

「ルイさん！ レン！」

カイトの焦る声が横で聞こえる。恐る恐る目を開くと、やっぱり
目に入るのは顔を歪めたレン。肩に手が回っているから、やはり庇
われたのだろう。

「ご、ごめんなさ……っ」

「いつてえっつま、別にいいけど……っっていうかさ」

ゆっくりと起き上がったレンが、ルイを支えると起き上がった自
分の前に座らせる。

まじまじと一点を見つめるレンの、その視線の先が気になって、
ルイが「あの」と恐る恐る口を開けば……レンは考え込むように手
を顎に当てながら、とんでもない事を口にした。

「お前……ちっこいクセに、結構でかいのな、胸」

「は……？」

「レン！」

カイトの怒鳴り声が、聞こえた……気がした次の瞬間には

「きゃー！！！」

「ぎゃあ！？！」

「あ」

ルイはひし形の石をにぎり込んだまま、思いつき魔力を使いレンを数メートル先の真っ白な壁に突き飛ばした。

「ルイさん、さすがです。今日の訓練は完璧という事で、帰りましょうか」

「……ありがとうございます」

それはそれはいい笑顔のカイトに褒められたものの、ルイ自身は浮いたり飛んだり結局できていない。相手を吹っ飛ばす事は一度だけできたものの。

ちらりと見れば、どこか貼り付けたようないい笑みのカイトの横で、痛そうに身体を押さえるレンがふてくされたように口を尖らせている。

「レン」

「なんだよ」

「訓練講師、一週間追加です」

「げ……っ何でだよ、俺の滞在予定、十日なんだぞ！休みなくなくちまうだろ」

「決定です」

「くそーっ何なんだよ、横暴だ！訴えてやる！」

「なら、あなたは性的嫌がらせで訴えますよ」

なおもわあわあ騒ぐレンを一方的に無視して、カイトはルイの手を取ると部屋の出口へと向かう。

いいのかな、何て後ろを振り返りながら施設内を歩き、外へ出た

ところでルイは風の冷たさにはつと現状に気づき、ついぱつと手を離す。

「……ルイ、さん？」

「あ、あの、えつと、大丈夫です、道は、覚えたし……というか、すぐ隣だし……」

そついいながらぱたぱたとカイトの横を通り過ぎたところで、不意に後ろに引かれ俯いていた視界の先に紺色の袖が見える。

「……カイトさんっ」

「ルイさん、どうしたんです？ 私は何か……」

抱きこまれ背に暖かい体温を感じる。頭の上から聞こえる声は、どこか辛そうで。

「何でも……ないです。離して下さい、帰りたい、です」

「ルイさん」

「帰りたい、です」

すぐに回された手がゆつくりと離れ、ルイはカイトの腕の中から逃げ出すとぱたぱたと城の敷地内へと戻る。

後ろについてはいるものの、カイトはそれ以上話しかける事はなくルイを部屋まで送り届けた。

「……アイラは、いませんね」

部屋は薄暗く、カイトがすぐに明かりをつけたが、部屋の中には人は見当たらない。

カイトの言葉を聞いて、ルイはぴくりと肩を震わせる。

呼び捨てで構わない、と訴えた自分の事を「ルイさん」と呼ぶ彼は、アイラは呼び捨てだ。立場上そうなのかもしれないが、アイラの他にも彼に呼び捨てで呼ばれる人はたくさんいるのだろう。それこそ、親しげに……

（石、返さなきゃ）

ポケットに手を入れる。これはカイトの彼女を苦しめる物だろう

と、手に触れた石を……強く握る。

ぴくり、とカイトが反応したが、ルイは気づかないまますぐにポケットから手を出すと、そのまま後ろを向いた。手には何も握られていない。

「……アイラを呼んできます。お疲れでしょうから、お休みください」

「はい。……おやすみなさい」

「酷い態度、とっちゃった」

パタン、と扉が閉じてしまうのを見つめ、呆然と呟いたルイはもう一度ポケットに手を入れて、今度は慎重に石を取り出し手の平に乗せて、そのままその場に座り込んだ。

ルイのいる部屋の扉が閉じたのを確認して、恐らくアイラがいるであろう一階の使用人の休憩所へとカイトは足を向ける。

アイラはフォルストレに仕えて、長い。カイトの母親、リルの親戚だ。

ルイの侍女にしたのは、リルが一番信賴していた事と、彼女の明るい性格から。……彼女なら何か、ルイの口から聞いているかもしれないと祈り、カイトは唇を引き結んだ。

ルイは明らかにカイトを拒んだ。それまでそんな素振りは一切見せなかったのに、今日は妙に触れる事を拒んでいた。

常に一線を引いて、誰に対しても微笑みながら、彼女は何かを拒絶している。そのせいで今一步、打ち解けた様子はなかったが、今日程過剰に拒絶された事はなかった。

何か、気に障る事をしてしまったのだろうか、と考えて、ぴたりとカイトは足を止めた。

ぞわぞわと背後から冷たいモノが迫る。その気持ち悪さに、自然と唇をかみ締め力が入る。

とにかく、アイラに聞いてみなければ。それに、拒絶する彼女のその表情は、酷く辛そうに歪められていたように感じるから……これは、そうであってほしいという願望かもしれないが。

「アイラ」

「え？ まあ、カイト様！ 戻られておりましたのね。という事は、ルイ様も。ああ、私ってば、つい明後日のルイ様とのお買い物に気を取られてリストなんて作っていたから。すぐに夕食の準備を」

「いえ、先に彼女の様子を見てもらえませんか」

そついいながら扉から身体をずらせば、アイラは了承したように
使用人の集まる部屋から抜け出し、扉を閉めて声を小さくした。

「どうかなさいましたか」

「彼女は……いえ。ここ二日位、何か変わった様子は？」

「……なかった、と思いますけれども……今はどの様な様子です
の？ まさか、また熱が」

「いえ、熱が高いといった感じでは。ああ、でも今日無理をさせて
しまったかもしれませんから、この後は気をつけてください。それ
と、外出許可が下りたんですか？」

「あ、ええ、そう。そうなんです。まだリル様からお聞きではあり
ませんでしたのね。明後日、カイト様と私がお供する事を条件にル
イ様に街をご案内する許可が下りましたわ」

街に行つてみたいと言つておりましたから、今度こそ喜んで頂け
ると思いますわ、と笑うアイラに、カイトは齒切れ悪く返事を返す。

「……どうかなさいましたか、カイト様」

「いいえ。……また、明日参りますとルイさんに伝えて下さい。街
へ行ける事は、少し伏せていて下さい」

「え？ ええ。もう、お寄りにはなりませんの……って、あら？」

アイラの言葉を待たずに背を向けたカイトは、すこしぼんやりと
した様子でその場を離れ、自室へと向かつてしまったその背をアイ
ラは首を傾げて見送った。

「ルイ様！ 申し訳ございません、お待たせ致しましたわ」

「アイラさん」

ベッドに腰掛けていたルイは、転がり込むように部屋に現れたア
イラに苦笑する。

「そんなに急がなくても……」

「いーえ！ ルイ様が戻るまでにお夕食の準備を……」と思っており
ましたのに、私ってば。すぐに用意いたしますから」

ルイが何か言う前に、すでにぱたと部屋を走り回る彼女に、
ルイは少しだけふつと笑みをこぼした。

手の平にはまだ、石が乗せられている。ころころと左右の手を移
動する石を見ながら、ルイはぼんやりと今日の事を考えていた。

（アイラさんに聞いてみようかな。彼女さんって、どんな人なのか
……とか？）

聞いたところで、どうするというのがだろうかと考えては落ち込ん
で、はあとため息をつけば、準備を終えて戻ったアイラが「あら」
と声を上げた。

「まあ、ルイ様。想い石は、握らなければ意味がありませんわ」

ふふ、と楽しそうに笑うアイラに、慌てて見てただけで……！

とルイが答えてみるも、アイラは微笑んだままわかっていきますわ、
と続けた。

「お食事を……カイト様にお会いしたいのでしたら、お呼びしまし
ようか？」

「え、あ、違います……！」

そんなつもりじゃなかったのだけれど、とポケットに石を仕舞い
込み、用意された野菜中心の食事を口に運ぶ。

「ああ、そういうば、カイト様が明日も参ります、と」

「わかりました」

会いたい、と思うのは、いけない事だろうか。そう考えながら
食事を終えたルイは、鞆から残り一粒になってしまった薬を取り出
して、水で流し込んだ。

目が覚めて、まだ夜が明けてすぐなのだろう薄暗い室内で、ルイは鞆をベッドに引き寄せる。

元の世界から持って来た荷物は、意外に多い。いつも何があつてもいい様にと荷物を持ちすぎているせいだ。

空になった薬袋には、アイラに見せた時は首を傾げていた文字がびっしりと並んでいる。二週間分の飲み薬は、昨日の夜で空になった。

(……飲まなくても、大丈夫じゃないかな……)

元より解熱剤は頓服の分しか持つておらず、毎食後服用していたのはただの吐き気を止める薬の他、それに似た物だけ。

はぁ、と一つ息を吐いて空になった袋を元通り鞆に仕舞い込み、ベッドから抜け出せば、少しだけ冷やりとした空気に身震いして、すぐに昨日の内に用意された服に着替える。

あとはいつも通り、アイラが来るまでは本を読んで過ごすだけ。そう思いながら本に手を伸ばしかけたルイは、その手を止めてベッドの上で膝を抱え込んだ。

「おはようございます、ルイ様」

「おはようございますアイラさん。今日、早いですね」

程なくやってきたアイラに挨拶をすれば、アイラはにこりと微笑む。

「今日もカイト様と魔法の練習をなさるのでしょう？ 先ほど伺った話では、イオ様も今日は一緒だそうですよ。午前からお聞きしましたので、早めに参りました」

イオさん、と口に出したルイは、すぐに緑の髪の少年を思い出した。レンと同じように、訓練に付き合ってくれるのだろうか、と考えて、カイトと二人きりではなかったことにルイはほっと息を吐い

た。

朝食を終えて、日も大分高くなってきた頃に現れたカイトは、いつも通り微笑んでルイに挨拶を交わす。

ただ、行きましよう、と声を掛けたカイトはいつものようにルイに手を伸ばす事はせず、扉を開けた。

昨日の態度を謝罪すべきかと悩んだルイは、結局口を開けず俯く。どうしてあんな態度を取ったのか、理由を見つけれなかった。

「おはようございます、神子様！」

訓練所に入るなり明るい声に迎えられ、ルイは少し驚いて中の人物を確認する。

「イオ、さん。おはようございます」

少しだけ微笑めば、嬉しそうにイオが傍にやってくる。嬉々として近づいた彼はそのままにここにことルイの手を取った。

「騎士団長、今日は僕も神子様のお手伝いをさせていただけるんですよね？」

「ええ、お願いします。移動術なら、イオにお願いできるなら安心です」

「任せて下さい」

なんとなく会話に出てきた「騎士団長」と言う言葉の意味を考えながら様子を見ていたルイの手に、イオが躊躇いなく触れひし形の石を握らせる。

「今日は僕と練習しましょう、神子様。僕は移動術は得意なんです」
微笑む少年はそのまま部屋を中心までルイの手を引き案内すると、そのまま練習を開始する。

カイトは部屋の壁に背を預け、その様子をただ微笑んで見守る。
ただ、普段通りに見える彼の指先は、少しだけ何かに耐えるように

握りこまれていた。

「お疲れ様でした、神子様、お見事です。今日はこれで一度お休みしましょう。魔法を連続使用するのは、とても疲れてしまいますから」

かなり休憩を挟みながら練習していたのだが、夕方前にはイオはそう言つてルイの手を止めた。

確かにルイは疲れて少し息が上がっていたが、イオはまったくその様子はない。経験が違いすぎるのだらう。

「ありがとうございます。大分コツ、掴めた気がします」

「もう浮くだけなら余裕ですもんね。さすが神子様、習得が早い」
ルイは微笑むイオから何となく視線を外し、カイトの位置を確認すれば、朝とまったく変わらない場所で待機している。

すぐに視線を戻したので、イオはその視線に気づく事なくルイにひし形の石……正確には、移動石と呼ばれる物を持たせた。

「早い……んでしょうか。あ、あの、イオさん」

「はい？」

「神子様……じゃなくて、ルイって呼んでもらえませんか。なんだから、自分が呼ばれてる感じがしなくて……」

「え？ でもそれは」

「風の神子様っているんでしょう？ 何て呼んでるんです？」

「……お名前で呼ばせていただいています」

「なら、私も。せっかく、歳が近いのに」

俯いてルイがそう呟けば、少し驚いたようにイオがルイの顔を覗き込んだ。

「失礼ですが、神子様はおいくつなのですか」

「私、今年十九になりました。……背、ちっちゃくてよく幼く見られますけど」

その言葉に、イオはあつと声を上げて頭を抱えた。

すぐに謝罪の言葉が掛けられる。

「僕もそうだと……うわ、失礼な事しちゃいました。しかも、同年だったんですね」

「え？」

「僕も今年十九です。誕生日はまだ来ていませんが。そうか、神子様同い年だったのかあ」

「わあ……同い年の方に会えて、嬉しいです」

しばらく考えるように俯いていたイオだが、顔を上げると「なら」と微笑んだ。

「ルイさんと呼ばせて頂く事にします。僕の事は好きに呼んでくださって構いませんから」

「……そういえば、レンさんはルイって呼んでくれるんですよ」

「あー、レンは絶対勘違いしてるからなあ、僕も言えないんですけど。レンは僕らの中で一番年下で、気にしてるんですよ。まだ十八だから」

笑って話をしてくれるイオに、ルイはほっとしてカイトを見る。

気がついたカイトが二人に近づいて、戻りましょうかと声を掛けてくれた。

「イオさん、また」

「はい、ルイさん」

そんな会話でも少しだけ嬉しいな、とルイは少し楽しそうに部屋を出る。

ルイは決して、この世界で生きていくのに、前の世界のように誰かと深く関わることなく生活したいとは思っていない。ただ、周りが年上ばかりで気後れしていただけで。

アイラはいくら頼んでも「ルイ様」と呼ぶ事をやめないし、歳が同じイオの存在にルイは仲良くなれるかな、と少しほっとして身体力を抜いていた。

「楽しかったですか？」

「え？ あ、はい。イオさん、同い年だって聞きました。ちょっと嬉しいですよ」

突然の質問に、ルイは少しだけ微笑んで答える。

そうですね、と微笑むカイトも微笑んでいたが、ルイから視線を外していた。

部屋に戻ると、今日は既に夕食の準備をしていたアイラがお帰りなさいと出迎えてくれる。

それでは、と背を向けたカイトが、思い出したように振り返ってルイに声をかけた。

「実は、明日なんですけど」

「はい」

「魔法の練習は一旦お休みになりますが、ルイさんを街に案内することができそうなんです。私とアイラで護衛する事になりますが…

…イオは仕事が入っています」

「え、街ですか？」

その言葉に、ひよいと下からカイトの顔を覗き込むルイに、カイトは少しだけ申し訳なさそうに微笑んで目を逸らした。

「必要な物も多いでしょうから、お買い物に、と前からアイラが上に掛け合っていたんです。いい気分転換になると思いますよ」

「わあ、嬉しいです。でも、お金」

「あなたは騎士団所属ですから、給与は支払われますよ。それに、生活に必要な分は用意しています」

「え、でも」

「ルイ様、ここは甘えちゃってください。必要経費ですわ！」

意気込むアイラに押されて、ルイは困ったように視線をさ迷わせた。

「……お給料で、返せるかなあ」

「……それ程真面目にならなくても、ルイ様。貰えるものはもらっちゃいましょうよ……」

アイラの少し呆れたような笑い声と、カイトの苦笑に、ルイは絶対返すもん、と手を握る。

既に毎日の食事や待遇から、相当ルイが目が回りそうな金額を頭はよぎるものの。

「まあ、気にしないで、と言っても今のルイさんは納得しないでしようから、アイラ、少しだけ放っておきましょう」

クスクスと笑う二人が出した結論は、そんなものだ。

契約と魔法―6

「わあ、やっぱり、いろんな町の人がいっぱいいる」

町に出て少し歩いた先で、ルイはアイラの隣でそう呟いた。

「そうですね、王都にはやはり、たくさんの方が集まりますから」
見回せば、多いのはやはり金の髪なのだろうが、水色や、桃色等、
ルイには珍しい髪色をした人が数多くいる。

やはりイオ達に会った時に思った通り、どの町の民かは髪の色を
見れば大抵はわかるそうだ。

そしてそれよりやはり目を引くのは、通りに並んだお店の数だ。

服を飾る店、色とりどりの果物を置いている店、中にはまるで茶
屋のように店先でお茶を味わっている人がいる建物など……それぞ
れの店先で買い物を楽しむ人達に釣られて、ルイもきよろきよると
視線を動かしていた。

ただ、カイトの傍にいては彼女に悪いのでは、という考えはその
ままで、常にアイラの隣からルイは動かない。

「何かほしいものはございますの？」

「え？ うーん、いろいろ用意してもらっちゃってるから、特には
……」

考え込むように頬に手を当てて俯いたルイを見ながら、アイラと
カイトは顔を合わせて微笑んだ。

ルイは確かに楽しそうにしているから。満面の笑顔、とはいかな
いが、人を、店を見るルイの表情は嬉しそうだ。

「でしたらやっぱり、服を見に行きましょう！ あと、アクセサリ
とか下着とか！」

「え、え？」

「用意された物はカイト様を選んで届けてくれた服以外少ししかあ

りませんもの。そうしましょうルイ様」

笑うアイラの手には、いつのまにか買い物リストと書かれた用紙がある。

そのまま手を引かれ街を歩くルイとアイラの後ろを、周囲に注意しながらついて歩くカイトは、どこか少し寂しそうに微笑んでいるのだが、前を歩く二人にはわからない事だった。

「ふう、私まで買いこんでしまいましたわ」

一件目に立ち寄った服屋で、数着自分用の服を買い込んだアイラは満足そうに頷いている。

ルイはといえば、勧められるがままに買ってしまった服を、カイトが「持ちますから」と取り上げてしまった事にただ申し訳ないと俯く。カイトは荷物もちではないのに、と。

「これくらい構いませんから」

さあ次のお店へ、とカイトに促されアイラに手を引かれて店の扉を潜るが、カイトは隣の店の壁に背を預け入る様子がない為、ルイは困ったようにアイラを見た。

と、ふふ、と笑ったアイラが指差したそれを見て、納得する。女性物の下着を取り扱っている店だ。

道理でカイトが中に入らない筈だ、とルイがきよきよしていると、アイラはどんどん奥へ入って行き、これなんてどうですか、とピンク色に黒いレースが施された、可愛いけれどもルイが顔を真っ赤にしてしまうものをルイの身体に重ねる。

「ルイ様は意外と胸、大きいですからね。これくらい色っぽい感じで、カイト様に……」

「……え、へ？ カイト、さん？」

一瞬うまく言葉を飲み込む事ができず、「色っぱく……？」と呟いたルイは、すぐに首から上を真っ赤に染め上げる。

「ななな、何、何言ってるんですかアイラさん……っ」

「これと、これもどうです？ あーでもやっぱり、カイト様は純白や薄いパステルカラーの方がいいかしら」

「いや、えっと、カイトさんに見せる前提ってどういう選び方……！」

「まあ！ いつ何があってもいいように、お洒落は下着からですわ。ああ、やっぱり淡い色の方がいいかもしれませんね、こちらはいかがです？」

真っ赤になったままのルイの目の前に出されたのは、確かに先の物に比べたら落ち着いた色合いの物で。淡い色に、白いレースが確かに可愛らしい。

「うっ、えっと……か、買うなら、そっちの方がいいんですけど」

そうですか？ と笑顔でいろいろ選び出すアイラに、これ以上いたら大変なことになりそうだと考えたルイは、サイズだけ確認して数点選んですぐに外で待つ、と出口に走った。

（黒とか紫とか……！ 着けた事ないものばかり……っ）

顔が恐らく赤いだろうから、ぱたぱたと手で仰ぎながら慌てて外に出る。

カイトが少し離れた所に見えて、とりあえず一人はまずいのかもしれない、とそちらに向かおうとルイは一歩足を踏み出す。

「カイトさ……」

しかしルイはそのまま腹部に強い力を加えられ、悲鳴を喉に押し込んだ。

くるりと視界が反転して、一瞬綺麗な青い空が見えたかと思うと急に真っ暗な影に覆われる。

口が塞がれて、くぐもった声しか出ない。両手が後ろで固定され、強く引かれるがまま後ろ向きでずるずると暗い道を後退する。

明るく、人が行きかう先ほどまで歩いていた筈の通りが、どんどん遠く離れていく。両脇は、黒い壁だけ。一瞬何が起きたのかと目

を見開いたルイは、辛うじて視界に自分の後ろから腹に回された腕を捉えて、ぞくりと背に走る何かをやり過ぎることもできず、ああ、誰かに捕まった……？ と上手く働かない頭で考えた。

「そうだ、大人しくしてろよ？」

低く、嘲るような笑みを含む声が自分の頭の上から聞こえる。

（男の、人……！？ う、うそ、どうしようっ）

腕力がない自信はある。口は塞がれ声は出せない。……逃げ出せない、という結論に至ったルイは、眉を寄せ唇をかみ締めた。

強く引かれるせいで擦れて、かかところが痛む。背に冷たい汗が流れ、心臓がばくばくと音を立てて、周りの音まで聞こえなくなってしまう。

しばらくなのか、ほんの少しだったのかわからないが、ある程度奥に進んだ所でルイは急に手を離され、その拍子にバランスを崩して後ろに倒れこみ、地面に転がった。

「げほっ……！ い、っ」

誰かに連れて来られた……ルイは、痛みに歪めた顔を前に向ける。

「何？ 何か文句でもあるの？」

「そうそう。何、その顔、生意気ー」

現れたのは、女だ。女は冷やりと背筋が寒くなるような表情で地面に転がったルイを見下ろした。その後ろから、くるくるとした金の髪を二つに分けた少女も、ひよいと顔を出す。

何をするの。そういおうとした口からは、恐怖と痛みで「はっ、」と息を吐くような声しか出ない。

「変な女。悲鳴とか、上げないの？」

隣にいる男が、そう言って笑った。この人が自分を拘束した男だろうかと目を向けたルイは、息を止める。

体格のいい男で、冷たく見下ろす女と蔑むような目でみる少女の隣で、興味がないといった風な表情でその様子を眺めている。助けは望めない。

（これ……って、や、ばい雰囲気だよね……？）

暗い路地に引きずりこまれ、いかにも怪しい場所で知らない人間に取り囲まれて、しかも決していい空気ではない様子で自分を見下ろしている。

まずい、やばい。この人たちは、何。そう考えたルイは、無意識に癖でポケットの石に手を伸ばし、握りこむ。

「あんた、何持ってるの？」

「……つかはっ、げほっ」

上手く息を吸い込めず、それでもルイは何とか距離をとろうと上半身だけ起こし、ずるずると後ろに下がる。他の人間がルイの行動を不審に思う前に、強い怒りを含んだ声が聞こえた。

「ねえねえ、あんたさ、何で今日もカイト様と一緒にいるわけ？」

カイト様の、何なのさ？」

まだ幼さが残る少女が、少しだけ目を細めて、嫌悪するようにルイに言葉を投げつける。

「見たんだよ、あたし。二週間くらい前にあんたがカイト様と手繋いで服買ってるトコ。しばらく留守にしたカイト様を街で見かけて喜んでたら、隣にアンタがいて、カイト様は笑ってて。……なんなの？　どこの街で育った光の民か知らないけど、何様？」

その言葉に、ルイは漸く自分の連れてこられた理由を理解した。

神子だと知らない彼女らにしてみれば、憧れるカイトの隣に知らない女が急に現れて、おもしろくないのだろう。……少し考えるととてもわかりやすい事だった。カイトはあんなに素敵な人なのだから、と考えて、俯く。

（それでも、ここまで……する？）

言いたいことがあるなら、表で堂々と食って掛かってくれたほうがいい。こんな裏路地で、人気がない場所で……そう考えながら、理由を理解したルイはすぐに、未だ何か言い続けている女を無視し

て、何処か逃げ道はないかと視線を巡らせた。

震え上がっている場合ではない。キツイ言葉を投げつけられるのには、慣れている。……それもおかしい話だけど、とルイは内心少し苦笑して、ぐっと唇をかみ締め二人の女を見た。

この場合、男が興味なさそうにしているのは運がよかつたのかもしれない、と女を見つめたルイは、その違和感に首を傾げた。

（な、……に？ あの人たち、髪が光って……）

「聞いているの！？ アンタがいなかったら……っ！」

——聞いているの！？ ルイ、あなたがお母さんを、……

突然頭に忘れられない声が響いて、ぐらりとルイの視界が揺らいだ。目の前で声を荒げる女性が、ぼやぼやと歪み、別の女性になった。胸が締め付けられたかのように息を吸い込めなくなる。

あ、まずい。薬飲んでないから、吐きそうだ。……そこで、ルイは意識を手放した。

「お待ちせしましたー」

明るい声が耳に届き、カイトは顔を上げる。声のする方を見れば、アイラが大きな袋を抱えて店を出てきた。

「お帰りなさい……アイ、ラ？ ルイさんは？」

「え？ カイト様と外で待っているとちょっと前に……え！？」

その一瞬で状況を把握したカイトは、ぱっとその場を離れ今アイラが出てきたその店に足を向けて、すぐ自分の持つ石の一つから弱々しい魔力を感じて、足を止めた。

「……ルイさん！？」

「カイト様！？ ルイ様は！」

「ここで待っていてください！」

カイトはそれだけアイラに叫ぶと、すぐに店の横の細い路地へと入り込む。

伝達石。……弱々しいながらもその魔力は、正確にルイの今の位置をカイトに知らせる。

数メートル走った先に、すぐに少し開けた空間が見え、長く美しい金の髪が、白く細い手首が辛うじて見えた。

(……！ 間違いない、あれは)

視界にルイを捉える。強く地面を蹴り上げ、その開けた空間に飛び込んだカイトの目の前で、髪の長い女がルイに酷く怒りを含む声を上げた、その時、ルイの体がぐらりと揺らぐ。

「ルイさん！」

駄目だ、倒れる……そう思ったカイトが手を伸ばした時、ルイの体がふわりと浮いた。ルイの手に、伝達石と一緒に昨日練習で使用したまま持たせていた移動石が握られている。

驚くカイトの横で、「ちっ」と小さく舌打ちが聞こえる。ルイを睨みつけていた女が、その手に何かを握ったのが見えた。

「っ！ 逃がしませんよっ」

「あんたに、用はないんだよね」

女が、くつと笑って手に力を込める。

「……君達、闇の……！？」

確かに目の前の女二人の金の髪に、漆黒が混じるのを見たカイトはすばやく握りこんでいた石からぱちぱちと青白く光を放つ剣を取り出した。

しかし、それを振るう前に

「ルイさん！」

ふわりと宙に浮かんだルイが、ゆっくりと漆黒の髪の女達に指先を向ける。ルイの目は焦点が合っていないのか、ぼんやりとした表

情で女達を捉えてはいない。ただ、まっすぐに向けられた指先が一瞬光ると同時にその前方に円形の陣が展開し、強い風が周囲に吹き荒れた。

「ぎいい!？」

突然人ならざる者の声が聞こえ、そしてすぐに消えた。ぱらぱらと、ルイの手から塵になった移動石が零れ、ぱったりと、風も止む。音を立てて、女が二人崩れ落ちた。二人とも、透き通った金の髪。

「ルイ……さん……？」

自分の声が、震えているのに気づいてはいるが、ゆっくりとルイに声を掛ければ、ルイは急にくったりと力が抜けたように宙から力イトの腕の中に落ちた。

名前を呼び、声を掛けるが目を閉じたルイは反応を示さない。ただ、小さく胸が上下しているから、気を失っているだけだろう。

「今は、神子の魔法陣だ……どう、して」

呟いてみるものの、答えてくれる人は、いない。

「おもしろいもん、見ーちゃった」

呆然とルイを抱きかかえるカイトを屋根の上から覗き込みながら、一人その場にいた筈の男がにやりと笑って、その場を後にした。

「……ライ、兄さん」

細い路地裏、人通りのないその場所に近づく気配に、カイトはルイを腕に抱いたまま、後ろを見ずに声を出した。

「あーあ、カイ、お前何してたんだよ。代々フォレストン騎士団長を努めるフォルストレ家の息子ともあろうもんが」

ゆつくりとカイトが後ろを振り返れば、そこに金の長い髪をなびかせて、颯爽と現れたのは自分の兄。

「お前の姫さん、ボロボロじゃねえか」

「きやああ！ ルイ様あ！」

ライトの後ろから、顔を真っ青にしてアイラが飛び出して来る。

乱暴に扱われたのかとところどころ破け、泥だらけの靴や服、腕や足の小さな傷から血をにじませたままカイトの腕の中で眠るルイの頬に触れ、今にも泣き出しそうにルイの名前を呼んでいる。

「大丈夫ですアイラ、気を失っているだけです」

「わ、わたく、しが、離れたりしたから……」

「兄さん、どうしてここに」

目を離してしまったのは自分も同じ。そう悔やみながら視線を兄に移したカイトに、ライトはため息混じりに「お迎え」と伝えた。

「母さんから伝言。この前の南の門の騒ぎで、死体になって町に落ちてきた南門の兵士に闇の者が取り憑いていた可能性がある。至急神子を連れて戻れ」

「遺体に……それで結界を突破して街中に闇の者が入り込んでいたのか」

「知ってるってことは、倒したんだろ？ 今ここで発生してた魔力はお前のせいかなぁ？」

カイトは答えず、口を閉ざして目を逸らす。その反応をライトはただ黙って見ていたものの、追求する事はせず背を向けた。一言、「さすが神子様」とだけおもしろそうに呟いて。

「ま、もう気配はないし浄化されたんだろうけど、残念だけとお前のお姫様には城に戻ってもらうぞ。これでまたしばらく外出できないのは可哀想だけだな」

「は、はやくルイ様の傷を」

涙目で訴えるアイラに頷いて、カイトはひょいとルイを抱き上げる。と、すぐに腕の中で小さな声が聞こえた。

「……ルイさん？ 目が、覚めましたか？」

「ルイ様！？ 大丈夫ですか？ どこか辛くありませんか？」

「う……ん……カイ……さ、」

近寄ってアイラが声を掛けると、辛そうに眉を顰め、身体を縮めたルイが、うわ言のようにカイトの名を呼ぶ。気がついたわけではないらしく、ずっと伝達石を持ったままでその手を強く握っている。「おーや、お呼びだぞーカイ。あの女には無関心で、微笑みながら言い寄る女ガン無視してたお前が、随分懐かれたもんだなあ。ま、姫さんの前じゃいつも楽しそうにしてるもんなあ？」

「煩いですよ、ライ兄さん。人を極悪非道人みたいに。それよりこのまま通りに入るわけにいかないんですから、治療してください」

「なんだ、つまんねーな」

「え？ ライト様って、治療術使えました？」

アイラの驚く顔を見て満足そうに頷いたライトがルイに手を翳すと、淡い光に包まれたルイの手足の小さな傷が薄くなり、消える。

「まあ！ すばらしいですね。もしかして、契約されましたの？」

「やっぱり、王女様と？」

「当たり前、アイラちゃん、これ内緒だぜー？」

小さな桃色の石を埋め込んだ指輪を右手中指に嵌めたライトが、嬉しそうに指をアイラに見せる。

「綺麗な桃色の想い石……素敵ですわ。契約されたから、新しい魔法が使えるようになりましたのね」

「そゆこと。カイトもやったら？ お前治癒能力は皆無だし、支援系も苦手だろ。攻撃力ばっか強くなりやがって」

「やったら？ で簡単に出来る事じゃないでしょう、婚約の儀式なんですから。わかつたらさっさと手袋嵌めて下さい」

むすつとした様子でルイを抱きかかえたままそう言ってさっさと歩き出すカイトの後ろで、ライトが怖いねーと言いながらにっこり笑って小声でアイラを呼びながら傍によった。

「あいつ、やっぱり姫さんの事気になってる？」

「だとは…… 思いますけど。なんかすれ違ってる感じがあるんですよね、お二人。今日もルイ様、妙にカイト様を避けてたみたいですし…… 大丈夫かしら」

「あれま。まあ、若いつていいねえ」

クツクツと楽しそうにライトは笑って、カイトの後を追って歩き出す。このまま通りに出れば、目立つカイトが女を横抱きにして現れた事でまた大騒ぎだろうな、とアイラに言いながら。

ゆらゆら揺れる感覚と、暖かい何かを感じてルイはぼんやりと目を開けた。

（…… あ、あの日起きた時に、似てる）

ふわりといい匂いがする気がして、暖かさに気持ちが悪く落ちてくうで、だんだんと輪郭がはっきりしてきた目の前にある物を見つめていたルイは、「ふえ！」と間の抜けた叫び声をあげた。

「ああ、ルイさん。…… 大丈夫ですか？ どこか、痛みますか」

「か、カイトさん。あの、えっと」

「気を失っていたんですよ。もうすぐ部屋につきますから」

カイトの顔が近くて、背と、膝裏に感じる温もり、それに自分の目に映る景色。ああ、もしかして今すごい体勢なのでは、と考えたルイは、真っ赤にした顔をすぐに真っ青に変えた。

「あ、あの、歩けます！」

「……とは言っても、もう部屋につきましたけど」

目の前にアイラが走ってきて、扉を開ける。確かにここは自分が世話になっているいつもの部屋で、呆然としている間に横抱きにされたまま部屋のふかふかの整えられたベッドに下ろされ、ルイは小さくお礼を述べた。

「さつてと、姫さんも無事に戻った事だし、あの倒れてた女二人の尋問でもしてくるかね。お前の隊の奴が捕まえてあるんだろ？」

「捕まえ……部下に保護させてます。恐らく彼女達は操られてただけだと思いますけど」

「話聞かなきゃなんで姫さん狙ったかもわかんねーだろ。大体察しはついたけどな。じゃ、あとよろしく」

「わ、私も少し、……そう、お茶の準備でもして参りますわ。ルイ様、カイト様にちゃんと、何があったかご報告して下さいね」

「いったい何が何なのか、わけがわからずルイが「え？」と声を上げた時には、アイラとライトはさっさと部屋を出て行ってしまう。」

沈黙。部屋に残されたのは、自分とカイトだけだ。……そう思ったルイは、急に心臓が激しく主張しだしたのに気がついて、息を詰めた。

「ルイさん」

「は、はい」

「何が、ありました？」

優しい声。ベッドに座るルイに視線の高さを合わせ、床に膝をついて顔を覗き込むカイトの顔は、酷く悲しげに見えた。

「ご、ごめんなさい。店を出て、カイトさんの傍に行こうと思ったら急に後ろから押さえられて……その」

ルイは口ごもった。自分が連れて行かれた理由はわかっている。だけど、それを言つては……いけない気がしたから。

「何をされました」

「引きずられて、途中でひっくり返つて転んだだけです。何かされただけです」

カイトの表情がいつもの優しいものとは違う気がして、ルイは緊張で言葉を詰まらせる。優しいカイト。でも、目に怒りが揺らいで見える。

「では、何を言われていたんです？」

「……わ、わかりません。緊張してたから」

はあ、とカイトがため息をついて、ルイはびくりと肩を震わせた。恐る恐るカイトの顔を見れば、視線が絡まる。

「……気を、失う前の事は覚えていますか」

「え？ 覚えてるのは……えっと、男の人に連れて行かれて、女の人二人に怒られて、どうしようって思ってた……た、ぶんそこから意識ない、です」

「男？ 男がいたんですか？ おかしいですね、あの場には……ああ、でも男に、……何もされていないんですね？ よかった」

少し焦ったように早口になったカイトは、急に腕を伸ばしてルイを抱き寄せる。ふわりといい匂いがして、ルイは驚いて身体を硬直させた。

「か、カイトさん。離し……」

「あなたが私を苦手としているのは、わかっています。すみません、少しだけ」

強く抱き寄せられて、ルイは心臓の音の煩さに目を強く閉じる。耳に、カイトの吐息が触れる。ぞくりとして、でもそれは恐怖ではなくて。

「あなたに何かあったら、私は自分を一生許せません。無事でよか

った」

声が、微かに震えているような気がした。抱きしめる腕の強さに、ルイはゆっくり目を開く。

自分をこれ程大切に、優しく抱きしめてくれた人は、今までいなかった。

緊張して煩いくらい騒いでいた心臓が、ゆっくりと落ち着きを取り戻して行く。

温もりを感じながら、落ち着きを取り戻し身体の力を抜いたルイは、少しの後、眉を顰めた。

感じるのは、違和感。彼女がいるカイトが、なぜ護衛の対象とは言っても自分にこのような態度を取れるのか。

好意を持っただけでもそうでなくても、彼女の立場を考えればこうして抱きしめたりはしないだろう。カイトなら。そんな不誠実な人ではない。

——見たんだよ、あたし。二週間くらい前にあんたがカイト様と手繋いで服買ってるトコ。

——カイト様が、街で少女と手を繋いで仲良くお買い物を楽しんでおられた。そんな噂で持ちきりですよ。

先ほどの少女に言われた言葉を急に思い出して、ふとルイはアイラの言葉を重ねた。もしかして、まさか。

そこで漸く、どっと緊張が解けたかのようにルイは力が抜けた。

酷く怖い思いをして、恐ろしく緊張していたんだ。久しぶりに……そう思った直後、ぽたりと雫が零れ落ち、カイトの軍服に染み込むのを見た。

(……なみ、だ?)

まさかと思っても、堰を切ったようにぼろぼろと零れる涙にルイ自身が驚いている間に、ルイの動揺を感じたカイトがゆっくりとその腕を解いて、その涙を見た瞬間に慌てる。

「す、すみません、ルイさん、泣かな……」

「違う、違うんです。嫌なんじゃなくて。あの」

すぐに背に回されたカイトの腕が緩む。少しずつ失われる温もりに、まるで縋るようにカイトの腕を掴み止めるルイに、今度はカイトが何故と疑問に首を傾げる。

「あの、カイトさんって彼女いるんじゃないんですか」

「……え？ 彼女って、……は？ 恋人、の事ですか？」

「その、そういう噂があるって、聞いたんです。だから、その」

「……それで、その彼女に悪いから、と距離を置こうとしたり、しました？」

「だっていくら仕事でも、恋人だったら、他の女の人の護衛とか、嫌だと思っただけです。だけど」

「ああ、そういう事でしたか。……いませんよ。その噂がどういったものかわかりませんが、それなら立候補したりしません。あなたの護衛は、私が自ら志願して得た大切な役目です」

「や、やっぱり違ったんだ……」

自分の勘違いだった。そう思って、今までの態度を考えて、その時のカイトの表情を思い出してしまったルイは申し訳なくて俯いた。

自分を守ろうとしてくれていたのに、何て態度だったんだ。そう考えながら俯いたままのルイを見ながら、カイトが声を掛ける。

「もう、大丈夫ですから」

言いながらカイトがルイの握り締められた右手に触れる。重ねられた手が優しく、そっと強く握り込んだ手を開き、カイトの手にころりと小さな石が落ちた。

「あ」

「ほら、手。力を入れすぎて赤くなってるじゃないですか」

「わ、私、また。ごめんなさい」

「いいえ。……少しだけでしたけど、買い物楽しめましたか？」

「楽しかった、です。ありがとうございます」

顔を赤くして、涙目のままの少女がそこで、ふわりと、初めて柔らかに微笑んだ。

一瞬驚いて、心臓がその鼓動を止めたのでは、と思ったカイトは、一つ大きく息を吸って、同じように微笑んで、まだ涙の伝うルイの頬にゆつくりと手を伸ばす。

「誤解が解けたのでしたら、あなたに触れても構いませんか」

「え？ ああ、いろいろすみませんでした」

（……意味は、伝わっていないようですね）

本当に母の預言通りに神子が現れたとしたならば。

フォルストレの名にかけて、この町の、世界の為に自分が護りたい。

神子なのだから、自分が護らねば。そう思っていただけの筈の感情が、変化していたのだと今気づく。

契約と魔法―8

「あー、あいつら失敗したあ！」

暗闇で、子供の甲高い声が響いた。

「もう少しだったのに、悔しいなあ」

「……まあいい。まさか光の神子を狙うとは思わなかったが、向こうの状況が得られただけ上出来だ。あいつはまだ魔力を殆ど使えてないらしい」

「負けちゃったけどね」

「あんな下級戦士に負けては、むしろ我らが神子はご機嫌を損ねるだろう」

「だよねー、と、小さな子供が笑う。

「今度は、もう少しマシな奴に相手をさせるさ……ああ、お前が行くか？」

にやりと男が笑う。嬉しそうに、子供がその幼げな口元を歪めて笑みを返した。

「ルイ様、そろそろお休みになったらどうです？」

部屋でひたすらに本を読み続けるルイに、少し心配したようにアイラが声をかけた。

ルイの周りには、ルイ自身を包むものと、その周囲にふわふわといくつかシャボン玉のような光が浮かんでいる。数日前に外出許可が取り下げられてしまった為、訓練所に行く事ができなくなってしまったルイは部屋で防御壁を練習しながら魔法の勉強をしていた。胸元に、透き通った薄い青色のブローチをつけている。

本を読みながら同時進行で結界を張る練習をするのだから、当然

疲労は早い。アイラはルイのページを捲る速度が遅くなってきた事に気がついたのだ。

「んー、大丈夫、です。もう少し」

そんな事を、数回繰り返した辺りで、部屋にこんこんと訪問者を知らせる音が響いた。アイラはちらりとルイを見るが、ルイは気づいている様子がない。

ため息をついたアイラは、恐らく訪問者は今唯一ルイを止める事ができる人物であろう事を予想して、すぐに扉を開けた。

「カイト様！ 何とかしてくださいませ」

「……ああ、またですね」

カイトは苦笑して、部屋に入り込む。ルイの前までまっすぐに進むと、幼子を叱るような優しい声で、「こら」と言って苦笑した。

「ルイさん」

「え？ わっ」

カイトが名前を呼ぶと、ぱつちんと周囲の光の膜が割れ、驚いた顔をしたルイが腰掛けた椅子から背の高いカイトの顔を見上げて、小さく「うあ」と声を上げた。いたずらが見つかった子供のような表情をする。

「あれ程無理をしてはいけないと言ったでしょう？ アイラが心配していますよ」

「ごめんなさ……夢中に、なっちゃって」

「熱心なのはいい事なんですが……いえ、やっぱり駄目です」

少し無理すぎです。とカイトはそつとルイの頭を撫でる。実はこうして止めるのは、今日で五回目だった。無理矢理休ませて、また無理してをここ数日繰り返しているので、アイラですら少し呆れ気味だ。

「ルイ様が無理しないように、カイト様にこの部屋で生活してもらいたい位ですわ」

「それが、ルイさん。母さんが本気で心配して、本気でそれを提案してきてるんです。あんまり無理すると本当に私がここで見張りますよ?」

「え! そ、それは……見張られたら、集中できません」

「冗談めかしているカイトとは違い、とたんに真っ赤になって口を尖らせ、本をぱたんと閉じるルイにアイラは二人の後ろで嬉しそうに笑う。

ここ数日、ルイの表情は以前に比べると本当に変化がよく見られるようになった。笑顔を時折見せ、アイラと話していても楽しそうにしている、わからない事を素直に質問してくれるので話し出すと会話は止まらない。

特に、時間の流れの違う異世界の彼女の身体が、現在はこちらの世界と同じ時を刻んでいる。と医師に判断されてからはほっと表情を崩し、それからだろうか。カイトが来ると嬉しそうに微笑むので、その表情を見るだけでこちらまで幸せになれそうだと、アイラは思っている。

ここで気になるのがやっぱり乙女心というもので、アイラがさりげなくカイトの事をルイに尋ねてみると、「お兄さんができたみたい。本当にいたならこんな感じで楽しかったんだろうな」なんて回答が返ってきた事だけがアイラの不満なのだが。「どう考えても、違うだろう」と。

「また約束破ってたみたいなので、これはお預けですね」

「え? あ、新しい本……! ず、ずるいです。お部屋にいたら、読みたくなるんですもん」

「すみません。防御結界が安全に張れるようになるまでは、我慢して下さいね。まあ次に外出する時は、目を離したりしませんけれど」
だからと言って、無理して結界の練習をしたら連れていきません。

と笑顔で言うカイトに、ルイは少し唇を尖らせた。

ルイの外出許可が下りなかった為に、王都に滞在していたイオやレンが町に戻る時見送りができなかったのだ。

買い物もあの日は途中で終わってしまった為に、本当はルイが一番興味があつたアクセサリーショップに寄る事もできなかった。

この世界では宝石は魔法の原動力。ルイが今胸につけているブローチも、防御壁を張る為にカイトから借りたものだ。

「ルイ様はお買い物に行きたいんですものね」

「え？ 何かほしい物があるんですか？ 言つてくだされば用意……」

「ち、違いますっ！ ほしんじゃないくて、見てみたいんです。いろんな石とか……カイトさんの胸のバッチとか、ベルトの装飾具とか、全部魔力石なんでしょう？ いろんなの、見てみたくて」

「ああ、そうですね。それなら……」

少し思案したカイトは、「私の部屋に行きますか？」と言った。

「店程ではありませんが、いくつかありますから」

「まあ、カイト様のお部屋って……メイドも入ったことがない我が屋敷の未知の領域じゃないですか」

ふふ、とアイラが笑う。カイトの部屋には魔力石と呼ばれる魔法に使う石や武器が多いために、使用人は出入り禁止……それこそ、たまに訪れるライト以外では部屋の主しか入った事がない部屋だった。

「え？ いいんですか、このお部屋、出ても」

「私が一緒にできる時ですが、それでもよければ」

「嬉しいです！」

ルイはここに来て文句を言う事がない。言われればこの軟禁状態が続いていても、特にアイラに対して愚痴をこぼしたりする事すら

なかった。それでもやはり退屈していたようで、すんなりとカイトの部屋へ行きたい、と胸の前で手を組んで目を輝かせた。

アイラがにやにやとカイトを見れば、カイトはそれに気づきさつと目を泳がせる。心なしか耳が赤いのは、今はアイラしか気がつかない。

「では、私は用事がありますので少し出ていますね。ごゆっくり、カイト様」

「……はあ」

気の抜けた返事をカイトがすれば、アイラはそそくさと部屋を出て行く。ルイはいえば、嬉しそうに椅子から立ち上がり、「今行ってもいいんですか」とカイトの顔を覗き込むように尋ねた。

普段は長い前髪が顔を隠すものの、身長の高いカイトをルイが見上げるとさりと髪が流れて、真っ直ぐに遮るものがないルイの瞳がカイトを見つめる。

三十センチ以上の身長差。それは意図せずルイが上目遣いをお願いしている形になるわけで、カイトは思わず片手で顔を覆った。

「……失敗したかもしれません」

「え？」

「……いえ。では行きましょうか。……ご期待に添えるかはわかりませんが」

「どうぞ、散らかつていますが」

カイトに案内された部屋は、二階への階段を上がってすぐのところだった。ルイの部屋はそれより奥にあるのだが、数部屋挟んで隣という近さだ。今まで何度か前を通り過ぎていたんだ、思いながら、小さく「お邪魔します」と部屋へ足を踏み入れたルイは、片付いた部屋に目を丸くした。

「散らかつて……って、全然散らかつてないじゃないですか」

むしろ部屋の中は物がなさ過ぎて驚くくらいだ。ベッドに、茶色

で統一された上品な様子の机と椅子、それにテーブルとセットで椅子が二つ。広い部屋で一番目立っているのは、本棚位だろうか。

カイトのイメージ通りと言えそうなのだが、魔力石や武器がたくさんある、と聞いていたので、もう少しすごい部屋だと思っていたルイは、首を傾げていた。むしろ、それらしき物は部屋に見当たらない。

ルイの部屋には、風呂とトイレ、簡単な物であれば作れそうな台所もついていて、ホテルのようだとルイは思っていたが、どうやらカイトの部屋もそうらしい。カイトはルイに椅子を勧めると、お茶を入れる為に湯を沸かし始めた。

「ルイさんのお目当ての物は、あっちの部屋ですよ」

きよろきよろしているルイを見て笑いながらカイトが指差した方向には、閉ざされた扉。

「……うあ、すみません、きよろきよろして」

「いいえ。面白いものはないでしょう？ あの手向こうなら、少しは楽しめるかもしれませんね」

「お部屋、綺麗ですね。……私、そういう男の人のお部屋入ったの、生まれて初めてです」

机の上に置かれている本や、本棚を見ながら呟いたルイは、カイトがまじまじと見つめているのは気づいていない。

「え……あ、ご兄弟は」

「妹が一人いますけど……父親も殆ど家にいなかったし、部屋なんて……あ、カイトさんは普段何してるんですか？」

ルイがあらさまに途中で、話題を変える。本人は僅かに眉を顰め、しかしカイトに視線を合わせず、強引に。

「……そうですね、基本は、仕事なんですよ」

「へえ……あ、お茶……ありがとうございます」

笑顔でお茶を口を含むルイに、カイトはそれ以上話を進めることができずに向かい側に座り、カップを手を取った。

ルイが戻りたいと言わない理由を、もしかして元の世界で何かあったのでは、と思い始めていたのは最近だった。

カイトはルイがあの日襲われた理由は聞いていた。自分に好意を持つ人間が、僻んだのだと……本人の意思に関係なく、わずかな感情が闇の者に操られ増大したのだと、兄から。

ルイはそれを彼女達に言われたのだらうと、あの時言いよどんだのを思い出してカイトはそれを聞いた時、頭を抱え込んだ。

それでも文句一つ言わない彼女。それに……ルイの身体の成長速度を検査した時の、医師の言葉を思い出して……カイトは少しだけ視線を下げた。

「では、鍵を開けますから少し待っていてくださいね」

「……なんか、頑丈そうですね」

「ええ、二重にかけてあるんですよ。実は、危ないからこの部屋にメイドを入れないって言うのは、嘘なんです。どうせこの部屋には鍵がかけられていて入れませんからね」

「え？」

「ただ単に、人が入るのを好まないだけなんです。……ああ、ルイさんは構いませんよ。特別です」

ふっと、何かを含んだような笑い方をするカイトに、ルイは素直に目を見開いた後微笑んだ。

その反応はカイトの意図していたものではなかったが、カイトも微笑んで扉を開け、駆け寄ったルイを部屋へと招き入れた。

「うわあ、すごい、です……！」

部屋中、所狭しと並べられる武器、そして宝石に、ルイは大きく息を吐いた。

決して散らかっているというわけではなく、丁寧に扱われているとわかるそれに、やはりカイトは綺麗好きなのだらうと頷いて、ルイは惹かれる用に部屋に吸い込まれていく。

「危険な物もありますから、触れては……ってルイさん、危ないですから」

ふらりと剣や槍が置かれている場所に近づいたルイが、足元を見ずに歩いているのを見てカイトは慌てて腕を引く。

「ひあ、すみませ……す、すごいですね、この部屋」

カイトの腕に抱え込まれた事より周囲に夢中になっているルイに、カイトは少しばかり苦笑して腕を解いた。

「私の家では殆どがフォレストン騎士団に所属しますから、入手にそんなに苦労しないんです」

「へえ……でも、透明な石が多いですね。カイトさんの胸についてるのは、ルビーですよな？」

「ああ、ルビー、ダイヤモンド、サファイア、エメラルド、それと純粋なクォーツは、各地の神殿に行かなければ得られません。一般の能力者が使う石は殆どがそれ以外ですから」

納得したように「そうなんですね」と呟いたルイは、しばらく部屋の中を珍しそうに見回した後、カイトの傍まで戻る。

「ありがとうございます。また、見に来てもいいですか？」

「え？ ああ、楽しめたのでしたら構いませんけれど……」

一瞬だけ困ったように微笑んだカイトは、しかしすぐに「また」とルイの頭を一つ撫で、部屋を出る。

（男の部屋、なんですが、ね……アイラが兄だと思っているって言うてはいましたが、なかなか……）

カイトのため息は、ルイには聞こえない。

契約と魔法―9

騎士団本部へと足を運びながら、カイトは頭を悩ませていた。もちろん悩んでいるのは、ルイの事。それと、もう一つ。

――神子様の身体は問題なく、我々と同じ時を刻んでいます。……ただ……

（彼女の熱の原因は、彼女の身体が彼女自身を攻撃しているから、ですか……）

医師の診断結果に、疑問を覚えるしかない。自分自身を攻撃するとは、いったいなんなのだと。

「神子様は自分を否定されておられるのかもしれませんが。精神面が身体に影響を及ぼして、身体が内部から攻撃しているのではないでしょう。炎症が、微熱を下げていないようです」

「否定？ 身体が自分を拒絶するまで、ですか？」

「わかりません。外部からであれば、闇の民が好む呪いの類かという考えもあったのですが……そういった点は見られませんし、微熱の原因は精神面ではないか、と……」

言いにくそうに視線をさ迷わせる初老の医師の言葉を思い出し、再度カイトはため息を吐いた。

彼女は何も言わない。ただ、元の世界で何かあったのだらうという事は察しがついた。……わかっているのは、それだけだ。

何とかしたくても、下手に思い出させて彼女を苦しめるのでは、という思いが邪魔して踏み込めない。

（……相当、ですね。私も）

もう一つの悩みは、それだ。ルイにどうやら特別な感情を持っているらしい、と気がついてからは、仕事で少しでも屋敷を離れると不安で仕方がなくなっている事にカイトは頭を抱える。

女性経験がないわけではない。兄程ではないが。しかし、こうして相手から離れられない事や、相手が頭から離れないという事はなかった。だからこそ、その感情が異常なものに感じる。

心なしか頭痛がするような頭を押さえながら騎士団本部へと足を踏み入れたカイトの前方から、カイトを確認した若い騎士がバタバタと駆け寄ってきた。

「何事ですか。騎士たる者、常に冷静を心がけなさい」

「も、申し訳ありません隊長！ あの、隊長にお客様で……」

「……私に？ 今日の予定ではありませんよね？」

「それが、ここ数日何度も押しかけてきている奴でして。正規な手続きも無しに無礼な事ばかり言い出すので、いたずらかと相手にしていなかったのですが……今日はちょっと手こずっているみたいで」

「無礼な事とは？」

「いえ、えっと……」

その時どこかの部屋の扉が強く開かれる音が派手に聞こえて、カイトは眉を潜めた。騎士団内でこういった事があるのは珍しい。騎士団の下で働く下級兵士達の施設ではよくある事だが。

「だから！ 噂の騎士団長に合わせろっつーの！ 最近ずっと女といる奴だし、暇なんだろう！」

「団長はお忙しい身です。申し訳ありませんが、お引取り下さい」

わあわあと騒ぐ男の声と、冷静に対処する男の声が廊下に響いた。騒いでいる男は知らないが、もう一人の男の声にカイトは驚いた。「デユオが帰って来ているのですね」

「すみません。騒がしくしてしまって、二日早く戻られた副隊長が丁度対応に当たっています」

とたんに、カイトはほっとした表情になる。声のする方に歩き出

したカイトに、部下が慌てると、「私に対応します」と笑顔で言っ
て立ち去った。

「会わせろーっ！　っーか駄目なら騎士団長じゃなくてもいいから、
あの女に会わせろーっ！」

「騒がしいですね。何事です」

「……カイト！　何で来たんだ」

カイトが姿を見せると、あからさまに一人の男が目を覆ってため
息をついた。カイトと同じ服に身を包み、長い髪をそのまま下ろし
ている。眼鏡をかけ、背の高い男だ。

その前で、「あっ」と大きな声を上げ、隣の男と比べると背が低
く、生意気そうな口を大きく開いて少年がカイトを指差す。

「いたー！　何回追い返されたと思ってんだてめえ！　人を害虫み
たいに扱いやがって」

「……失礼ですが、私はまったくあなたの訪問を知りませんでした。
何のようです？」

「女だよ女！　あんたと一緒にいた女、あいつに会わせろ」

（ルイさん……？　なぜ、この少年が）

眉を寄せたカイトの横で、再度ため息をついた騎士服の長身の男
が「無礼者」と騒ぐ少年の襟を掴み後ろに強く引く。

「……ああ、デュオ、構いません。……それで？　何故あなたが彼
女を探しているんでしょう？」

顔を顰めたデュオと呼ばれた青年は、ぐっと乱暴に手を離す。そ
れを目で追いながら、カイトはにこりと微笑んだ。その笑顔の背後
にぞくりとするものを感じて、デュオはカイトが既に大分怒りを溜
め込んでいる事を悟り、その日何度目かのため息をついた。

そんな様子をものともせず、騒がしい少年は胸をはり、それは得
意そうに口を開く。

「オレあいつに惚れた！　お前の女かどうか知らねーけど、会わせ
るよー！」

「……はあ？」

しばしの沈黙の後、思わず、カイトとデュオの言葉が被る。何を言っているのだ、とその少年を見下ろすものの、まっすぐにカイトを見返しているその目は本気そのものだ。

「……………残念ですが、そんな理由で会わせられません。お引取りを」

「おい待てずるいだろ、戦う前からオレに恐れをなしてんのか！？なんだ、自信ないんだろう。ってことは恋人じゃないんだな？」ふふん、と片方の口の端を上げて笑う少年に、カイトの笑みが怪しく深くなる。ああ、駄目だ。こいつ終わった。なんてデュオが思った頃には、調子に乗った男が更に言葉を続けだす。

「騎士団の女とも思っただけど、いないんだよなここには。どっちにしるあんなすごい魔法使っんだし、騎士が守ってんだろ？ならオレに護衛させるよ。オレを騎士団にいれてくれ」

「お断りします」

「なんでだよ。人が下でモノを頼んでるってのに」

「どこが下でなのかわかりませんが、弱い人間に守らせるつもりはありません」

すっぱり言い切るカイトの様子に、デュオは興味深げにそれを見守る。カイトの様子が珍しいものだ、と少しだけ口元に笑みを浮かべて。

「オレの実力を見ないうちから、決め付けんな！」

「なら、お相手してあげましょう。幸い訓練施設もある事ですし、その実力とやらを見せてみては？」

その言葉に、デュオがさすがに「カイト」と名を呼ぶが、カイトは怪しげな笑みを浮かべたまま手で大丈夫だからと合図して部屋に入り込む。

その後を追うようにして少年が部屋に入り、デュオが仕方なく後に続いて、すぐだった。

「さあ、どうぞ?」

「はあ? 何でもアリか?」

「どうぞ、ご自由に」

カイトは手ぶらだ。相変わらず笑みを浮かべたままの様子に、対面する男の表情が段々と険しいものになる。

こんなカイトは珍しい。これは後で話を聞いてやらなければ、とデュオが思ったところで、少年が動いた。

「オレが勝ったら、女オレによこせよ……! 喰らえ、サンダーソードツツ!」

男が腕を振り上げ、それを振り下ろした瞬間にバチバチと音を立てて、青白い光がまるで剣のように振り下ろされる。その刃先は長く、数メートル先にいたカイトまで伸び……床に届く前に、止まった。

「なっ」

「修行不足ですね。雷を使うとは思いませんでしたが」

「相手が悪いな」

カイトとデュオの声を聞きながら自分の剣先を見た少年は、目を見開いた。素手で、カイトが刃を止めている。いや、なんらかの魔力で止めているのだろうが、指先がその刃を掴み、そして男の雷を吸い取るように手に纏わせ始めた。

「オレの剣が……!」

「私は雷を自在に操れますから……すみません、これ、頂きますね」

カイトがそう思ったかと思うと、男の手からずっと雷が離れていき、カイトの元まで辿りつく収束して、消えた。

「な、なんで……」

「お前が相手にしているのは、フォレストーン騎士団最強騎士だぞ? 当然だろう」

デュオの言葉に、顔を正面に向け愕然とした表情のままがっくりと少年が膝をつく。

「きみ、名前は？」

「……ノール」

「ノール。あなたはあの女性が路地に連れ込まれた時あの場にいた。そうですね？ あの場に男がいた事は知っています。少女を連れ去った張本人が、ね」

さつと、ノールと名乗った少年の顔色が変わる。小さく「てめえ」と声を出したが、掠れて聞き取りにくい声になる。

「この者を捕らえよ！」

デュオが叫ぶと、バラバラと現れた騎士達が周囲を取り囲み、ノールはあっさりと掴まった。

「くそ……っ！ 知っててハメやがったな、きたねえ！」

連行されるノールを見ながら、カイトははあとため息をつきながら、呟く。

「彼女があんな協力的な魔法を使ったのはあの路地だけなんですよ。

その魔法を見たというのなら……」

「はめたも何も、自分で挑んで負けたんだよな彼は。……で、カイトは何でそんな機嫌悪いわけ？」

ふっと笑うデュオに、カイトはいつも通りのやわらかい、そして困ったような笑顔を向けた。

「成る程ねえ、それで身体が本調子でない神子様が気になって仕方ないわけだ、カイトは」

「だからデュオが戻るの待ってたんだ。戻ってこないと私の仕事、減りませんか」

「……親友に仕事押し付ける気だな」

「引き受けてくれるだろう？」

ふっと笑うカイトの笑みは、どこか幼く楽しそうだった。デュオはその様子をしばらく見ていたものの、はあ、とため息をつきながら両手を降参だとも言うように挙げる。

二人は本棚に囲まれた一室で、机に座り向かい合って書類を手にしながら近況、任務完了の報告を話していた。

「仕方ないな。まあ、後で紹介してくれるんだろ？ カイトの愛しの神子様を」

「……い、としの？」

「違った？ そう見えただけ」

「……気になっではいる」

「はいはい」

自覚はしているものの、まだ口に出せないカイトを見ながらくすくすと楽しそうにデュオは笑い、スケジュールを調整しておく、と自分の分とカイトの分の来月のスケジュール表を手に、立ち上がる。「ノールとかってお子様に妙に本気だったのはやっぱそうだった理由で」

「デュオ、俺は別に！」

「俺とか言うの、久しぶりに聞いたぞ騎士団長様？ ほら、後はやつといてやるから早く戻れば？ 神子様の都合がいい日は連絡してくれ」

「……、わかった」

何か言いたそうに、ただ顔を少し赤くしたカイトが俯いたのを確認して、デユオは部屋を出る。

「……重症だ」

困ったように頭を抱え込んだカイトは、深いため息を一つ吐いた。

「カイトさん！ お帰りなさい！」

屋敷に戻り、まずルイの顔を見に寄ったカイトは部屋に訪れるなり笑顔でルイに迎えられて、驚いて入り口で立ち止まってしまった。
「カイトさん？」

「あ、いえ。楽しそうですね、どうかされました？」

アイラがくすくすと笑うので苦笑しながらカイトがテーブルに目を移すと、カップが二つ。どうやら夕食は終えお茶を楽しんでいたらしい。恐らくアイラとの会話が弾んでいたのだろう。

ルイはちらりとアイラと視線を合わせた後、ふっと笑って「秘密です」と楽しそうに告げる。

「カイトさんはもうお仕事終わりですか？ 今日はこの後は？」

「まあ、ルイ様ってば。カイト様はお食事がまだなのではありませんか？　すぐこちらにお立ち寄りになったのでしょうか？」

「ええ、まあ」

カイトは曖昧に返事をしながら、ルイのこの態度はこの後も部屋にいてほしいという意味だろうかと考えて、動揺していた。恐らく魔法を教えてほしいとか、外の話を聞かせてほしいとかそういった類ではあるだろうが、素直に嬉しくて、それが顔に出してしまうのがわかって。

「……ええっと、もし良ければ食事を終えた後、こちらにお邪魔しても？　少しお話したい事もありますし」

食事はどちらかと言えばすぐに取りなくてもいいのだが、一度部屋に戻ってルイに渡す本でも選ぼう、と考えていたカイトがそう言いながら顔を覗き込めば、ルイは少し瞬いた後嬉しそうに微笑んだ。

「カイトさんとお話できるの楽しみにしてます！」

そんな事を言うものだから、カイトが大急ぎで食事を終えたのは言うまでもないことだ。

本を数冊携えて再びカイトが部屋に訪れると、言っていた通り嬉しそうに微笑んだルイが出迎える。

アイラが準備したお茶を口にしながらいつも楽しそうに本を受け取るルイが、今日は本をすぐに脇に置き「お話って？」とカイトの目を覗き込む事すら心が温くなるのを感じて、カイトはずいぶんと急速に心に変化があるものだとも内心の焦りを顔に出さないようにするのが精一杯だ。

「実は、今日予定より早かったのですが、副隊長が任務から戻りまして」

「……！ デュオ様がお戻りになられたのですか！？」

反応したのは、ルイではなくアイラ。嬉しそうに手を組むアイラに「はい」とカイトは頷く。

「そうでした。ルイさん、副隊長ですから、彼にも一度……そうです、都合がよければ、ここに案内しても？」

「私は出られませんもんね……ご面倒でなければ、ぜひお願いしたいです。ご挨拶したいです。日にちは、いつでも。私にはカイトさんと魔法の練習する以外予定はありませんから」

ふふ、と楽しそうにルイが微笑む。それを確認したカイトはアイラを呼ぶと、今の事をデュオに伝えてほしい、と言付けた。

「え？ 私が行ってもよろしいんです？」

「ええ、あなたが戻るまでルイさんの傍にはいますから、大丈夫ですよ。彼はおそらくまだ本部です。私の伝言を伝えに来たと門番に言っして下さい」

少し嬉しそうに手を胸の前で合わせたアイラは、いそいそと「そ

れでは」と言って部屋を出る。

それを黙って見つめていたルイは、頬に手を当てて「ふわぁ」と気の抜けた声を出した。

「カイトさん、優しいですね」

「……何のことでしょう？　ですが、嬉しいですね」

微笑みながらカイトはゆっくりと手を伸ばし、額に触れる。いつもの動作なのでルイは特に抵抗することなく、少しの間目を閉じる。

「熱、大丈夫ですよ？」

「ええ、ですが」

言いながら額に伸ばした指を、するりとそのまま頬に触れさせると、ルイが目を開いて首を傾げた。その表情は不思議そうなもので、カイトはふつと笑って手を離す。

「デユオが戻ってきたので、彼に仕事を任せて……一ヶ月程、ルイさんに付きつ切りで魔法の修行をしようと思っています」

「え？　あ、はい。大丈夫なんですか？」

「はい。もともとその予定でしたから。それで、一カ月後の様子を見て、各地の加護を受ける為に少し王都を出ることになるかもしれません」

「……強い魔法を使えるように、ですよ。わかりました、頑張ります」

ルイはぐつと表情を引き締め、手を握り締める。

「急がないと……ですもんね」

「焦る事はありませんよ？」

「でも、この前……い、え。えっと、改めて一ヶ月よろしく願います」

椅子に腰掛けたまま、ぺこりとルイが頭を下げる。……と

「あつ……！」

「る、ルイさんっ!？」

がっちゃんと言を立ててテーブルに紅茶を被せ、滴った紅茶に触

れてしまい涙目になるルイをあわててカイトが抱き起こす。

目が合った二人は、それは楽しそうにお腹を抱えて笑いあった。

第二章・終了

気高き護りの町―1

朝の冷たい風が肌に心地よく、自然と足取りが軽くなりまるで跳ねるように広い道を進む。

空は青く、朝は寒いけれど日中は少し暖かいかもしれない、と考えてルイがつい微笑めば、嬉しそうにアイラはその様子を眺めた。

四週間以上結界の練習を続けたルイは見事結界を習得し、こうしてアイラがカイトが傍にいる時は、騎士団本部までの外出が許された。

やはり部屋の中に閉じこもる生活が辛かったのか、それから頻繁に二人のどちらかと騎士団と屋敷への往復を繰り返している。

「ルイ様、あまり急がれては、転んでしまいますよ？」

「アイラさんだって、部屋を出る前は早くしないとデユオさんに会えないからーって急いでたじゃないですか」

「る、ルイ様！」

くすくすと笑い合う二人が目的地である騎士団本部の大きな門の前にたどり着けば、門の前で硬い鎧を着込んだ兵がほんの少し頬を染め、隊長の客人とわかってか恭しく中へと通してくれる。

「騎士さん、カイトさんはどこにいるか知ってますか？」

「隊長でしたら、デユオ様と朝の稽古をされているそうです。ご案内しましょうか？」

ルイが話しかければ、一人が案内を、と微笑んでくれる。それに素直にお礼を言って、ルイとアイラは「やったあ」と手を握りあった。

「余所見しているとやられるぞ？」

キン、と冷たい音が響いて、剣が持ち主の手を離れ空を舞う。カイトが唇をかみ締め慌てて後ろに大きく跳ぶのと、「ひゃ」と女の声が続くから聞こえたのはほぼ同時だった。

「ご、ごめんなさいカイトさんっ！ 急に来ちゃったから、お邪魔しちゃいました……！」

ガランと剣が落ちたのを見て、ルイが慌ててカイトの傍に駆け寄れば、カイトは少し気まずそうに苦笑してルイの頭を撫でた。

「ルイさんのせいではありませんよ」

「そうそう。稽古中にルイさんが来たからって余所見したこいつが悪いの」

「いけませんわ、カイト様。それでは道中ルイ様の護衛が務まりませんもの！」

騎士にカイトとデュオが稽古をしている部屋に案内してもらったルイとアイラは、剣を合わせる二人の身のこなしに感動して手を組みながらその様子を見つめていた。その時、つい「わあ、カイトさんすごい……！」と言葉を漏らしたルイの声で、カイトが一瞬集中力を欠いてしまった。それが剣が宙を舞う原因だ。

「まったくです。日も近いというのに」

はあ、とため息をつくカイトに、それを見ておろおろするルイを見て、デュオとアイラは顔を見合わせて笑った。

えっと、と視線をさ迷わせたルイは、床に転がった剣を手にとつてカイトに慌てたように渡す。

「カイトさんって、魔法の剣以外も使うんですね」

普段カイトは何もないところから、雷を剣のように取り出して振るう。それを覚えていたルイが、疑問を口にした。

「え？ ああ、普段は物理は短剣だけなんです、練習では長剣も使いますよ。実践は殆ど魔力剣ですけど」

「カイトは攻撃魔法のスペシャリストだからな。でもまあ、結界の外で何があっても大事なルイさんを守るようになって久々に本物の剣で稽古を――」

「デュオ！ いい加減からかうのはやめて下さい」

顔を赤くしたカイトに、デュオは満足気に笑いながら頷くとアイラの手を取った。

「じゃあ今日もルイさんの稽古は頼んだぞ。お前の仕事の手伝いにアイラは借りていく」

「……はあ。アイラの屋敷の仕事に差し障りのない程度でお願いしますよ」

ひらひらと嬉しそうに手を振るアイラとデュオが稽古部屋から出て行くのを、同じようににこにこルイが見送る様子をちらりと少し赤い顔のままカイトが覗き見れば、それに気づいたルイが「大丈夫ですか？」とカイトの頬に手を伸ばす。

「二人の稽古、凄かったです。一人で昨日教わった魔法の練習できますから、少し休んでいてください」

赤く上気した頬は、激しい稽古のせいだろうと判断したルイがそういうえば、カイトは内心の動揺を悟られないように一瞬俯き、すぐに大丈夫ですよ、と微笑み、ルイの手を引いた。

「仲いいですね、デュオさんとカイトさん」

魔法の練習の合間、カイトの横に腰を下ろしたルイが楽しそうにそう言えば、カイトは剣の手入れを終え「ええ」と微笑みながらルイを見る。

「幼馴染ですし……仲はいいですね。隊長に就任してからは私一人じゃ不安だから、と自力で副隊長まで上り詰めた男ですよ」

支えてくれて嬉しいのやら「不安だから」って理由で複雑やら、難しいです、とカイトは笑うが、他人の前ではきつちり「隊長」とカイトを呼ぶデュオが、親しい人間という時だけ「カイト」と呼ぶ関係が羨ましくて、ルイは笑みを返す。

「そっいえば、どうなりました？ 王都を出る時の」

思い出したようにルイがカイトを覗き込めば、カイトはすみません、と頭を下げる。

結界魔法を覚え、その他の魔法も徐々に使えるようになってきたルイは、他の四つの街へ加護を受けに行く事が決まっていた。

最初に訪ねる場所も決まったのだが、問題はルイと共に行く護衛の人数。

あまり大勢で行き過ぎても目立つ上に、王都は闇の民に侵入されただけであまり神子の護衛に割くことはできないという意見と、少数でやつと現れた光の神子に万が一があつてはいけないという意見で、行政機関である貴族の間で対立があるとルイが聞かされたのはつい数日前の事だった。

「まだ……前回王都に進入した闇の民がたまたまあなたを狙ったのか、故意に狙ったのかはわかりませんが……光の民は能力者が少ない。大勢で移動し目立つと王都がもぬけの殻だと言っているようなものですから、他の民に協力を仰ごうかという話も出ているのですが」

「でも、カイトさんが一緒に来てくれるのは決まってるんですよね？ 私、カイトさんがいてくれれば」

「そ、それは嬉しいお言葉なんですけれど、いけません。あなたに何かあつては私は耐えられませんから」

その言葉にルイは肩を落とし、首を傾げた。

ルイは自分がカイトやアイラ、周りの人間が丁重に扱ってくれる事に感謝し、くすぐったい気持ちではあるものの精一杯それに答えたいと思っていた。

その中で気づいたのは、大切にされているものの神子は騎士団所属になるという事。たしかに特別な魔法を使える事から各町神子は厳重な護りの中で生活しているらしいが、騎士なのだ。

騎士のその剣は街を守るもの。民を護る事を最優先すべき、と本で学び、騎士の見本ともいえるカイトとデュオを見て生活するルイは尚更、自分の護衛より街を優先してほしいと願う。

そしてルイの中ではカイトは本当に頼りになる憧れの人物として確立していた。本人は謙遜するもののそれだけの實力、一番騎士というのは伊達ではない。そしてルイの心のほんの少しの甘えで思う、兄のようなカイト。こんな暖かな気持ちになれる存在は初めてで、傍にいてくれれば私頑張れるのに、と考えたルイが口をつい、滑らせる。

「……私はカイトさんがいてくれたら、いいんだけどなあ……」

「おお、熱い告白だねえ」

「ルイ様、感動しましたわ……！」

「あれ、デュオさん、アイラさん」

ぴたりと固まったカイトの後ろから、ひょっこりと二人が顔を覗かせる。その口元は揃ってにやにやと歪まれているが、ルイは元氣よく立ち上がり仲の良いアイラの傍に「お疲れ様です」と駆け寄った。

「ルイ様、私だってルイ様と一緒に他の町に参りますから！ 悔しいですわ、カイト様ばかり」

「わ、嬉しいです！ じゃあアイラさんともお出かけできるんですか？」

「カイトと同様、アイラも一緒に行くのはほぼ決定していた筈ですよ」

そういいながら固まってしまったカイトをつつくデュオは至極楽しそうにしている。

カイトはつつかれるがまま、未だ呆然とルイを見つめていて、時折口を開けては閉じるを繰り返して、しばらくしてから漸く気づいたルイが「カイトさん？」と顔を覗き込めば、「うわ！」と小さな悲鳴と共に仰け反った。

「ぶっ！ わっはははは！ カイト、おもしろすぎるだろそれ！」「か、カイト様……っ！ さ、さすがにそ、それは……っ」

腹を抱えて大笑いのデュオに、ふるふると肩を震わせるアイラ。

真っ赤な顔を手で覆って俯くカイトに、よくわからないが楽しそうなので首を傾げつつもその様子に微笑むルイ。

それはルイにとって、初めての本当に楽しい時間

二週間後、彼女は気高き護りの街テルスへと向かうことが決定した。

気高き護りの町―2

「お買い物行つていいんですか!？」

今日も魔法の練習を終え、若干疲れた様子で部屋に戻ったルイに「明日買い物に行きましようか」とカイトが告げると、椅子から飛び上がったルイは喜んだ。

「ええ、大分結界にも慣れたようですし、五日後には出発しますから。旅の準備になりますか」

「わあ、嬉しいです。お買い物、久しぶり!」

「前回と同じ、私とアイラで護衛します。今度は一人にはさせませんよ?」

ふつとカイトが笑うと、ルイも「今度は一人になりません」と困ったように笑った。

「でも、何を用意したらいいんですか? 私、旅とか出たことないです」

「そうですね……やはり女性は入り用な物も多いでしょうから、後でアイラにも聞いてみましょうか。……遅いですね」

「アイラさん、デュオさんと一緒なんですよ」

アイラはまだデュオに引継ぎ終わったばかりのカイトの仕事を手伝うために、ルイがカイトに魔法を教わっている間はデュオと仕事をしている。

ルイは、今日は随分遅いですねと心配するカイトに、いいじゃないですかと微笑んだ。

「きつと少しでも長くいたいんですよ」

「……やっぱり気づいてました? 二人の事」

「え? えと」

小さく恋人ですよね……? とルイが尋ねれば、カイトは苦笑し

て頷いた。

その様子に怒っているのだろうか、と感じたルイがカイトを見上げたが、ふとその奥にある時計に目が行って、ああ、食事の時間だからだと納得する。

「あの、私まだ全然お腹空いてないし、大丈夫です……！」

アイラがルイの身の回りの世話をする、という事は、食事の用意をしているのもいつもアイラだから。もちろんアイラが作っているのではなく、作られた食事を運ぶというものののだが。

「それにそれくらい自分でできますよ……？」

元の世界ではもちろん自分で料理をして食事していたのだから、むしろ今の状態が不思議なのだとルイが言えば、カイトが少し嬉しそうに「それは」と微笑んだ。

「楽しみですね。旅の途中は料理人もいませんから、もしかしたらルイさんに料理をお願いするかもしれませんよ？」

「ええっ、おいしく作れるかなあ……カイトさんが食べれると思うと緊張します」

俯くルイに、カイトの頬がかつと赤くなる。ああこの子は。どうしたものか、とカイトが無意識にルイに手を伸ばしかけたところで、扉が開いた。

「る、ルイ様申し訳ありませんわ！！遅くなって……あら」

顔が赤いカイトを見るなりにやにやと笑うアイラに、カイトはすぐ顔を逸らして食事の準備を！とこの屋敷の者らしく声を張り上げる。

「はい、ただ今」

くすくすと料理を広げだすアイラを横目にカイトがルイを見れば、既にルイはアイラが戻ってきた事で嬉しそうにそちらに視線を移し会話を楽しんでいる。

悔しそうに唇をほんの少し尖らせたカイトを、にっとアイラが見返す仕草はルイは気づかないのだけど。

「まあ、お買い物ですね。わかりましたわ」

話を聞いて嬉しそうに笑うアイラが「今日はリストをまとめなければ」と意気込む。

「あまり荷物を多くしてはいけませんよ……」

意気込みを見て若干呆れ気味にカイトが頭を抱えるのは、前回の買い物の量を見ているからだろうが。

「それにしても、旅には馬を使うのでしょうか？」

「その予定ですが」

「えっ」

驚きの声を上げたのは、ルイ。その表情は少し曇っていて、カイトが続けて「え」と声を返す。

「ルイ様この前、町の中で見た馬車が珍しいって。馬を見ることも余りなかったようですけれど」

「そ、うなんですか？」

カイトの質問に、申し訳なさそうにルイは返事を返した。

「私、多分馬なんて乗れません……」

しばしの沈黙。破ったのは、カイト。

「問題ないでしょう。私が支えますよ？」

「……え？」

「か、カイト様っ」

驚くアイラの横で、一旦首を傾げたルイがすぐに「カイトさんと一緒に乗れるんですか？」と極普通の声で聞く。

「ええ、もちろん落したりはしませんよ」

「わ、嬉しいです。私、乗馬なんて初めてです」

横で「あれ？」と首を傾げるアイラがいたのだが、微笑み見つめあうそこは既に二人の世界になっていて。

これで何故付き合ってるのではないのだとアイラはこっそりとた

め息をついた。

気高き護りの町―3

「着替えは買いましたし、武器も買いましたし、食材は屋敷の者が用意しますし……」

アイラが次々と読み上げるリストは、買い終わったものばかり。時刻はまだ日が沈むには早い時間。

前回のようには実際はいなかったカイトの彼女に気を使う事もなく二人と買い物を楽しんだルイは、体調もいいのか楽しそうにリストを眺めている。

「旅に必要な物は買い終わりましたわ。……カイト様、ルイ様に自由時間を差し上げたら如何です？」

そして少しカイトに近寄り、ルイには聞こえない小さな声で「デートでも」とそれは楽しげに囁けば、かあっとカイトの耳が赤くなる。

「アイラ……っ！ いいです。そうさせて頂きますっ！」

「カイトさん？」

「ルイさん、行きましょう」

ぐい、とルイの手を引き、アイラはどうぞ先に戻ってください、とカイトがそつぽを向いた。

（これは面白いですわ）

くすくすと笑うアイラに見送られて二人は街の喧騒に飲まれていく。

「カイトさん！ ちょっと待ってください……っ！」

ぐいぐいと手を引くカイトに驚いて、されるがまま歩いていたルイだが楽しそうに手を振るアイラが見えなくなったところで我に返る。

ルイの声が聞こえたカイトはびっくりと肩を震わせ立ち止まり、それは申し訳ないといった表情で顔色を変えた。

「す、すみません！ 無理やり……っ！」

「いえ、あの、大丈夫なんですけど、……自由時間、なんですよね？」

「……私と一緒に、という条件付ですから、完全な自由とは言えませんが……」

「そんな。一人で出歩いてても、何があるのかわからないからむしろ嬉しいです」

ふわり、と微笑む彼女に、カイトはぐっと言葉を飲み込んだ。と、漸く落ち着いたルイがきよきよと辺りを見回して、カイトの背後でぴたりとその視線を止めた。

「あの、あれ……」

彼女が指差す先には、若い女性やカップルが並ぶ、小さな店。

「ああ、クレープ、ですね」

「……くれーぷ」

ぼそりと呟いたルイは、明らかに目を輝かせその店を見つめる。わかりやすい反応に、カイトはどこかほっとしつつ今度こそゆっくりと、紳士的にルイの手を少し引いた。

「行きましようか」

「え？」

「クレープ。少し並んでいますけど、きっとおいしいと思いますよ？」

その言葉で、わあ、と声を上げてルイは大きく頷いて、いざクレープ屋さんに、と意気込む。

可愛いな、とカイトの意識がクレープよりもルイにいつてしまうのは当然の事で、周囲を気にせず自分がクレープよりも甘い雰囲気を出してしまうことは気づかない。

「いっぱいありますね、えつとえつと、いちご……バナナ……わあ、カスタード、おいしそう」

嬉々として並んでいる間何を食べようか選んでいたルイは、しばらく悩んでいたものの順番が自分達の番になっても決まらず慌てたように「えつとえつと」と繰り返して。

「焼きりんごカスタード……いちごチョコ……」

「その二つで悩んでいるんですか？」

「う……ごめんなさい、クレープ好きで、久しぶりで」

「なら、二つ頼んでしまえばいいんですよ。すみません、お願いします」

言つなり両方頼んでしまったカイトに、ルイが「え？」と顔を上げる。

「えと、カイトさんは？ それに私二つも、食べれないかも」

「でしたら、半分ずつにしましょうか」

実は私も、甘い物は久しぶりすぎて迷っていたんですよ、とカイトが微笑んで、すぐにルイは顔を真っ赤にした。

（……！ な、なんかいまさらだけど、デートみたい……っ）

そう気づいてしまつてからはもうものすごい速さで現状を理解する。

ふと見れば、後ろに並んでいる女の子グループはそれはきやあきやあと自分達、そして主にカイトに視線を注いでいるし、その後ろのカップルは女の子が頬を染めていて、男の方はばっちり目が合つてしまう。

そして、クレープ屋周囲には、明らかにクレープ目当てではない人がちらほらと集まり出していて、それが皆こちらを見ているように見えたのは気のせいではないのではないだろうか。

（……っ、カイトさん、かっこいいから目立ってるんだ！）

慌ててカイトを見上げれば、クレープに目を向けていたカイトが視線に気づいたのかルイに顔を向け、どうしました、とにこりと微

笑んだ。

きゃー、なんて後ろから声が聞こえた気がする。しかし、カイトはその声を気にした様子もなくルイに笑顔を向けたままにこのこともう少しでできそうですよ、とか話しているし、気づいてないのだろうか。

慌ててクレープ屋に目を向けると、頬を染めた店員がクレープを包み終わったところで。気づいたカイトが料金を払い、それを二つ受け取って呆然としているルイを促した。

「行きましようか、ルイさん」

「ふえ！ は、はい、えっと」

「どちらから食べますか？」

微笑むカイトはクレープ持っても絵になるのか、なんて混乱する頭で考えて、なんとなしに目に入ったショーウィンドウに映る自分が湯気が出るほど顔が赤いことに気づいて、慌ててカイトの袖口を引っ張る。

「と、とりあえずここ、離れましょう!？」

急に慌てて歩き出すルイに首を傾げながら引かれるがまま歩くカイトは、ああ、と漸く現状を理解した。

人が多い。それも、こちらを見ていた数人と目が合って。

（目立ってしまいましたか。……ああ、それで）

顔が赤いルイは、おそらくこの状況に驚いたのだろうと納得して、カイトは少し考えた後こちらへ、とルイを反対方向へ案内した。

少し歩けばそこは、木々に囲まれた穏やかな空間へと繋がる。

「……公園」

「はい、ここならゆっくりできるでしょう?」

ベンチの傍まで歩き、どうぞ、とカイトがクレープのひとつをルイに手渡した。

「焼きりんご。おいしいです!」

「それは、よかった。すみません、注目を、浴びてしまったみたいで」

「……あれ？ 気づいてたんですか？」

「ルイさんが慌てた辺りで。騎士団の隊長は、やはり顔が知られていますから」

カイトが苦笑して、すみません、ともう一度言ったところで、ルイは呆然とその高い位置にある顔を見上げた。

「……隊長？ んー、えと、それもあるかもしれませんが」

「え？」

「カイトさんがかつこいいからきつと目立つちゃったんですよ。うん、私かなりいい思いましたのかも？」

もふ、とクレープを口に入れながらそんな事を話したルイは、目を見開いて「え」を繰り返すカイトににっこりと笑みを向けた。

「クレープ、おいしいですね！ 食べ終わったら、もう少し買い物したいです。デートみたい！」

半分こ、といってお互いのクレープを交換する頃には、カイトは真っ赤な顔を必死に隠すように口元を手で覆っていたためクレープが進んでおらず

「あれ、カイトさん、はい」

あーん、と、まさかのルイの行動に、クレープの生クリームが溶ける勢いで顔に熱が上った。

気高き護りの町―4

「いよいよ出発ですわね」

「うー、緊張してきました」

食料を詰め込んだ荷物を抱え、アイラはルイの部屋で意気込んだ。ルイは緊張で少し唇を噛んでいて、アイラは困ったように手を添えた。

旅の支度も終え、今日の昼前には王都を発つ事になっている。

ルイに各町の神の加護を与える為の巡礼の旅。最初の予定は、守りの街テルス……地のダイヤモンドの加護を厚く受けた街。

「いけませんわ。唇が切れてしまいます。ルイ様、道中はカイト様がお守りくださいますから」

「でも、闇の民が現れるかもしれないし。それに、少数で行くんですよ？　もしかしたら戦闘、なるかもしれないし」

「少数でも、精鋭部隊ですわ。まさか、デユオ様まで一緒に一緒できるとは思いませんでしたか」

「……今更なんですけど、ここ、大丈夫なんですか？　騎士団の上位二人が抜けちゃって」

「あら、騎士団はもともと軍の上位から選ばれる団体ですから、大丈夫ですわ。今はまだ闇の民は簡単に我らが王の結界を越える事ができませんから」

ルイはアイラの言葉に、少しほっとしたように笑みを見せた。

自分の護衛でカイトだけではなくデユオまで付き添わせるのは、と気にしていたのだが、街に張り巡らされている”王の結界”はまだ闇の者に対する事ができる。

あくまで、まだ、だ。だからこそ確実なる守りを得る為に神子で

あるルイが各町の守護を得にいく……その為の護衛は、やはり確かなる者を、との上層部の会議の結果、騎士の中でも最も力の強い上位騎士二人と、他数人の騎士で隊が編成されたいらしい。

本来ならば神子は堅い守りの中で生活するもの。むしろ、いくら上位騎士が含まれていようと少なくともないくらいだとアイラからしてはため息ものだ。

「テルスまでは、馬でも四、五日はかかると思われます。疲れは体に響きますから、熱っぽいなと感ずることがありましたらすぐおつしやつてくださいね？」

「はい、大丈夫」

アイラとカイトの心配の一つである、ルイの体調。彼女は普段から熱が高く、そしてそれは通常の事でありながら彼女にとって辛いものであり、心配の種である。

馬に乗れない彼女はカイトに支えられての移動になる。常にルイに触れる事になるカイトが異常には気づくであろうが、何せ彼はルイを想うあまり近すぎるとその異常に気づけないのでは、とは彼の親友であるデュオの言葉。本人は否定するであろうが。

「心配ですわ……」

「大丈夫ですって、アイラさん。私、ばっちりですから」

にこりと笑うルイは、恐らくアイラの心配の意味はわかってはいない。

はあ、とアイラがため息を漏らしたところで、部屋の扉が叩かれた。

「失礼しますね。準備はできましたか？」

現れたのはカイトとデュオ。二人はルイとアイラの荷物を手にすると、それでは行きましようと言いついて、カイトはルイの手を引いた。

実は、ルイの緊張はもう一つあった。まだ神子の事は話さない、という事らしいが、どうしても噂は立つかもしれないと言われたのだ。

それはもちろん、騎士の上位二人を含む騎士団が、女一人守りながらの旅。もちろん、新しい能力者の育成において護衛は度々あるが、護衛の質が違いすぎる。

今回、または次回の街でのルイの能力の成長の様子を見て発表する、とは言われているが、やはりどう思われるのかわからない今、ルイの心を占めるのは道中の危険性より未だ強い力を見せない自分が過度の期待を与えることにならないだろうかという不安だった。

「ルイさんは私の馬へ」

そう言われながら屋敷を出て、待機していたのは十数人の兵、騎士の姿。

カイトの姿を見て即座に姿勢を正し、揃われた挨拶の音が周囲に響く。

「おはようございます！」

「おはよう」

返すカイトはすぐさま一列に並んだ騎士たちの前で、何かを話し始めた。

すぐ横で話し始めた会話だが、ルイの頭には入ってこない。騎士達の視線が全て自分に注がれ、軽くパニックを起こす。

「ルイ様」

ルイの様子に気づいたのかアイラがそつとルイの手を引き、まっすぐに横に並ぶ騎士全員の目を見た後ルイを馬まで案内する。

後ろでデュオとカイトの叱責の音が聞こえて、ルイは困ったような表情で振り返った。

「アイラさん。私、なんで」

「ご注目されておりましたのは、ルイ様の護衛につく騎士の面子からルイ様がよほど強い能力者だろうと推測していた為だと思えますわ。ルイ様の特徴は一切触れていませんでしたから、若い女性が現れて驚いたのでしょうか」

「どうしよう。私、まだ全然魔法使えないのに」

「大丈夫ですわ。ここに集まった騎士には、街を出た後ルイ様が神子である事を打ち明けることになっておりますから」

むしろ護衛は少ないくらいです。とアイラは微笑んで、荷物を解散した騎士に預け、慌てて走ってきたカイトに「それでは」と告げて離れた。

実際は、ルイの見目に目を奪われていた者がほとんどだったような気もするが、カイトの不機嫌な顔を見てアイラは苦笑する。

ルイはデュオに連れられて自分の馬へと移動するアイラの背を見ながら、ふと視線を感じて顔を上げると、カイトがどこか困ったように微笑んでルイを見ている。

「カイトさん？」

「……、行きましようか。少し目立ちますね。フードを被りますか？」

いいながらカイトはそつと、優しい手つきで……ただ、ルイの返答を待たずにマントを羽織らせ、フードを被せる。

「カイトさん、今から被ったら前、」

「支えますから」

何が、そうルイが口を開く前に、足元に段差が見えて、それに足をかけた後すぐにルイはふわりと身体を持ち上げられる。

「……っ！？ カイトさんっ！」

「ほら、大丈夫でしょう？」

あつさりとした言葉に、自分がすでに馬上にいることに気がついたルイは、ひっ、と息をのみ横のカイトの服を思わず手繰り寄せ、抱きついた。

ああ、と理解した声と、残念そうな声が周辺に上がりカイトの耳に届いたが、ルイはあわあわと目を瞑り恐らく気づいてはいないだろう。

ふっとその様子を見て微笑み、そのままルイの背に腕を回してカイトが声をかければ、ルイはびくびくとしたままおそるおそる視線を上に向けた。

「落ちませんから。ただその体勢だと危ないですから、ちゃんと右足を馬に回して下さいね」

「わ、私が前、なんですか。怖いです」

「しがみついてないと、ですか？」

くすくすと聞こえる声に、漸くカイトに正面から抱きついたままだと気づいたルイは慌ててその胸を押したのだが、離れる事は叶わない。

「押しては、落ちますよ」

「うあ、えと」

「ほら、前を見て。ちゃんと後ろから支えます。あなたが後ろにいては、守れませんから」

「……っ、さ、支えて下さいね!？」

ゆっくりと片足を移動し、馬に跨ると深く息を吐く。少しルイの手が震えているのは気のせいではないだろう。

「私に身体を預けてください。絶対に、落としませんから」

「ほらカイト、出るぞ」

デュオの声に、カイトが頷く。向かうは、王都の西、地の加護を受ける、守護に長けた街テルス。

気高き護りの町―5

どうしてこんな事になったんだろう、と、ルイは目を閉じ、唇を噛んでぼんやりする頭で考えた。

カイトに身体を預け、腕に包まれるように出発した王都。最初はよかった。初めての馬の乗り心地に興奮し、好奇心からきよきよと辺りを見渡してそれも飽きず、王都を出るまでは度々注目される事もあったものの、フードで顔を隠していたルイは普段であれば緊張がちがちになるであろうに今回は馬の感触を楽しんでいたはずだった。

ただ、しばらくして慣れない乗馬。やはり身体が痛みで悲鳴を上げ始めた頃、ふらりと揺れてしまいカイトに一度強く抱きしめられた。手綱を握るカイトは片腕で器用にやってのけるのだから驚くが、その時、それは偶々、カイトの腕が胸に触れた。

慌てて謝罪するカイトに、大丈夫といいつつも謝罪された事でやはり間違いじゃなかったと認識したルイは、そこで初めて、漸く今の状況を把握した。

カイトと、近すぎる、と。

普段から魔法の練習で触れ合う事も多いが、なぜかそこで急に羞恥を覚えた。

兄のように慕うカイト。ただ、やはりそれは異性で、自分を守るように伸ばされている腕は自分のような細い腕ではないし、いつも頭を撫でってくれる手は、指は、自分より大きくて骨ばっていて、暖かい。

何より、背を預けてしまえる胸は広く、見上げなければ目を見て離せない程の身長差。

(……何で急に恥ずかしくなるの?)

兄弟もおらず、父とも触れ合う事がなかったルイはここまで男の傍にいて、という事がなかった。学校では、びくびくと距離をとって過ごしていたのだ。

気づいてしまえば、もうこの状況に慣れる事はできなかった。身体痛み、緊張で煩い心臓、普段より高い位置で見る景色。

全てが合わさって、結果から言えばルイは体調を崩した。酔ったともいえるかもしれない。目が回り、激しい吐き気と戦う事になる。もともと飲んでいて、元の世界の薬はこの世界に来て二週間で飲みきってしまった。

時折様子を見るように話しかけていたカイトが、弱々しい返事に異常に気づき王都から数時間、テルスまではまだまだという所で一行は足を休める事となった。

「ルイ様、大丈夫ですか？ 何か飲めそうです？」

「アイラさん……ごめんなさい……」

大丈夫ですよ、もともとそろそろ休憩を入れるはずだったのでから、と言いつつ簡素なカップに水を注いだアイラは、伺うように顔を覗き込みながらそれをルイに持たせた。

旅の為に用意されたであろうそれは、いつもアイラから渡されるすぐに割れてしまいそうな繊細な作りではなくて、なぜかそれを安心したように撫でて一口水を流し込んだルイは、ほっと息をついた。「もう少し休めますから、大丈夫ですよ。私も疲れてしまいましたわ。馬って、すぐくお尻が痛くなるとはいませんか？」

「私は、全身が痛いです……うう、大丈夫かな」

冷えた水と緊張から開放された事でいくらか気を持ち直し、木に預けていた身体を少し起こしたルイは、ちらりと視界に入ったデユ

才と地図を広げて話し込んでいるカイトから不自然な程に顔を離れた。それを見たアイラは「あら」と小さく声を出す。

「ルイ様？ 何かありましたの？」

「え？ いや、えっと」

「カイト様が何か？」

声を落としてくれたアイラの目は、確信を持って聞いているようだった。

どうしようか、カイトさんは悪くないのだけれど、としばらく俯いて口を引き結んでいたルイは、ちらりと見上げたアイラの表情がなぜか「わかつている」といった様子なのが気になって小さく口を開いた。

「アイラさん、カイトさんとお馬さんに乗るの、ものすごく緊張します……」

「……ルイ様つてば、最初は随分と楽しそうでしたのに」

「だ、だって」

「急に意識しちゃいましたの？ まあ、私が言うのもなんですけど、カイト様は本当に男性として魅力的なからだ……」

「あああつ、あいらさん……っ！！」

アイラの言葉を遮ったルイの声は予想外に大きかったのか、少し離れた所で「大丈夫そうですね、ルイさん」と慣れた声が聞こえ、ルイはさらにぱくぱくと口を動かした。

「大分よくなったようですわ、カイト様。でももう少し休ませてくださいませ」

うう、や、えっと、を繰り返すルイの変わりに、アイラが変わりに返事を返せば、向こうからももちろんです、と笑顔が返された。

「ルイ様つてば」

そういつつまるで周囲からルイを隠すようにアイラが移動する。疑問に思っただけルイが顔をアイラに合わせれば、アイラはにやりと笑って自分の頬を突いた。

「ルイ様、お顔が、真っ赤です」

「……っ！ ど、どうしようアイラさん！ 私、どうしちゃったのっ」

縫るようにアイラの服を掴んだルイは、まったくと言っていい程状況を自覚してはいなかった。

「普段通りにしていれば大丈夫ですよ」

ルイの話を聞き終えたアイラは、落ち着いた様子でそういつて微笑んだ。

「普段通り……？ 普段、普段が……わ、わからないです」

対するルイは、話し終えても尚混乱を露にしている、その視線はきよろきよろと彷徨う。

「お兄様のように慕っていたのでしょうか？ カイト様を」

「……えっと、そうなんだけど、でもカイトさんの手って大きくて」

「ふふ、それはまあ、男性ですもの。お兄さん、は、女性では困りますわ」

「うっ、そうなんだけど」

聞きながらアイラは、どうしようかと密かに頭を悩ませた。

ルイが自覚し始めているのは、いい事だ。ルイは欲がなさ過ぎるという事は、普段からアイラの心配の種だ。

最近になって漸く感情を見せてくれていはいるものの、魔法や文字と言った勉強に関する事意外はともかくルイは諦めが早く、そして自分の事はおざなりだった。

先ほど体調が悪いとカイトが気づいた時も、いつもの事だからと頑なに「大丈夫」と青い顔で言い続けたルイを見て、カイトが寂しそうにしていたのをアイラは同じように見つめていた。

カイトへの感情を理解すれば、それは欲する気持ちも理解してくれるかもしれないと密かに期待する。

ただ、今この状況でカイトに対し過度の緊張を持つことは、決し

ていいことではなかった。

緊張が続けば恐らくルイの身体は疲労で高熱を引き起こすだろう。馬に一人で乗れないルイは、いや、乗れたとしても一人で馬に乗せて何かあつてはいけないのだから、カイトとテルスまで密着する事は避けられない。

小さく「困りましたわね」とルイに聞こえないように呟いたアイラは、ちらりと視線を向けた先で心配そうに先ほどからこちらの様子を伺っているカイトと目が合つて、仕方ないと苦笑した。

あちらもあちらで、大変らしいな、と。

「ルイ様。カイト様では緊張されてしまいますか？」

「……え？」

「でしたら、他の騎士に頼みましょうか。ルイ様をお一人にするわけにはまいりませんもの」

「……ええ？ えっと、アイラさん」

「どうされます？ ああ、私は駄目ですよ？ 二人で乗れる程、乗馬は上手くありませんの。デュオ様！ ちょっとよろしいですか？」

決して強い口調ではない。微笑みながら、しかし確実にルイの意見を待たずその方向に話を進めようとするアイラに、ルイは焦ってその腕を掴んだ。

しかし名前を呼ばれたデュオは地図から顔を上げ、もう一度アイラに名を呼ばれ、ルイの様子が気になつて仕方ないであろうカイトにちよつと待つてくれと伝えて立ち上がり、ルイとアイラの傍まで来てしまう。

「アイラ？」

「デュオ様、ルイ様が」

「あ、アイラさん、わ、私！」

困つたようにデュオとアイラを見上げて、泣きそうに顔を歪めるルイを見てデュオがカイトは呼ぶべきだったのかとアイラを見たとき、アイラはゆっくりと首を振る。

そうして、こっそりとデュオに何かを囁くと、デュオは一瞬驚いた表情をした後すぐにルイに向き直り、ゆつくりと屈んだ。

「ルイ様。少しよろしいでしょうか」

「……え？」

ルイの返事を待たず、デュオはゆつくりとその距離を一步、詰めた。

「……え？ えっと、デュオさん？」

「ルイ様、先ほどのように緊張はしませんの？ でしたら、やはり他の方にされます？」

アイラの言っている意味を理解して、ルイはさらに眉を顰めて俯いた。

「わ、私」

「ええ、どうされます？」

「……カイトさんという」

「もちろん、カイト様がそうでなければ認めませんわ」

「……っ！ あ、アイラさ……」

初めからなかった選択肢に、ルイは呆然とアイラを見つめた。アイラは、それは嬉しそうに微笑む。

「ルイ様がカイト様に緊張されるのは、悪い事ではありませんもの。私だって、デュオ様と一緒にいる時は緊張しますのよ？ その緊張を楽しんでくださいませ」

そう言つて満足そうに微笑んだアイラは、デュオの手を借りてゆつくりと立ち上がる。

「緊張を、楽しむ？」

「嫌ではないでしょうか？ なら、せつかくその人からしか与えられない感情なんですから楽しんでやればいいんです」

「……嫌じゃ……がんばって、みます」

「難しそうでしたら、普段のようにいろいろお話をしてみたらいいかもしれませんよ。荒療治で申し訳ありませんでしたわ。また、夜にお話ししましょうね？」

そう言っ て嬉しそ うに微笑 んだアイラを見て、ルイも僅かに笑みを返した。そこで、待つてましたと言わんばかりにデュオが口を開く。

「落ち着いたなら、向こうのあれを呼んでもいいのか？ 腸煮えくり返つてゐるだろうから、早くしないと俺がまずい」

「あれ？」

「ああ、ルイ様お気になさらず」

にこりと意味深に笑みを残して、アイラはカイトを呼ぶとデュオとともにその場を離れた。慌てて走ってくるカイトは、離れた位置から既にルイの名前を呼び一目散だ。

「似てるな」

「え？ 似てるって、二人がですか？」

「カイトのお姫様があそこまでにぶいとは思わなかったけど。カイトも面白いぞ？ 明らかに理解してる癖に、俺が聞けばひたすら気になってるだけだ、の一点張りだからな」

「え、まさか。カイト様とつくに自覚していらつしやるでしょうに」「俺から言わせたらあつちのお姫様だつてとつくに自覚してくれていい頃だと思つてただけだ。まあ、カイトは自覚してるけど今口にする気はないんだろ？ お互いの気持ちはお互い以外にばれればれなのに気づいてない二人が似てるなつて」

「まあ…… ちよつとカイト様が不憫なんですけど」

ちよつとそのカイト様の反応について詳しく聞きたい、と笑うアイラに、デュオはにやりと「で？ 俺と一緒にいるときどきしてくれるんだっけ？」とアイラに詰め寄つて、見事に突き飛ばされた。

気高き護りの町―6

「いい匂い」

ふわふわと辺りに湯気が上がり、それと共に広がるのは夕食のスープの香り。

昼の休憩後、無事に旅を続けられたルイ達はその日の野営場所となる予定の地に着いたのは、月が顔を出した頃。

現在食事の準備をしているのは、アイラとルイ。それを見守っているのは護衛として残されたデュオ。

アイラはもちろん「お休みください」と慌てたのだが、ルイが手伝うと言って譲らなかったのだ。

本来であればアイラと他の騎士が担当する筈だったのだが……初日の今日だけは騎士達はカイトの元に集い、会議が開かれていた。

内容は、上位騎士メンバーの護衛する少女の正体。そう、ルイが神子であるという事実。

本来は生まれた時から神子として育てられ、周囲は周知であるのが普通である為、異例すぎるルイを神子と予測する者はいないだろう。それが起こり得たという、事実の説明。

今夜の説明で、共に旅する自分を守ってくれている騎士達の様子が変わるのでは、とルイは気にして、それを口にする事はないものの内心恐怖と戦いながらの食事の準備。何かしていなければ落ち着けなかった。

神子としての自信の無さがそうさせていると、ルイ自信気づいているから落ち込みも早い。

「ルイ様？ やはりお疲れになられました？」

やはり休ませるべきか、と顔を覗き込むアイラに、ルイは慌てて大丈夫だと手を振る。

「おいしそうだから、お腹空いちやって」

「食欲があるのは良い事ですわ。ですけど、無理はしないで下さいね？ 私とカイト様が泣きますよ」

「……カイトさん泣くかなあ」

ちよつと見てみたいぞ、とルイが笑えば、アイラももちろん笑顔になる。最近訪れた、ちよつとした幸せだった。

「あいつを泣かせるなら簡単ですよ、ルイ様、嫌いって言うてみて下さい」

「ええ、それはちよつと酷ですわ」

デュオの発言に、アイラが少し苦笑いしながらそう続ければ、ルイは少し困った顔をする。

「それは言えないです、カイトさん好きですもん」

「お、大胆」

デュオが面白そうに笑う。そこで、バサ、と何かが落ちる音。

三人が驚いて音のしたほうを見れば。

「あ、カイトさんお帰りなさい」

「おーカイト、早かったな。無事に会議は終わったか？」

「カイト様、わかりやすすぎます。その落とした書類、ちゃんと拾って下さいませ」

にやりと笑って鍋をかき混ぜながら、手伝いをする気がないのかアイラは呆れの言葉を口にする。その口調にはからかいが含まれていて、決してアイラが冷たい態度というわけではないのがわかった。書類は対して散らばったわけではない為、さつと拾い集めカイトが立ち上がれば、ぱたぱたと走り寄ったのはルイ。

「ご飯もう少しなんです」

「ええ、楽しみにしています」

ふわりと微笑んでルイの頭を撫でるカイトの表情は幸せそのもので、アイラとデュオは顔を見合わせて笑った。

「それで？ 会議はどうだった？」

「もちろん滞りなく。優秀な騎士達だしね」

そうか、ならよかった、とデュオがちらりと目を向けた先には、数人の野営地にテントを張る騎士の姿。

野営地選ばれたのは、騎士が巡礼や、光の民が地方の加護を受けに行く事が多かったため作られた広めの空間。周囲に結界石が用意されていて、この地だけは闇の民も不可侵な公園程の地。

小さなものだが、小屋が一つ、その裏に小さな湖があるそこは、休息をとるには十分すぎる場所。このような場所がいくつかあるというは、頻繁に王都と周囲の町の行き来があるという証拠なのだろう。

小屋で休むのはルイとアイラ。それに、小屋の出口と中に一人ずつ交代で、デュオとカイトが休む事になっていた。他の騎士は簡易のテントになるので、彼らは自分達が休むテントを準備しているのだ。

「丸い……」

「珍しいですか？」

カイトとデュオが話す横で、視線の先にそのテントを捕らえたルイが不思議そうに首を傾げるのでアイラは声をかけた。

テントは、ルイが想像した三角のものではなく、丸い円形で。

「なんだっけ、ゲル？　みたい」

「ルイ様の世界ではそう呼びますの？　あれが通常のテントですわ」
「楽しそう。組むの手伝ってみたいな」

「あら、大変ですよ」

こうしてルイがいろいろな事に興味を示すのは喜ばしいことだと、会話を終えたカイトも嬉しそうに微笑んだ。もちろん、組み立てを手伝わせたりはカイトはしないだろうが。

食事を終えたルイは、アイラと小屋の後ろの湖で簡単に水浴びをした。お風呂に入れないだろうと覚悟していたルイは喜んでそれを

受け入れたのだが、問題は湖の周囲には小屋くらいしか隠してくれるものがない事。

一部は森の木々が隠してくれているのだけれど、それではいけないとのアイラの言葉で見張りについたのはやはりというかカイトとデュオ。もちろん二人はアイラにきつく後ろを振り向くなと言われた後で。

ルイはカイトを信頼しきっているのか、特に何も言わずにアイラに続いて水浴びをしていたのだけれど、その信頼のせいなのか。

「この小屋はベッド二つなんですな。でも、足りないなあ」

小屋で休むのは、二人と見張りが交代で一人、計三人。ベッドは二つ。それに気づいたルイの一言に、カイトは顔を赤くした。

「カイトさん、私と寝ます？」

「……は！？」

素っ頓狂な声を上げたのはアイラとデュオ。

カイトは目を見開いた後、何かを思い出したように真っ赤な顔で俯いた。

「デュオさんはアイラさんと？ あ、ほら、最初の日、暖かかったです。あの時はびっくりしたけど別に今なら……」

「る、ルイさん！ あの時は、その！ と言つか私が今はちょっと……っ！」

「カイト様！？ ということですよ！？」

「カイト、おま、手を出してたのか！？」

「ち、違う！ 誤解で！ 俺は別にっ！」

うつたえるカイトに、詰め寄る二人。ルイは一人だけぽかんと呟く。

「あれ、カイトさんって自分の事俺って言うんだ」と。

気高き護りの町―7

結局カイトはルイの申し出に丁重にお断りを入れ、二人が共に寝ることはその日なかったのだが、アイラとデュオに相当からかわれたのか翌日のカイトは明らかに寝不足でどこか疲れていて。

「あの、ごめんなさい、カイトさん。私、」

「いえ、いいんです」

ルイの前でへらりと笑うものの、疲れの色が濃いカイトにルイは申し訳なさからくつと唇を噛んだ。

あの子の三人の様子を見てから、自分が言った事が失言だったと漸く気づいたのだ。

「……あの」

「はい？」

「カイトさん、で、本当は俺って言うんですね」

「え……あー、言って、ました？」

こく、と頷くルイを見て、カイトは困ったように苦笑した。

しばらく視線を泳がせた後、はあ、と一つ息を吐くと、お恥ずかしいですね、と小さく口にした。

「えっと……？」

「私はお気づきかとは思いますが、クォーツ隊の隊長……いえ、フオレストン騎士団の騎士団長です。私の家系は代々そうなのですが……兄が姫の護衛に選ばれた後、私は隊長に就任してすぐでしたから、……まだ頼りない自分に少しでもけじめを、と」

「カイトさんはすごいのに」

「まだまだですよ」

ふ、と笑うカイトを見て、どこか不満そうにルイは首を傾げたのだが、すぐに満足そうに頷いた。でも、さすがです、と呟いて。

実際きつという問題があったのだろう、カイトの顔は一度苦々しいものになったのだが、それはすぐに隠されてしまった。ル

イは、見逃さなかったのだが。

「ルイさん？」

「ふふ、カイトさん、今日もよろしくお願いしますね！」

予定通り旅の初日を終えているため、あと三日でたどり着けるのではないかと朝食の席で聞かされた一同はいそいそと出発の準備を始めている。

朝、騎士全員が一人ずつルイのところに挨拶に来た際に、一人だけルイに握手を求めてきた人物がいる。

選りすぐりの護衛に選ばれた隊の中で一番若い騎士。まだ十八だという少年は、年齢も近いルイに強く興味を抱いていた。

「ルイ様、僕はその、まだ至らぬ所も多いですが、精一杯お守りしますから！」

「お、シャル、出発の準備もせずルイ様を口説いてんのか？ カイトが怖いぞー」

「デユ、才様！僕はそんなつもりじゃ！カイト様の恋人を口説いたりしません！」

「恋人？」

「え！ 違うんですか！？」

途端目を輝かせて振り返ったシャルと呼ばれた少年に、ルイがきょとんとした後顔いたのを見て、遠くから騒ぎに気づき近寄っていたカイトが肩を落としたのに気づいたのは忍び笑いをしているデユオだけだ。

カイトの心境はさておき、順調に進んでいた。

何の変わりもなく予定通りに進んでいた旅に、緊張が走ったのは旅を始めた四日目。後半日もすればテルスにつくだろうと誰もが安心し始めた、その時。

「ちっ、目隠しになるように結界を展開しながら進んでいたのに！」

「デュオ、落ち着け。見つかるのは想定内だ」

「ルイ様、大丈夫ですから、カイト様から離れないでいてくださいませ」

ひゅ、と騎士達の間には緊張が走るより早く、進んでいた森の異変に気がついたのはルイだった。

黒い霧のようなものに包まれている、と呟いたルイの言葉で、はつと状況を理解したカイトがすぐに指示を出したおかげで、すぐに姿隠しの結界から守護結界に張り替えることができた。

現れた闇の民は、姿を実体にするなり舌打ちをする。

『久しぶりに人間を見つけたのに』

響く声で、黒い霧が収束して現れた狼のようなものが口を動かした。

口が動くその様子を見たというのに疑いたくなる、まるで地の底から響いてくるような、後を追ってくるような気味の悪い声だと恐怖して、ルイはちらりとアイラを見たが、アイラは慣れている様子で静かに目を細めてそれを見ていた。

「……人の言葉を話しますのね」

『そうだよ。僕は高位だ。怖くなった？ ニンゲン』

人に近いものをもつ闇の民は脅威となる。そう聞いた事があつたルイは、状況をすばやく理解した。今、まずい状況なんだ、と。

せめて無力な自分が迷惑をかけないようにするには、相手に狙われない他ない。本来足かせになるのはわかつているがカイトの腕の中でぐつと大人しく身を堅くし、なるべく視線が合わないようにと獣から目をずらす。

「おまえこそ残念だった。ここにいるのはただの人間ではないから」

『僕から見れば、ヒトはヒト』

「残念だがここにいるのは能力者の集団なんでね」

黙りこむカイトより数歩、馬を前にだし敵と話しながら注意を自分に向けているのは、デュオだ。そんなデュオを信じきっているのか、カイトもアイラも不安そうな色を見せずじつとそちらに視線を

向けている。

能力者、と獣が呟いた刹那、ぶわりと何かが増した。前方から溢れる嫌な風に、ルイは顔を顰める。何かにしがみつきたくても自分は馬上で、カイトは自分の後ろにいて、遮るものなく敵から発せられた殺気に中てられたルイは小さく息を呑んだ。

恐怖、憎悪、孤独感

いや、そんな言葉ではない。そのどれでもないような強烈な負の感情とでも言おうか。じわじわと脳裏に嫌なものが見えるような気がした。

これが、闇の民との戦いなのか、とルイは唇を噛んだ。自分が初めてこの世界に來た時に見た熊の形をした闇の民は、人の言葉を話さなかった。熊との違いに、恐怖は大きくなる。

「こんな所に人の言葉を理解する闇の民がいるなんて、やっぱり闇の民が力をつけてるのは間違いないな」

困ったな、と言いながら困っていない様子でデュオが剣を抜いた。それが、合図だった。

「カイト様！ ルイ様をよろしくお願いいたします！」

「アイラ、無理はしないで」

「もちろんですわ。守護結界を張るだけですもの」

そう言つてルイとカイトの前に出たアイラが手を掲げ、何事か呟いたその時、自分の周囲に広がる暖かい空気

「アイラ、さん？」

「アイラは能力者なんですよ、ルイさん」

「え、だって」

「隠していてすみませんでしたわ、実は私、使えるようになったの旅の直前でしたのよ」

掲げた手に何か……石を握り締めたまま、アイラは振り返ってそ

れだけ呟いて、しかしそれきり前を向いてしまい口を閉ざすアイラに、ルイはおろおろと視線を後ろに向けて。

安心するようにとカイトがルイの身体に腕を回し、落ち着いて、と小さく耳元で呟いた。

「アイラはもともと能力者の素質があった。ただ、母が言うには強い力だが随分と偏っていて、難航する、と。最近まで能力者の兆候も見せなかったんですが、漸くその力が守護に特化したものだとかったんです」

「アイラさんも、能力者……」

呆然と見つめる先で、アイラが、そしてさらにその先でデュオと数人の騎士が獣に対峙している。自分の後ろにも数人の騎士が、いつでも動けるようにと周囲に気を張っているのがわかる。

全ては自分を守る為。慣れない様子も見せずアイラも力を使っているのに、私は何もできないのか、とルイが目を伏せた時、後方で異変が起きた。

「二体！」

「いや、三体だ！」

「……地の街へと続く通りに、力が強い闇の民が三体も！？　こんなに街は近いのに！」

騎士達のざわめく声。状況がますますまずい事になっているのだろつ。

本来街の近くは騎士も多く、それほど闇の民がいないものだ、と、前にアイラが言っていた気がする、とルイが気づいた時、カイトも唇を噛んだ。

「……これはおかしいですね」

「カイトさん？」

「ああ、気づいた？　さすが、光の騎士だね。僕が部下を連れてきたんだ。光の神子様？」

ルイの疑問の声に、カイトが答えるより早く。

現れた人物に、隊の一番若い騎士、シャルがひっと息を呑む音が聞こえた。

「完全な人型……っ！」

「闇の……民……？」

黒髪の、幼い男の子。

幼さの残るその声に、強い恐怖を感じるのは気のせいではない。

「ルイ様！ 耳を塞いでくださいませ！」

アイラの声。そうか、闇の民の声は聞いてはいけないんだ。けど、その時。

「んぐ！」

「これが精鋭部隊？ こんな弱いガキがいるのに」
何かがルイの前で飛んだ。

デュオは最初に現れた闇の民にかかりきりで、他の騎士もそれぞれ獣の形をした闇の民と戦っていて。

決して劣勢ではなかった。光の民の、精鋭部隊なのだから。でも、アイラの守護結界に包まれていたルイ、カイト、アイラの目の前で、一人その三人を守ろうと剣を抜いていた騎士の腕が飛んだ。

真っ赤に染まった彼の服。楽しそうに見つめる黒髪の、彼よりも若い少年。

「あああああああ、っ」

「しゃる、さ……ん？」

「シャル様！？」

「……っ！ シャル！」

耳元でカイトの叫び声が聞こえた筈なのに呆然と見つめるルイの先で

突然の状況の変化についていけずばんやりとするルイの視線をしっかりと捕らえた黒い髪の少年が、にやりと笑う。

「我らが神子の、願いの為に」

気高き護りの町―8

「願い……」

「そつだよ。僕らは神子の為に。さあ、こつちに来てよ、光の神子」
「……シャルさん……」

呆然とした表情で呟くルイの目は無い腕の根元を押さえ動くシャルに向けられた。

血、血、血

「何、怖くなつた？ ガキには用は無いんだ」

「ふざけるな。誰がおまえに神子を渡すか」

「神子を抱えて動けない騎士団長様は何言つても無駄だよ。君が動いたら僕はすぐに神子をいただくよ。わかつてるよね？」

くすくすと楽しそうに笑う少年に、アイラは焦つたように視線を動かす。

ルイは呆然としたままシャルを見つめてカイトの腕の中にいる。敵が言うようにカイトが戦いに動く事はルイを守ることができなくなる事を指している。

自分の術が強力なのはわかつているが、戦闘に慣れていないアイラが一人守りきれぬ筈がない。アイラは唇を噛んで恋人に視線を移した。

デュオが間違いなく押している。ただ、相手の獣はどう見ても時間を稼いでいるようにしか見えない。

攻撃に転じず、防御に徹していたから。

「最悪ですわね……」

疑問は多い。なぜルイを神子と認識しているのか、カイトを騎士団長と認識しているのか……

つまり彼らは全てこちらの戦力を把握した上でここに現れたのだ。この、護りの町から近い場所に。

この隊にも救護班からの騎士はいる。ただ、二体目の闇の民にか

かりきりになっでいて、シャルの治療には当たれないだろう。ルイにこの状況を見せたくはないと誰しもが思っているこの状況で。

「血、なんで」

カイトに抱き込まれたまま、ただ血が流れて止まらないシャルを見る自分に、ルイは吐き気を覚えた。

護られてるのに、何もできない。なぜ。

「シャル。少し待て。必ず助けるから」

ぐ、と守護結界の範囲が少しだけ広がり、敵の攻撃の際に飛んだシャルの身体がアイラの結界の中に納まるのを確認して、カイトが声をかける。

辛そうな、低い声。

（私がいるから、カイトさんが動けない）

誰か騎士が一体でも闇の民を倒してこちらに助けにくるのを待つか。いや、そんな時間はない。シャルの血は、止まらない。肘から下がないのだ。

その時、ルイの視線はシャルの視線とぶつかった。

何かを訴えて、にこりと笑う若い騎士。

その、利き手を失った彼の左手に握りこまれている石を見て、ルイは顔色を変えた。

「だ、駄目です、シャルさん……っ！」

「ルイさん！ 動かないで！」

「カイトさん！ シャルさんを止めてええええ！」

はっとアイラとカイトが気づいた時、よろりと立ち上がったシャルが握りこんだ左手を突き出して結界から飛び出した。

同時に暴れたルイが馬から転がり落ちる。強く身体を打ったのだが、そのまま前に飛び出して、すぐ、ルイの身体にどさりと吹き飛ばされたシャルの身体が被さった。

「ちっ、風鳥の石！ ガキがめんどくさい石使いやがって」

ぼたりと目の前に、血が落ちる。誰の血、とルイが理解する前に、頭上の影が敵のものであると気づいた。カイトがすぐに飛び出し、辺りに新しい剣のぶつかり合う音が響いたせいだ。

「カイトさ……」

「ルイさんは下がって！ アイラ、もう無理はするな！」

血を流しているのは人型と言われた黒髪の少年。シャルの攻撃が、利いたのだろう。そのシャルは気を失い、全身傷だらけでルイに被さったまま。

どさりと背後で音がする。アイラが倒れた。力の使いすぎなのか。結界が薄れ、消える。

「な、んで……」

「結界が消えたな。はは！ おまえのせいだよ神子。おまえがいるからガキは死んで、この男も結界を張り続けた女も死ぬ！ おまえのせいなんだ神子、おまえが！ おまえがいなかったらよかったんだ！」

「アイラああ！」

悲痛な叫び声は、デュオのもの。やけにルイの頭に響いたそれ。そして、やや意図的に発せられる少年の言葉。

——おまえのせい

「ルイさん！ 駄目です。逃げて下さい！ ここにいてはいけな」

「私のせい」

「違う！ ルイさん！」

剣を振るいながら必死にルイに声をかけるカイトの姿を、ぼんやりと見つめたルイは

倒れているシャルの手の中の石を握った。

ぼんやりとした目は虚ろで、しかしやけにしっかりと口は言葉を

紡いだ。

「現レヨ、風ノ鳥。我が意ニ従イ吹キ飛バセ」

これはあの時と同じだ、と呆然とカイトはその場に佇んだ。

ずっと伸ばされるルイの指先に現れるのは神子特有の陣。そして現れたのは、以前の風より強い、形を持った風。

吹き荒れる風の中に、ひっと黒髪の少年の声が混じったのは気のせいではない。

先に消えたのはデュオ達が相手にしていた獣。そして、憎悪に顔を歪ませた黒髪の少年が傷だらけの身体を最後に闇に溶け込ませた。

「次は必ず」

そう呟いて。

「逃げられた……」

「おいカイト！ 神子を頼む！ 誰かシャルに治癒を！」

「……っ！ ルイさん！」

アイラに駆け寄りながら指示を出すデュオの声で我に返ったカイトが慌ててルイに近寄れば、あの路地裏で魔法陣を展開させた時と同じようにルイはくったりと身体をカイトに預けた。

意識はない。呼吸はしている。ただ、今回はルイの石を握った右手に小さな切り傷が恐ろしい程に刻まれていた。

ルイの力を超えた石の使用によって魔力が逆流したのだろうとすぐに気づいて、石を手から取り上げる。

ころりと転がった石をカイトは拾い上げて、ルイを抱き上げるとすぐ声を張り上げた。

「シャルは！」

「意識が戻りません！ 出血が多すぎます！」

「誰かテルスに救援の連絡を！」

「俺がもうやってるカイト！ ラトナが能力者を連れてすぐに来る！」

ほぼ全員が傷を負い、アイラとルイが意識不明、シャルは命の危険がある。

最悪の旅の始まりにカイトは手を握りしめた。ぎりぎりと思い込む風鳥の石は、鈍く放っていた光をゆっくりと閉ざしていく。

「……シャル！ くそ、こいつ息してねぇ！」

「アイラ！ 目を覚ませ！」

「神子様がお守りくださった命を絶対に救うんだ！」

カイトがぎりぎりと手を握る、その腕の中で、ぼたりとルイはその瞳を閉じたまま涙を零した。

気高き護りの町―9

地の騎士、ラトナはすぐに現れた。

クォーツ隊から、そして王からの連絡を受けた地の町の主は、光の神子の誕生を祝い、そして最初の訪問の地に選ばれた事に喜び、ダイヤモンド隊に町周囲のいつも以上の警護、そして闇の民の討伐を命じており、ラトナは傍の森まで迎えに上がろうと町を出ていた。「これは……ひどいな。どういう事なんだ」

第一声、そうあげざるを得ない状況に、さすがの隊長の中でも歴の長いラトナも、顔を青くした。

デュオからの救援を請う伝達石の一種である石を受け取り、急ぎ向かった森の出口はひどい有様だった。

木々はなぎ倒され、結界がなされたその中にいるクォーツ隊の状態はひどい。

少数だが、精鋭できたはずの栄えあるクォーツ隊の騎士達は、腕を失った若い騎士の治療に付きっ切りになる者、腕に使用人の服装の少女を抱く二番騎士デュオの傍で回復の呪文を唱える者、周囲に守護結界を張る者。動ける者も八方塞、と、ぼろぼろの状況と言っている。

そして、血の気を失った顔で震える腕に金の髪の幼い容姿の少女を抱きしめて必死に力を分け与える呪文を唱えるのは、同じ騎士団隊長、そして騎士団長であるクォーツ隊一番騎士のカイト・フォルストレ。

「カイト、変わる。神子を……」

ラトナが手を伸ばしても、ちらりと視線を向けただけで呪文を紡ぎ続け腕からルイを放そうとしないカイトに、腕の中で青白い顔をして意識を失っているルイを見て、ラトナは顔を歪めた。

「……こちらの失態だ。町とこの距離にそんなレベルの高い闇の民を侍らせていたなんて」

カイトが答えないとわかっていながら失態だと詫び、ラトナはすばやく自分の隊に指示を出すと、一番酷いであろう負傷を負う若い騎士に近づくと、呼吸が止まっていると気づき急ぎ術をかける治癒士に持っていた聖水と呼ばれる治癒の水を与え、デュオの元へ向かう。

「あつちには聖水を渡した。デュオ副隊長、その娘は？」

「ルイ様の側近、光の術者アイラ・アプロデイト。騎士ではないが守りの術の使い手だ。ルイ様とカイトの周囲に術を張っていたが、戦闘が長期に及び不慣れな術で魔力を使いすぎた」

「……なるほど、その子が今回滞在期間だけ俺らに修行をと頼んでいた守りの術の使い手か。到着が遅れて悪かった。馬車を用意させている。カイトと姫さん、その子を連れて馬車に移動してくれないか？ あつちはオレの声を聞いている場合じゃないようなんですね」

「すまない。それと……」

「ああ、悪いが馬車は二台、他の騎士には引き続き馬で移動してもらうぞ。もう一つの馬車はあの重症患者とこっちの救護隊の騎士に同乗してもらう」

「ありがたい。若い騎士だ。ルイ様が気にする。なんとかしてもらいたい」

短い会話の後、すぐに地の騎士達によりシャルが馬車に運ばれ、もう一つの馬車にはアイラとデュオ、そして腕にルイを抱いて離さないカイトが乗り込む。

ラトナは小さく舌打ちした。この町と近い森に、高位の闇の民が三体、そして人型が一体。ありえない話だった。

人型なんて、少し前に王都南門に現れた以外は何百年と前の御伽噺の世界の話といってもいい程だ。クオーツ隊に死者が出なかったのは、それこそ彼らが精鋭部隊だったからに他ならない。しかし彼らは、獣の姿の闇の民すら浄化させる事はできなかったという。

つまり、人型がなんらかの形で獣に力を与えていた可能性が高い。馬車の出立に会わせ、ラトナは残った光、地両方の騎士に指示を

出すと、馬車を取り囲むような陣形を取り町へと道を走らせた。

一人怪我をしてはいたが回復が施されないまま任に当たっていたクォーツ隊の女性騎士を自分の馬に乗せ、その騎士から情報を収集しながら地の民の特化した守護結界を張り警戒しながら移動するラトナの表情は、厳しい。

「これは……長への報告が怖いぜ」

移動速度を上げ、町にたどり着いた一行を迎えた地の民達は驚いた。

自分達の誇るダイヤモンド隊隊長を筆頭に、馬車が二台、速度を開けて街中を突っ切っていく。しかも隊の中に、金の髪が混じっていて、王都からクォーツ隊がきているのだとそれはすぐにわかり、厳しい表情に眉を顰めた。

「ちっ、街の大通りじゃなくて農村部から入ればよかったか」

「それも目立ちます、ラトナ隊長。仕方ありませんよ。それでは私はここに残って街の混乱を防ぎます」

ダイヤモンド隊の数人が速度を落とし、街で馬から降りるのを確認して、優秀だと呟いた自分の前に座るクォーツ隊の女騎士にラトナは笑みを浮かべた。

「だろう？ 俺直属の部下だからな。まあ、あんたらもさすがクォーツ隊の精鋭部隊だよ。人の言葉を理解するだけではなく口にする闇の民三体に、噂の域をでなかった人型の闇の民との戦闘。さすがカイトの隊だ」

「隊長はすばらしい方です。ですが、今回は……」

「神子の術にまだ一切触れていない筈の言わば神子見習いの彼女の攻撃呪文、ねえ。おもしろい。さすが、カイトの心を射止めただけあるね、ルイちゃんは」

「射止めた……」

「だろう？」

治癒術を殆ど使えないカイトが治癒術士に任せず、自らひたすらに力を分け与える呪文を唱え続け、腕に抱いて離さないその様子は、どんなに疎いものでもカイトの感情に気づいただろう。

ただ守るべき神子を傷つけられて頂垂れた騎士、ではなかった。ひたすらにルイを胸に寄せたカイトの表情にありありと浮かぶ後悔の色。騎士として、上に立つものとして常に仮面を張り付かせていたカイトとは思えぬ表情。

それを理解しながらも口に出した女性騎士の顔にいくらか寂しそうな表情を読み取ったが、ラトナはそれに対し何も言わずに頷く。「まあ、力を分け与える呪文、って事はルイちゃんが気を失ってるのはアイラちゃんとやらと同じで力の使いすぎが理由だろうね。不幸中の幸いだ。また光の神子を失うことはあつてはならない」

ラトナの言葉にいくらかきついものが混じるのは、仕方がない事だ。唯一闇の民を完全に倒す……浄化することができる光の能力者、そして神子はなくてはならない。

「危なかったかもしれません。神子の腕は、傷だらけでした。魔力が暴走してもおかしくなかった。我々の力が及ばぬばかりに」

「まあ、カイトが動けないのは痛かっただろうね」

「……隊長は、」

「わかつていたんだろうね、ルイちゃんが術を使えるって。だから自分の部下が追い込まれていても神子を腕に抱いたまま動けなかった。結界を張るアイラちゃんに任せることなくルイちゃんの傍にいた。続けたのは、敵の攻撃だけでなく彼女自身の力の暴走を抑えるためだったんじゃないかな？」

「……我々にもっと力があれば」

頂垂れる女性騎士に、よくやったというようにぼんぼんとラトナは頭に手を乗せ、見えた地の長の屋敷に馬の速度を上げた。

「カイト、もう地の長の屋敷に着くそうだ」

「……ああ」

ルイを胸に寄せたまま顔を上げず返事を返したカイトに、デュオは唇を噛んだ。護衛の対象である神子を守れぬとは、騎士の恥だと。そして、恋人を守れなかった情けない男だと。

こちらにも、腕の中にアイラを支えデュオは力分配の呪文を呟き続けていて、つい先ほど一旦アイラは目を覚ました。

視界にルイを捉えて僅かに微笑んだが、すぐにまた目を閉じ今は眠っている。

その時、ぴくりとカイトの肩が揺れたのを視界に捉え、デュオが顔を上げるとカイトの視線の先でゆっくりとルイがその緑の瞳を覗かせた。

「……！ ルイさん！」

「かい、と、さん。……シャルさん、は？ アイラさん、は？」

「シャルは治療を受けています。アイラは先ほど目を覚ましました。大丈夫ですよ、ルイさん」

「……よかった」

小さく呟いた後、ルイはそのままゆっくりと瞳を閉じた。

眠ってしまったのか、とも思ったのだが、彼女の手はゆっくりと動き、カイトの胸元あたりの服を握り締めると、ほっと息を吐いて……次の瞬間には、泣いていた。

「私何もできなかった……！ 狙われたのは、私だった、ごめんなさい、ごめんなさい」

ぐずぐずと泣いてカイトの肩口に顔を埋めた彼女に、驚いて口を開きかけたデュオは、カイトに静かに制された。

彼女は術を使った事は知らない。そう口を動かされ、最後にカイトの指は人差し指を一本立てられて口元に持っていかれ、デュオが確認したのを見届けてその手はルイの頭に添えられ、ゆっくりと彼女の髪を梳き始める。

動きを止めた馬車の周囲に、ばたばたと人の気配が集まり、内部

に到着を告げた。

「……、街、着いたんですか……？」

周囲のばたついた音を聞いたルイがゆっくりとカイトの肩から顔を離し、涙で濡れたカイトの肩を見てはとなり小さくすみませんと漏らす。

「いいえ、構いませんよ。テルスの長の屋敷に到着したようですね。降りますから、少しだけ待っていてくださいね」

するりと頭を撫でていたカイトの手がルイの頬に移動して、顎にかけてその長い指が優しく降りていく。

涙が伝うルイの濡れた頬を撫でたカイトは「大丈夫ですから」ともう一度告げてデュオに合図し、馬車の扉を開け降りるとルイに手を伸ばした。

「さあ、ルイさん。歩けないでしょう？」

一瞬躊躇うように後ろに下がったルイだが、足が思うように動かないのを視線でも確認した後、未だ眠るアイラをちらりと見て目を伏せ、何かを握りこんだその手をゆっくりとカイトに伸ばす。

カイトはその握りこんだ手を一度ちらりと視線で確認した後ルイの右腕を少し引き、その身体に手を当て馬車から細い身体を支えたままゆっくりと引いて、横抱きに自分の腕の中へ納め、デュオに降りるように告げるとしっかりと馬車の前方に身体を向けた。

カイトがルイを支えたまま僅かに頭を下げ、はっと気づいたルイが視線を向けた先に、一人の男が現れた。白い布で頭を隠し、その布が長く肩下までを覆っている。口元も布で隠されていて見えないが、布の間から覗く彼の目は強い光を灯し、おそらく自分の父親より年は上ではないかとルイは少しだけ頭を下げた。

「……お騒がせて申し訳ありません、地の長、ナギ様」

「……よい。我が地に闇の民を侍らせた失態、なんとお詫び申し上

げればよいか。光の騎士カイト・フォルストレ殿。そちらが、神子でよろしいかな」

「ええ、光の神子ルイ・アオイ様で間違いありません」

大丈夫ですよ、と小さく声が聞こえて、ルイは緊張しつつ「すみません。……こんな体勢、で」と小さな声で謝罪し、地に足をつけようと少しだけでもがく。

ルイの意図を汲んだカイトはゆっくりとしゃがみこんでルイの足を地に着け、自身は後ろに立ち身体を支えたまま立たせてやる。

「ルイと申します。……すみませんでした。狙いは、間違いなく「ルイさん」

私です、と続けたルイの言葉に被せ、カイトが少し怒ったように眉を寄せて声を荒げた。

しかしその先で、ルイの肩に手を回していたカイトの腕にぼたりと何かが落ちる。訝しんで覗き込んだカイトの目に映ったのは自分の袖に染み込んで行く雫だった。

「……神子、あなたのせいではない。奴等が神子を、特に光の神子を狙うのは言わば当然。それを守るための騎士だ」

「でも私も、騎士団所属の筈」

「神子」

声をかけて止めたのは、後ろから歩み寄ってきていたラトナだ。

静かな声はルイの言葉を止め、その身体をびくりと震えさせる。

「嘆く暇はない筈だぞ？　ここにはそのきみの力を上げに来たんだ。神子の意思が弱ければ、ダイヤモンドは力を授けないだろう」

「ラトナ！」

「そうだろう、カイト。そっちが地を最初に残ったって事は、そういう事だ」

冷静な声にルイはただ目を伏せる。カイトの腕に少しだけ力が入り、ルイの身体がカイトに引き寄せられたのを見ると、ラトナは横に並び一つ大きく息を吐いた。

「一番不甲斐ないのは、俺ら騎士だな。護衛対象である人間に怪我

を負わせる事態になるのはマジで不甲斐ないぜ、カイト、デュオ。ついでに、自分の町に侍らせちまった俺らダイヤモンド隊もな」

「……ああ」

ラトナとカイトの会話に、後ろに控えていた騎士がざっと肩膝をつけ頭垂れた。デュオもアイラを抱えたまま頭を下げ、長とカイト、ラトナ、ルイの周囲に騎士達が集まっていた事にルイはその時気づく。

「ここで話すのもなんだな。神子を部屋にお通しなさい、ラトナ。重症の騎士は既に別室に運ばれている。ラトナはそちらに向かえ」
「はっ」

「カイト殿、そちらの姫は足を痛めているようだな。部屋に案内する。お連れ頂いてよろしいか？」

「申し訳ありません、失礼いたします」

すつと頭を一度下げたカイトが再びルイを抱え上げ、長ナギの指示で動いた騎士に続き屋敷へと足を踏み入れる。

歩ける、ともがき、涙を耐えようと必死に唇を噛み締めるルイを、カイトはただ黙って有無を言わず抱きかかえたまま廊下を渡った。次第に抵抗を諦めたルイはそのまま顔を隠すように俯いた。

「こちらに」

案内をしてくれた騎士が扉を開け、部屋に入ったカイトはそのまま真っ直ぐベッドへ向かうとルイを寝かせた。

部屋にもう一つのベッドを確認したカイトは入り口に立つ騎士に声をかけ、すぐに通じかかった別の騎士に案内されていたデュオを呼び止める。

「アイラもこちらへ。ルイさん、アイラもこちらでいいですね？」

本来別室を用意されていたアイラを隣のベッドに寝かせるのは、恐らく心配しているであろうルイがそう言い出すと踏んだのと、カイトがその場を離れる為。

「カイトさ、私……っ」

「すみません。報告は、私が先に一度行きます。ほら、手を」

ぐつと握り締められたままのルイの手にカイトの手が重なる。ゆつくりと開かされる手に握られている伝達石を取り上げ、それをルイの左手に移すとカイトはデュオに声をかけた。

「私が長に報告に行きます。デュオはここについていてください。それと、簡単な治療術でいいのでルイさんの手にかけてもらえますか？」

「は？ …… つ、ルイ様、手、」

「腕の傷はすぐに直してもらったんだけど、その後に…… ルイさん、その石をあまり強く握っては駄目ですよ？ 大丈夫、少し握るだけでも、お呼びしてもらえれば伝わります」

驚いたデュオの視線の先では、伝達石をにぎり過ぎていた為に赤黒くなつたルイの手の平。ぱつと左手でカイトの袖口を掴み、右手を隠したルイは傷はないから大丈夫だと頭を振つたのだが、心配そうに表情を変えたデュオは小さく呪文を唱えてその手に暖かな光を灯す。

「すみませ、ん」

謝りながら、しかし伝達石を握る手で未だしつかりとカイトの袖口を握つてルイは手を離さない。それを見たデュオは視線を彷徨わせてカイトを見た。

「カイト、報告は俺が行こう。まだルイ様から離れないほうが……」

「アイラが目を覚ました時どこか痛むと言われても私は治療術は使えませんから、デュオは二人を」

「その必要はないぞ、カイト」

「ラトナさん」

部屋に現れたラトナに、ルイは未だ潤んでいる視線をそちらに向けた。

ラトナは一度ひらりと手を振ると、ルイのベッドの奥に寝かされるアイラを見て眉を顰めた。

「報告。あの若い騎士、命は助かった。腕も繋がったぞ」

「え！ ほ、本当ですか！？」

「シャルは助かったのか!？」

驚きの声を上げたデュオの言葉で、ルイはカイトは大丈夫と言っていたがシャルは恐らくかなり危険な状況だったのだらうと瞬時に悟った。

ならば、命が助かったのは本当に吉報だ。ほつと息を吐くと、微笑むラトナと目が合う。

「腕のいい治癒術士がいたんでね。ラッキーだぜ、おまえら」

「本当、わたくしのおかげですよ？」

突然すつとよく通る女性の声。「げ」と小さくラトナが呻いたが、ルイが首を傾げるとラトナの後ろに綺麗な、透き通るような水色の長い髪が見えた。

「え？」

「……！ 水の神子！」

「だぁもうおまえ出て来んなよ」

「だって、光の神子が来たなんて言われたら黙ってられないでしょう？」

言いながらラトナの後ろからその長い真っ直ぐな髪をふわりと散らして、アメジストのような深い紫色の大きな瞳を輝かせて姿を現した女性がラトナの腕に自分の腕を絡める。

「はじめまして、水の長ソーマの娘、ディーネと申しますの」

「ディーネ様……っ、なぜテルスに、」

「ラトナに会いに着ていましたの。そしたら任務で街の外に出てるって言うし、仕方ないからここで待ってたら急にばたばたして怪我人が運ばれてくるし」

「では、我が隊の騎士を治癒してくださったのは」

「カイト様正解ですわー、わたくしがいてよかったですでしょう？ ラトナ」

ふふ、と微笑んでラトナの顔を覗きこむディーネに、「ああ、はいはい」と頭を掻いたラトナは少しだけ頬を赤らめる。

「治癒に優れた水の神子様がいてくださってよかった。ありがとう

「ございます、ディーネ様」

「いえいえ。まあ、申し訳ないけど腕が元通り動くかは……本人しだいよ。そこは理解して頂戴ね？　で、そっちの子も治癒が必要？」

「アイラは力を使いすぎただけですので」

「なら、ラトナから回復薬を貰うといいわ。ねえラトナ」

「ああ、すぐ神子の分も用意するから安心してくれカイト、デュオにここにことラトナに腕を絡めたまま透き通る声で話す女性は背はルイより高いようで、すらりと伸びた手足、白い肌。目を引き付けるには十分すぎる容姿。

ルイはシャルが無事という報告でとりあえず少し落ち着いたのか、涙で歪んだ視界を袖で拭い、その様子をじっと見ていた。

「可愛らしい子ね、ぜひ今度お話したいわ」

微笑むディーネの言葉に、はっと慌てたルイはすぐ身体を起こしてはじめまして、と頭を下げる。途端ぐらりと身体が揺れ、カイトが慌ててそれを支えた。

「光の神子はそのうちおまえの町にも行くから、今は休ませてやるぞ。ほら」

ラトナは絡みついた腕をそつと離し、戸口に追いやると頬を膨らますディーネを指差してこいつ戻してくる、とぶつきらばうに言い放った。

「長から伝言、報告は俺がしといたから、おまえらは明日でいいそうだ。もう夜も遅い。とりあえず今日は休めだとさ」

「……ラトナさん！」

去ろうとしたラトナを呼び止めたのは、ルイだった。部屋の人間の注目を浴びたルイはそのまままだ潤む瞳を揺るがすことなく真っ直ぐにラトナに視線を合わせる。

「……ありがとうございます」

「……いえいえ」

会話は、それだけ。カイトの袖を握ったまま視線を落としてしまったルイに、ラトナは一度にっとなつと笑つと手を上げて、カイトに「す

ぐに薬と食事を運ばせる」と告げるとにこにこ微笑んだままのディ―ネを連れて部屋を出る。

「おいカイト、部屋も一つあったし、俺そっちに引き上げるわ」「え？」

「おまえは席外さなくていいみたいだな。アイラをこの部屋に置いて、ルイ様に寝ないでみさせるつもりはないだろう？　俺が隣の部屋でこいつにつくよ」

「あ……ああ、すまない」

「手、出すなよ」

「わかつてる！」

にやりと笑うデュオに、一瞬目を見開いた後すぐに顔を赤くして怒るカイトを見て、漸くルイは身体力を抜いた。

アイラの顔色が悪くない事にほっとしてデュオに頭を下げ、引き上げる二人を見送って漸くカイトと目を合わせたルイは、しかしもう一度その緑の瞳に涙を溜めた。

そつと膝を突いてベッドに腰掛けるルイにただ黙って手を伸ばしカイトはその頭に手を滑らせ、髪を梳く。

「アイラも眠っているだけですし、シャルは大丈夫です。ルイさん」「う、わたし、私っ！　私のせいなのにつ」

「違います、ルイさん。守れなかった私が悪い」

「違う！　カイトさん、私を動かないようにしてた！　私動いちゃいけなかった。あいつは明らかに私を挑発してたのに……っなんです！」

「……ルイさん？」

様子がおかしいルイに、カイトは少し距離を縮めその顔を覗きこむ。ルイの手は震え、その顔は恐怖に歪んでいる。初めてみるルイの強い感情に、カイトは驚きで目を見開いた。

「怖い、怖いこわい！　お母さんと同じ言葉を言うあいつらが怖い！　嫌だ！　私を否定しないで……！」

「ルイさん！？　落ち着いて、ここには私しかいません！」

叫び手を振り回しいやいやと全身で何かを拒絶し始めたルイに、カイトは慌てて傷つけないようにと手を押さえ込む。暴れるルイを抑えようとともがくと、後ろに倒れこんだルイの両手を押さえたままカイトもルイに被さる形でベッドに倒れこんだ。

見下ろすルイの瞳からはぼたぼたと涙が流れシーツを濡らす。口は微かに動き何かを言っているようだがもうわからなかった。

「ルイさん、ルイ、大丈夫だから。ここにあなたを否定する人は、いないから」

「こわい……助けて」

小さな小さな助けを求める声。初めてルイが感情を露にするのをカイトは見た。

暖かな雰囲気を纏うように見える彼女が実はどこか冷めていて、貼り付けた笑顔に感情を押し殺す事も止め欲もなく諦めたようにすごしているのを一ヶ月以上見続け、いつか素直な彼女を見たいと願ってはいたが

カイトが初めて見た少女の激動は、強い恐怖によるもので……カイトは静かに口を引き結んだ。

「うわあああああつ」

ずっと堪えていた何かを溢れさせてしまったようにひたすらに泣き叫ぶ少女を、カイトは腕を背に回し強く強く抱きしめた。

ベッドの上で頬を濡らし静かに眠る少女をカイトはぼんやりと眺め、時折伸ばした手は彼女の額の髪を揺らす。

漸くルイが泣き止んだのは、彼女が泣きつかれて眠ってしまった時だった。

食事は果物類だけを貰って、ベッド横のテーブルに載せられている。薬を飲ませようとしたのだが、やっと眠った彼女を起こすのが忍びなくてカイトは手に握った薬の瓶に視線を落とし、ため息をついた。

ルイを責め、否定的な意味ばかりの闇の民の言葉を、ルイは母親と同じだと言い切って泣いた。

彼女に何かあるとは思っていたが、カイトが思うとおりであったとすればそれはやはり、酷く本人には尋ねにくい話題だ。

暫く迷った後、眉根を寄せて眠るルイの顔を見てカイトはもう一つ息を吐くと、意を決してその細い肩に手を伸ばす。

「ルイさん。起きれますか？ 薬、飲んでください」

「ん、……」

「ルイさん」

動いた拍子にまた一つ涙が頬を伝い、カイトが指を滑らせ拭くと、漸くうつすらとルイは瞳を覗かせる。潤む瞳はきらきらとしていて、カイトはぱつと頬から手を離しどくと大きく鳴った心臓を押さえた。

「カイト、さん」

「すみません、起こしてしまつて。薬、飲んでいただけますか？」

暫く視線を彷徨わせた後、ルイは何かを思い出したのか急に顔を赤くしてぱつと身を起こした。

「わ、ごめんなさい、私、寝ちゃって」

「いえ」

短く答えたカイトはルイの様子を見て微笑み、そつとその赤らんだ頬を手で包むと、顔色がよくなってよかった、と呟いた。

ルイが薬を受け取りそれを口に含むのを見届けた後、苦そうに口をもごもごとさせるルイにちゃんと飲み込むように言っただけでカイトは立ち上がる。

「ん、あ、カイトさん？」

「私は、他の部屋を借りますから、今日はこちらでゆっくり休んで下さい。まだ疲れているでしょう？」

「え、どうして？」

「どうしてって……」

ついルイの目をじっと見つめたカイトに、しかしルイは真っ直ぐに視線を合わせる。むしろカイトが動揺してしまい視線を泳がせた。

「ここ、カイトさんも一緒について言われたんじゃないんですか？」

「そうですね、……、ルイさん。駄目ですそんな事言ったら」

「えっ」

必死にルイは体調が優れないんだ、とカイトは自分に言い聞かせて、ルイの傍に行く。と今度はゆっくりとその顔を覗き込んだ。

きょとんと目を見開く彼女は意味がわかっていないのだろう。そういえば、数日前も彼女は一緒に寝るか提案してきていた。なんとなく面白くない想いを味わい、カイトは少しだけ眉を寄せ、それを見たルイまでその表情を崩す。

「カイトさん」

「ルイさん、そういった事は、男性に言っではいけません」

「でも、カイトさんは」

「わかりませんよ？」

え、と目を見開いた少女の細い腕をカイトは素早く掴んだ。驚くルイはそのままに、カイトはそのまま体重をかけて真っ白なシーツにルイを押しつける。

何をやっているんだと警鐘が頭に響く。カイトは胸の内に何か抑

えきれない熱が広がるのを感じていた。じわじわと広がるその熱は、カイトの意思に反し身体を乗っ取ってしまうのではないかと思う程に。理性には自信があった筈なのに、この迫り来る強い衝動は何だろうつと考えて、しかしその意味に気づいてカイトは少しだけ苦笑した。

びくりとルイの身体が震え、しかしまたしてもどうしたのかと驚いた顔でカイトを見つめる少女は状況がわかっていないのだろうか。

「……抵抗して頂かないと、困るんですが」

「……えと、ご、ごめんなさい、カイトさん」

謝るものの抵抗を見せないルイに、つまり困らせてごめんなさいという意味だと気がついてカイトははあと大きく息を吐いてその手をゆっくりと離れた。

「勘違い、します」

「え」

「いえ。ルイさんの世界では、こういった事はその、学んだり……はあ」

言葉にため息が混じるのは仕方がない。何度目かのため息を吐いたカイトを見ていたルイが、急に小さくあつと声を上げた。

「もしかして、えつと、男性と夜一緒に駄目だとかそういう話ですか？ えつと、ま、学びます！ でもその、カイトさんだし」

「ルイさん、私も男ですよ、と先ほどは言っただけですよ」

「ええ！ はい、でもカイトさん、……あう」

言いかけたルイは段々と赤くなつた顔を隠すように俯いて、少し唇を尖らせているようだ。なんとなくカイトはその様子を目で追つて、しかし俯いたルイを逃がすまいとまた顔を覗き込めば、少し潤んだ瞳と視線がぶつかる。その瞳にはもう悲しみは映っていない事にほっとして、カイトは次の言葉待つ。

「わ、私確かにあまり、男の子と仲良くなかつたから変な事言ってるかも……漫画とかあまり読む時間なかつたし、そんな話題で友達と盛り上がりたりしなかつたし……」

つまり知識自体はあるが疎いのだろうとカイトは頭を支えるように額に手を当てた。そちらの方がむしろ、カイトの欲を抑えるのは十分な話だった。

（彼女を傷つけるつもりはない）

それが絶対であるカイトの意思だ。今のところはそれがまだ勝っているのを確認したカイトは、一步ルイから離れる。

でも、彼女に触れようという意味は抑えていても、別の感情がカイトの心を支配し始める。

「興味がありますね」

「え？」

「あなたが元の世界の話をするのはめずらしいですから。先ほども含めて」

「あ……そう、ですか？」

そつと、カイトが離れた分距離を詰めたルイが何うようにカイトを覗き込む。もう、カイトには抑えきれなかった。

好きだ。自覚はしていたつもりだったのに、カイトは確かめるように心の中で呟いて、ルイの腕を引くと自分の腕の中に少女を閉じ込めた。

異世界からの少女だから、神子だから。だから興味は持っていて、そのどこか消えてしまいうな、何事も執着を見せない少女を守ろうとするのは、次第に義務から好意的な感情に変わったのは気づいていた。

自分も大概鈍い、と苦笑する。本気になれない恋ばかりで、恋に憧れでも抱いていたのだろうか。ただルイの顔を見れば嬉しくて、傍にいらればよかった日々。

こんなにも内に激しい欲を持っていたというのに、一步引いた状態で接していたのは自分のほうだったのか、と。

初めて自己を主張したルイに、もっと近づきたい。もっと知りたい。そして、諦めてしまうのが常な彼女を、自分に執着させてみた

い。

守りたい。彼女を、全ての恐怖と諦めの日々から。

そんな想いを抱きつつ、カイトはまるでどこかさっぱりとしたように肩の力を抜いた。

突然の抱擁にルイは身体を硬直させているようだったが、抵抗はしなかった。

「ええ、嬉しい変化ですね。アイラとはよくお話しているようですが」

「アイラさんとは、その、カイトさんのお話したり、本のお話したり」

「なら、私は特別でしょうか」
「えっ」

そつと、名残惜しく思いながら身体を離し、もう逃がしませんよ、と小さく呟いた声は少女には聞こえなかったであろう。

「一人は怖いですか？ それなら、私は隣で休ませてもらう事にします。ただ、いくら寂しくても他の男性には頼まないように」

「た、頼みません！」

「なら、問題ありません。……今は。……さあ、ルイさんもう休んで下さい。あまり遅くなると、私が明日アイラに怒られてしまいますから」

首を傾げつつ頷いたルイが布団に潜り込むのを確認して、カイトも隣のベッドに横になる。

触れたいという熱がまだ胸のうちに燦っているものの、喜びのほうに勝っていた。今日はまだ、このままでいい、と。

「おやすみなさい、カイトさん」

「……おやすみなさい、」

ルイ、と小さく呟いた声は、少女に聞こえたのだろうか。

柔らかな光が室内に広がる。窓の外から聞こえるのは、鳥の鳴き声。昨日の出来事が嘘のように穏やかな朝。ゆっくりとカイトが身体を起こすと、ルイはまだ眠っているようだった。

そつとベッドを抜け出し、隣のベッドで眠るルイの顔を見れば、昨日のように苦しそうにはしておらず、ほっと笑みが零れた。

ゆっくりと彼女の額に触れ、髪を撫でると少し身じろぎした彼女は、身体をカイトのいる側に倒す。その拍子に、カイトの指先に暖かな吐息が触れ、思わず引っ込めそうになる手をカイトは何とか留める。

そつとその唇に触れると、柔らかな感触。暖かさにつられるように指を滑らせると、ルイが少しだけ唇に力を入れた。

「……ルイさん、朝ですよ、起きれますか？」

「ん、」

昨日の夜とほぼ同じ状況、しかしこれほど胸が高鳴るのは、止められない自分の気持ちのせい、ルイが穏やかな顔で眠っていた喜びからか。

ふと、ルイが手を伸ばし、自分に触れているカイトの腕を掴んだ。咎められるかと思ったカイトが少し手を引こうとすると、それより強い力でなぜかルイは袖口を引っ張った。

「ルイさん？」

「ん、もう少し、アイラさん」

「……アイラ、ですか」

今ここにいるのは自分なのだと、ルイに伝えたくてカイトはそのまま袖口に触れる手を反対の手で握る。

「今日は地の長に挨拶に。ルイさん、起きないと、いたずらしますよ？」

「……あ、れ？」

漸く目を開けたルイは、しばしの間呆然とカイトを見た後、慌てて起き上がろうと腕に力を入れた。しかしルイの手はカイトの袖口

を未だに掴んでいて、その上にはカイトの手が添えられている。

意図せず引つ張る形になってしまい、カイトはぐらりと倒れそうになる身体を支える為に手を伸ばす。そこで、

「ルイ様！ 起きていらつしやいますか！？ ご無事です、……え？」

ばたんとノックとほぼ同時に部屋に現れたのは、アイラ。その侍女あるまじき行為に、ため息をついたのは後ろから姿を現したデュオか、ベッドに手をつく形で身体を支え、傍目にはまるでルイを押し倒しているかのような体勢のカイトか。

「か、カイト様！！ あああ、朝から何をなさっているのです！」

「その前にまず謝つとけ、アイラ」

「デュオ、君もだ」

「悪かったよ、カイト。すぐ出るから、先に支度してくれ」

デュオは言いながら顔を赤くしてルイの傍に寄ろうとしたアイラの腕を掴むと問答無用で扉まで連れて行き、じゃあ後で、と言い残して扉を閉める。

アイラが最後まで「私はルイ様のお手伝いを！」と言っていたが、カイトの準備が終えてからにしろとデュオに一喝されその声は遠のいた。

二人の姿が見えなくなったところで漸くカイトは、驚きで目を丸くし、何も言わずに固まっていたルイから身体を離し、微笑を向ける。

「私の支度を終えたら交代でアイラを部屋に呼びますから、ルイさんはもう少し休んでいいですよ」

「え？」

「私がいる前では着替えにくいでしょう？ すぐに準備して部屋から出ますから。……それとも、私がお手伝いしましょうか」

意地悪そうに笑ったカイトが、部屋に備え付けられていた浴室の奥に消えるまで、ルイはただ口をぽかんと開いて顔を赤く染め上げ

て
い
た。

仕度を終えたカイトが部屋を出ようと扉を開けた時、今か今かと待ちかねていたアイラが扉の前に既に待機していた。部屋の奥に見えたルイの様子を見て、口をあんぐりと開け呆然としている。

「あー……すみません、いじめすぎてしまいましたけど、大丈夫ですよ」

「まあ！ カイト様でしたら無理矢理手を出したりしないと信じておりましたのに。合意でなければ、いくらカイト様といえど吹っ飛ばしますわよ」

「……デュオ。彼女に風の魔法を教えないように」

苦笑したカイトは使用人である彼女の言動を咎める事なく後ろの彼女の恋人に注意を促し、その彼女を部屋に入れる為に身体をずらす。すかさず部屋に飛び込んだアイラが、ベッドの上でぼんやりと顔を赤くし座り込んでいるルイの傍まで走り寄るのを確認してカイトはゆつくりと扉を閉めた。

「おまえのところは使用人に寛大だな」

「今更、幼馴染と言っていい彼女の性格なんてわかっていますよ。それに彼女の主は正確に言えばルイさんですから」

「で？ 否定しなかったように見えたけど、やっちゃったわけ」

「……、部下の口の利き方には指導を与えるべきでしたね」

「なんだ、俺も幼馴染だろ」

「露骨すぎます」

「じゃあ、喰った？」

無言のカイトの鉄拳がデュオに飛んだのは言うまでもない。

「ルイ様！」

慌てたように転がり込んできたアイラにルイが驚いていると、彼

女はルイの手を掴み胸元まで上げ大丈夫ですか、痛くはありませんでしたかと繰り返す。

その様子に首を傾げつつ、ルイは握られた手を握り返し慌てて頷いた。

「大丈夫ですよ、怪我はすぐに治してもらったみたいだし、アイラさんのほうがずっと術を使つてて疲れたんじゃない」

「違いますわ！ そうではなくて、腰とか痛みませんか？　すぐに湯浴みの準備を致しますから、ああ、私つてば。今しばらくお待ちくださいませ」

「は？　腰？」

「カイト様もカイト様ですわ、いくら待ち焦がれたといつても恋人になられてすぐの女性に手を出してしまうなんて。まずは口付けから、時間をかけてでもよろしいでしょうに！」

「へ、恋人？　え、あ、アイラさんちよつと待つて！」

口付け、と具体的すぎる表現に漸くアイラの勘違いの理由を悟り、ルイは慌てて離れようとしたアイラを呼び止める。

「アイラさん、恋人つて、私の事ですか？　ちよつと待つて、カイトさんとは何も……」

「恥ずかしがらずとも、……つて、え？　違いましたの？　ですがルイ様、カイト様は恋人ではない女性とご一緒するとは思えませんか。一応紳士ですもの、今更ですけれど。それに否定されなかったんですよ」

「あ、部屋にいてほしいつてお願いしたのは、私です。否定つて、何をですか」

「ルイ様をいじめすぎたと。てつきりそういう事なのかと……あら？」

「ち、違います……！」

顔を真っ赤にしてルイは立ち上がり、首を振る。

「確かに、ちよつと一人になるのが怖くて出て行こうとしたカイトさん呼び止めちゃって、そういう事は言っちゃいけないって怒ら

れましたけど、カイトさんは何も……っ！　そ、それに恋人だなんて」

必死に説明するルイを見て少し驚いたように目を見開いたアイラだが、ルイの表情にいつもとは違う微妙な変化がある事に気づいて頬を緩ませる。

何もなかったとルイは説明するが、何かあったのだろう。ルイの表情は、どこか嬉しそうだったから。

「わかりましたわ、ルイ様、落ち着いて」

「っ、私、やっぱりいけないことしました……？」

「……そうすね、いけませんわ、恋人以外の男性と寝室を共にするのは。こちらを用意した地の民は、二人が恋人だと勘違いして気を利かせたのかもしれませんが」

「私、……カイトさんに変に思われちゃったかな、悪い事、言っちゃったんでしょうか」

「まあ、カイト様なら大丈夫ですわ。むしろよく耐えたと言いましようか。当然ですけど。でもルイ様、よかったんではありませんの？」

「え？」

「カイト様とご一緒にいれて、嬉しかったのではありませんの？」
息をのんで顔を逸らし、無言になってしまったルイにアイラは微笑んだ。このまま俯く少女が欲深くなってくれればいい。いつしかカイトといることでルイにそういった感情が芽生えるのではなかったアイラの考えは当たっていたのだ。

「……ルイ様は、カイト様の事、好き、なのではありません……？」
ゆっくり、彼女に合わせて静かに尋ねる。少しでも特別な意味が伝わるように。

ルイは、ゆるゆると小さく首を振った。

「わからないんです。お兄さんみたいだな、とは思ってたけど……違う……？　好きって、どんな気持ちですか？」

言って、ルイは俯いた。でも、と小さく言葉が続いたのに気づい

て、アイラは一步近づく。

「……一緒に」

ぽそりと俯いたまま、ルイが呟くように言葉を紡いだ。

アイラは聞き逃すまいと膝を床に下ろし、続きを待つ。

「一緒にいたいと思うのは、初めてなんです。アイラさんも、カイトさんも。それに……抱きしめてくれたのは、カイトさんが初めてです。……よくわからないけど、暖かくて、安心しました」

潤むルイの瞳を見て、自分の名が呼ばれたことに少し驚きつつもアイラはそつと手を握り、微笑んだ。

「好きは、わからないけど……カイトさんの傍は、とても暖かくて好きです。いつも一緒にいたら、って思います。これが好きって気持ちなら……私、カイトさんが好きです」

頬を染めて、恥ずかしそうに言ったルイの表情は、確実に恋をしているそれで、アイラは嬉しそうに頷いた。

「……さあ、ルイ様。準備をして、朝食の席へ参りましょう。カイト様がお待ちですわ」

「ご、ごめんなさい、遅くなって」

「いいえ、時間はたっぷりありますから。地の長へのご挨拶は、昼過ぎになるそうですね。それと、昨日負傷した騎士は意識を取り戻しているそうです。朝食を終えたら、カイト様とデユオ様がそちらに顔を出すそうですね。行かれますか？」

「あ、行きたいです！」

話しつつ湯浴みの準備を終えたアイラに促されて数日水浴びしかできなかった身体を湯につけたが、カイトたちが朝食を待っている事を考えそそくさと身体を洗うとアイラの用意したワンピースに着替える。

薄い桃色のワンピースは背にリボンを結ぶタイプで、そちらはアイラが丁寧に結んだ。あまり華美なものにはルイが好まないのを知っ

て、アイラがルイの為にと選んだ服の一つだ。

アイラはルイの長くふわりと広がる金の髪を魔力石で適度に水気を飛ばし、丁寧に梳いて、ルイお気に入り白いレースのリボンで結わえる。これは最近カイトがルイに渡したものだ。その前からルイが愛用していた黒地に白いレースのリボンもカイトが用意したものだそうだから、ルイがカイトからもらったものを大切にしているのがわかる。

あまり化粧を好まないルイだが、今日だけは、と薄くアイラに化粧をしてもらい、最後にアイラに全身を確認してもらおうと部屋を出た。

案内された部屋に入るとすぐにカイトが席から立ち上がりで迎えてくれる。

カイトの姿を見てほっと息を吐いたルイがカイトに駆け寄り、そのまま促されてカイトの隣にルイが座ると、アイラはその斜め後ろに控えた。ルイは多々一人で食べるのは寂しいとアイラを食事に誘っていて、普段はそれに答える事もあるもののさすがにカイトの前ではしないようだ。

「身体は休められましたか？」

「はい！」

元気よくルイが返事をして、向かい側に座っていたデュオが微笑みアイラを手招きする。

「ここは正式な席じゃない。おまえも座れ」

「ですが」

「アイラさん、一緒に食べましょう」

アイラが席に移動するのを見てルイは満足気に頷くと、運ばれた料理に目を落として急に大きな声を上げた。

「お米！？」

「え、ルイ様、知ってありましたの？」

四人の目の前に並ぶ料理の中に、白くつやつやした粒が団子状に

握られ置かれている皿があるのをルイの視線が捉え、こくんこくんと頷く。

「私の世界の、主食でした」

「まあ！」

その言葉に、アイラだけではなくカイトも少しだけ目を見開いた。「ですが、ルイさんはうちの屋敷の食事は元の世界と特に違わないと」

「違います。パスタとか、パンも普通に食べてましたから。でも、私が住んでいた国で主食とされていたのはこっちのお米です」

「他にどんなものがありますか？」

「うーん、お味噌汁とか、煮物とか……」

なんと説明すればいいかと悩むルイに、デュオが「なら」と声をかける。

「もしかして、水の民の食事に近いのではありませんか？ 味噌、というものはラトナ隊長から聞いた事があります。スイレン隊長はもくもくとどの食事でも食べられてしまいますからわかりませんが」

「街によつて食べ物が変わるんですか？」

「そうですね。すみません、他の街の食材も用意させるべきでした」

普段何かが食べたいという事なく、出されたものを文句も言わず食べるルイにきつと元の世界と食事は一緒なのだと違和感なく過ごしていた事にカイトは眉を寄せて謝罪した。

食事が違うというのはやはり物足りない筈だ。カイトやデュオも出張で街を離れると、地元の味が恋しくなるのだから。

ルイが我俣を言わずいろいろ耐えているのはわかりきっていた事なのだから、もう少し気を配ればよかったとカイトが俯けば、ルイが慌てて違うと言って手を振った。

「本当に、パンは好きですから。でもあの、デュオさん。水の民の食事なら、なぜここに？ ここは地の町ですよね」

「昨日いた水色の髪の女性を覚えていますが、ルイ様。水の神子デイーネ様です」

言われて、部屋に訪れた美しい髪の女性を思い出し、ルイは頷いた。確かに、治癒に優れた水の神子が、という会話を聞いたのを感じている。

「まあ、昨日の様子から見てわかるとおり彼女はこちらによく出入りしています。水と地の町はもともと親交が深いのですが」

「ルイさん、彼女はラトナの婚約者なんですよ」

カイトとデュオの説明に、ルイはそうかと昨日の二人の様子を思い出して納得した。つまり、この街と水の街は行き来が多く、水の民が好む食事がここにあるのもそれ程珍しい事ではないらしい。

「他の民と、婚約……できるんですね」

「それはもちろんです。民に殆ど制約はありません。さすがに、いくら人型が現れたと言えど闇の民と暮らそうという民はいないとは思いますが」

「そうだな。まあ、さすがに身分がどうのこうのといった問題はあ
るが、王や長、神子以外は結構自由だな」

「デュオ様！」

デュオの言葉に、食事を進めていたアイラが顔を上げた。しかし、
本当の事だ、と言ってアイラを一度見たあと、デュオは食事をしつつ
カイトに視線を向ける。話す判断はそちらに任せるといった様子
だ。

「はあ。確かに、そうですね。残念ながら身分制度がある以上、全
て自由ではないでしょう。あくまで身分であって、加護を受ける神
の違いはあまり関係ありませんが……一部、王や長、神子や貴族は
あまり他の民との婚姻は好まれませんね」

「ラトナさんとディーネさんは大丈夫なんですか？」

自然と出た疑問に、ルイは首を傾げて隣のカイトを見上げた。

神子の話題ともなるとルイ自身の話にもなってくるのだが、まず
気になるのはそちらなのだろう。

「水と地はもとと仲がいいですからね。それに、ラトナがそうで
なければ誰とも結婚しないと言いつつ切っていますから。……地の長と

神子の息子がそついいきつてしまえば、長も認めるしかなかったよ
うですよ」

「長と神子の、息子」

「素敵ですわ、ラトナ様」

ラトナが地の長と神子の息子だという事実にも驚いたが、ほう、
とルイとアイラは顔を見合わせて息を吐いた。ラトナのディーネに
対する深い愛が周囲を認めさせたという事なのだろう。

和やかに食事が進み、にこにこ話をするルイを見て少しほつ
としたカイトは出された紅茶をゆつくりと味わった。

しかし、次の瞬間気管に入ってしまった紅茶のせいで盛大に咳き
込む。

「でも、たとえば私が……そうだな、風の民と一緒にいたいと言
ったら、やっぱり問題になるんですか？」

「っ！？ げほっげほ」

「る、ルイ様！？」

むせたカイトの代わりにアイラが紅茶の入ったカップをがしゃん
とソーサーに戻し声をひっくり返しながらも疑問を叫ぶ。なぜで
すの、と。

「え、いえ、その得に意味は……例えば、なんですけれど」

「げほ、驚かせないでください、ルイさん」

「え、やっぱり光の神子は、問題あるんですか？」

「それ以前にルイ様、まさかイオ様が……？」

先ほどルイの気持ちを直接聞いたアイラですら、ルイの発言に驚
いて胸の前で両手を組みちらちらとカイトに視線を向ける。ちなみ
にデュオは、カイトの反応に少なからずこみ上げた笑いを堪えよう
としているようである。

「い、イオさん！？ 違います！ だってたぶん今の話つてそつい
う事じゃ……」

「ああ、ルイ様、そういう事だ。まあ、できる事ならあなたが心か
ら愛する人が、我が民の人間である事を願います。申し訳ないが」

震えて答えられない二人に代わり、デュオが答えた内容に、ルイは自分の話でありながら「へえ」とあまり気にしない様子で頷く。残念ながら、決意を固めたカイトと想いを自覚し始めたルイの関係がすぐに劇的に変化するという様子は見られなかった。

気高き護りの町―13

朝食を終えたルイたちが大きな屋敷内の医務室に行くと、傍にいる騎士達が一斉に敬礼した。

中に入れば怪我をした騎士……シャルがベッドに寝かされ、しかし背にクッションを詰め込み身体は起こし、横にいるラトナと会話をしているところだった。

「シャルさん！」

姿を見た瞬間飛び出したルイはしっかりと目を開き、落とされたはずの腕を上げて返事をしてくれた彼のその手を握りよかったと笑った。

そこで、握った手が暖かいものの、違和感に気づく。ぴくんと一度はねたものの、指は動いてはいないようだ。

「あ……」

「ルイ様、ご心配をおかけ致しました。僕はもう大丈夫です」

にこりと笑うシャルは、まだ顔色はぱっとしないものの意識もしつかりしているようだ。腕を切り落とされ、一時は呼吸すらしなかったと聞いていたから、ルイはその様子に改めて魔法の凄さ、そして水の神子の凄さに驚かされる。

ただ、握った手は酷く熱かった。熱を持っているようだ。

「あの、シャルさん。すみませんでした。私が……」

いたから、と続けようとしたルイはそのままその言葉を飲み込んだ。言うてはいけない気がした。ゆっくり首を振って、俯く。

しばらくの後、小さく「守って下さり、ありがとうございました」とルイは呟くように言った。

それは、カイトを酷く驚かせた。今のルイの行動は、自分を否定し続けるルイの普段の言葉とは思えない言葉に聞こえたのだ。

いつもの彼女なら、自分なんて守らなくても、と考えていた筈な

のだ。カイトは、頬が緩んでいくのを感じた。さまざまな要因があったとしても、ルイを少しでも変えたことに自分が関わっていたのだとしたら、それはとても嬉しいことだ。

カイトはそつとルイの傍にいき、その背を眺めた後、シャルに向き直った。

「シャル。まだ熱があるのでしよう」

「すみません、隊長。今朝は……」

「いいえ。私も部下を守れず情けない事です」

「何をおっしゃるんですか。隊長が守るべきは神子様。当然です」その会話を聞きながら、カイトが朝もここにきていたのだとルイは気づく。とすれば、朝起きるまでは自分と一緒にいた筈だからルイが仕度をしている間で、やはりカイトは部下思いで……と考えたあたりで、ルイは瞬時に顔を赤くした。

（朝起きるまで一緒……って……）

取り乱した自分に対してカイトはどこまでも優しくかった、と思いつく。自分はシャルが苦しんでいた時に何を、と思いつつ、思い出した出来事は頭を支配しルイの顔を火照らせる。

「ルイ様？ どうされました？」

そばにいたアイラが不思議そうに声をかけた事でルイはぱつと手を離れた。握っていたシャルの手を。

ぽすんとベッドに下ろされた手に慌てながらも、真っ赤になったルイを見てシャルまで顔を赤くし、カイトはそれを見て目を見開く。アイラとデュオはああ、と頭を抱え、傍観を決め込んでいたラトナは奥でにやりと笑った。

「な、なんでもないんです。ごめんなさい、シャルさん」

立ち上がり、アイラの後ろに隠れるように小さくなったルイは、それでも失礼のないようにシャルを見ていたものの赤い顔を隠しきれずおどおどとしていた。

打ちのめされたようなカイトはそれでもひきつった笑顔をなんとか張り続けていた。

午後になると昼食を終えたルイは緊張を顔に張り付け、ときどきと大きな扉の前にいた。

カイトはどこか落ち込んでいる風ではあるが、なんとかその横に立っている。デュオは時間がたつにつれて面白くなってきたのか、忍び笑いをし、アイラは男二人の様子にどこか呆れているようだった。

「……ルイさん、緊張しなくても、長のナギ様も神子のラン様もお優しい方ですから、大丈夫ですよ」

「うあ、はい、大丈夫です！」

カイトに促され、地の騎士がノックをし開いた扉にカイトに続きルイは恐る恐る足を踏み入れた。

「おお、フォルストレ殿、アオイ殿、お待ちしていた。どうぞ、こちらへ」

部屋へ入ると、昨日馬車を降りた時に見た自分の父より年上と思われる男性がいた。しかし今日は口元を布で覆っておらず、強い眼差しはそのままだがひげが口元を覆いその唇は優しそくに弧を描いている。

そして横には、これまたカイトの母親リルを思いださせるような優しそうな女性。茶色の髪には白髪が混じり、柔らかい緑色の服に身を包みおっとりとした横で胸の前に手を当てルイを見ると頭を下げた。

視線を少しだけ移動させると、部屋には他に数人の地の騎士、見覚えのある光の騎士、ラトナも控えていた。

「まずは、昨日の件について謝罪申し上げます」

「いえ、長、それは……」

「フォルストレ殿。我々は、待ち望んだ光の神子の到着、万全の体制でお迎えする為に元より騎士の数を増やしていた。その上で闇の民を侍らせていたのは、我々の失態なのだ」

さつと、幾人かの地の騎士が頭垂れるのが見えた。

ルイの中では、狙われたのは自分で、最近現れたばかりだと聞かされる人型の闇の民。仕方ないどころか、むしろ自分が悪いのではと思うのだが、どうにも自分の立場を考えると見えなかった。

昨日から気になっていたのだが、長は光の神子ルイ、そしてルイだけではなくどうやらカイトにも、同等……もしくは、言葉自体はそうではないものの目上の者に対するような姿勢をとる。

長なのだから騎士はむしろ部下に入るのではないかと思っていたのだが、カイトの立場は違うのだろうか。そして、自分も……とルイが考えつつ顔を上げると、目が合ったのは微笑む女性。

「紹介が遅くなりました、光の神子。これが、我が民の神子でございます」

視線に気づいた長が口を開き、女性がゆっくりと頭を下げる。

「アオイ様、地の神子ランと申します」

自分の母親、もしくは祖母に近い年齢の女性に頭を下げられ、ルイは慌てどうしようかと視線を彷徨わせ、恐る恐る同じように頭を下げる。

「ルイ・アオイと申します。どうぞよろしくお願い致します」

それを見て微笑むランに、ルイはどこか困ったような笑みを返した。

長と神子との挨拶を終えた後、テーブルを挟み向かい合って椅子に座り、お茶が振舞われた。初めは旅の……主に昨日の戦闘についての詳しい報告だった。ただ、どうやって倒したか、の部分だけはわかっていと言わんばかりに長が追求する事無く終え、ルイはそれを聞きながら首を傾げる。

そして話の結論は、ルイがここを出る時……王都に戻る時も危険を伴う旅になるという事だった。元より、馬車では敵に晒される時間が長くなるという事で馬での移動を選んだのに、それでもあれほどの戦闘になってしまったのだから、護衛の騎士達は頭を悩ませて

いた。

「して、フォルストレ殿。滞在予定は二週間程との事だったが、それはどこまで延長できようか」

「延長、ですか。王の考えでは、年を越す際は王都にいてもらいたいとの事でした」

「やはりそうか。年越しは大事な行事もあるからの……つまりそこで？」

「ええ、神子の存在を、年明け同時に」

そこで初めてその話を聞いたルイは少しだけ息を呑んだ。様子に気づいたカイトは優しく微笑みルイを見た後、それが、と長に向き直る。

「いや。実はな、今こちらに水の街の神子が訪れているのは聞いているとは思うのだが」

「ええ、我が隊の者にその尊きお力を」

「助かってよかったと思っている。それで、神子が戻る時……共に水の街に訪れてはどうかと思つてな。それなら護衛の数も多く、また王都から水の街へ向かうより、地の街からのほうが近い」

「……そうですね……次の予定地は風の予定でしたが。王に連絡を取ります」

どうやら王都に戻らず、続けて水の街へと移動する事になりそうだと会話で察して、ルイは緊張で手を握る。

実はルイは、加護を受けるという事が、一体どういった事をすればいいのか知らなかった。

一般にカイトや騎士達が加護を受けると、神子が加護を受けるのでは何かが違うらしい。そして、今光の神子は数年おらず、ルイが尋ねても答えてくれる人物はいなかったのだ。騎士達は、地の加護を受けるために一週間神殿に通い詰め祈りを捧げるそうなのだが。カイトやデュオ、長達が難しい話をする間、ルイはただ内容を理解しようとはするものの緊張に顔を強張らせたまま。

漸くルイの加護を受ける日取りの話になったのは、かれこれこの部屋に到着してから一時間もしてからだった。

「えっと、つまり……神殿に行かないとわからないと」

「申し訳ございません。神子の儀式に関しては、これ以上は申し上げられません」

先に体験しているであろうランの言葉は、こうだ。神子が神殿の最奥の部屋で祈りを捧げる。期間は、わからない……と、これだけ他にも何か知っている素振りはあるのだが、それを言おうとはしない。そして日取りは、水の街へ移動する可能性を考え二日後にでも、と早急だ。

そして、アイラは途中で席を外した。何でも、ルイが無事にダイヤモンドの魔力石を授かるまでの間、守護の力に長けたアイラはここで修行をするらしい。それが短い期間になりそうなのがなんとももったいないが、さっそくその為に数人の地の騎士と姿を消したのだ。

会議のような話し合いを終え、席を立ったルイはカイトに続き部屋を出ようとした時、ランに呼び止められる。近づいて小声で彼女がルイに伝えたのは、二日後の事だった。

「神子。神殿へは、神子が一番大切な方を一人、最奥までお連れ下さい」

そういつて微笑むランに、ルイは頭を下げわかりましたと頷くが、それはルイがいざ神殿を目の前にするまで頭を悩ませる原因となった。

気高き護りの町―13（後書き）

お気に入り登録、評価ありがとうございます。大変励みになります。

そろそろ甘甘を書けそうです…！

時刻はお茶の時間を過ぎた辺り、長との対談を終えカイトと部屋へ戻っていたルイは、ただ黙って窓の外を見ていた。

外は、雨。……ルイには久しぶりに見る雨だった。王都の、王城敷地内は特殊な結界が張っていて、雨すら通さないらしい。王城敷地内にあるフォルストレ家に世話になっているルイが雨をしばらく見ていないのも無理はなかった。

夕暮れにはまだ早いものの、厚く覆う雲のせいで外は薄暗い。

今の時間、アイラはまだ戻っておらず、デュオも光の騎士を纏める為に席を外していた。ルイの護衛の為にしているのはカイトのみで、今日はこの部屋で共に夜を過ごすのが同性のアイラなのかまた昨日と同じくカイトなのか、もしくは外に護衛を立ててルイ一人になるのかはわからなかったが、今部屋にいるのはカイトだけで、ルイは少しだけ緊張していた。

昨日はまったく気にしなかったのに、恋ではないかという意図を持ったアイラの言葉が頭から離れないせいでルイの緊張を煽る。

ただ、ぼんやりと見つめる窓の外の雨と、窓を叩く雨音にどこか安心して、ルイはただじっと外を見ることに集中した。

「……ルイさん」

名前を呼ばれて、振り向かないわけにもいかずルイはゆっくりとカイトに視線をずらした。

相変わらずカイトは優しそうな笑みを向けてくれているのに、どうにも緊張してしまう。

「雨は、珍しいですか？」

「こつちでは、見なかったから……雨は、好きです。雪も」

「地の街は最も降雨量が多い水の街に近い。雨も頻度が高く、地の街自体は豊かな緑に囲まれているんですよ」

こちらの町に来る時は意識を失っていたから、ルイは街の様子を外から見ていない。少し想像して、素敵な街ですね、と微笑む。

「カイトさん。外って、出たらいけませんか？」

「今日、ですか？ まあ、明日は少し忙しいかもしれませんが……」

「お買い物したいなって思っただんです。それに、雨綺麗だから」

「雨が綺麗、ですか」

そういうとカイトは読んでいた本を閉じ、テーブルに置くとルイの傍まで来て、その後ろに立った。大分身長差がある為、ルイの真後ろに立っていてもカイトは外の様子が見えるだろう。しかしルイは、緊張から少し身体を横にずらした。

「雪でしたら、水の街で見れるかもしれません。時期も丁度雪の季節ですし」

「やっぱりそのままここから移動になるんですか？」

「まだわかりません。が、恐らく」

カイトの声は頭上から降ってくる。少し緊張したが、ルイはカイトの声が好きだった。自分に向けられる彼の声はとても優しいものだったから。

「出ますか、外」

「え、いいんですか？」

「あまり遅くなるといけませんので、少しだけですが。確か長の屋敷を出てすぐはこの街で一番賑わう商店街があった筈ですから……何が欲しいんですか？」

「……あの、武器が欲しいんです」

ルイの言葉に、カイトは眉を寄せた。なぜ、と言葉にしようと口を開いたのに気づいて、ルイが慌てたようにカイトに向き直る。

「神子は、あまり戦闘に出ないのも、守護術が多いのも聞きました。でも、攻撃呪文を多く使う神子がいたのも、本で見ました」

「ええ、神子が前線に出て傷ついては、困ります。神子は一人なのです」

「でも……昨日みたいな時、私は……」

「今はまだ、仕方ありません。ですが、今後は神子も守護術を使い戦う事ができるんです。何も、武器を持つ必要はありません」

「持たなくてもいいって訳でもないですよ？ 私は、守りたい。お役に、立ちます。いざという時も何もできないのは嫌です」

「武器を持つという事は、どういう事がわかりますか」

カイトの声が、少しきつくなった事に気づきルイは怯んだ。しかし、そこで初めて負けじと相手を見返した。

「私は、お役に立つ為にここで努力する事を選びました。初めて必要としてくれた人たちに応えたいんです。今は、……何もできていないのも理解してありますが」

「……自分の為ではありませんか？」

「……自分の……？」

カイトが少し悲しそうに言った言葉が、自分の言葉に繋がるのかわからず、ルイは首を傾げた。

そして少しの逡巡の後、自分の為です、と呟く。

必要とされたのが嬉しかったから、頑張ろうと思った……正確に言うとう自分の為ではなかったのかもしれないが、ルイはそれに少なくとも救われたから、それでいいと判断して。

対し、カイトはルイの言葉が、まるで必要ならばこの世界の為に身を滅ぼしても厭わないという意味に感じ、複雑な心境だった。そして、カイトの読みは当たっているのだろう。ここに来て最初、利用されるとわかっていても頷いて、食事が違う事すら周りに気づかせず、危険な旅も承知し、身を投げ出してシャルを止めようと飛び出したルイ。彼女はまるで、人形だった。

ルイの心境は確かに変化しているのだろう。執着を見せなかった彼女が、昨日に続き強く意見を口にしたことは間違いない。ただ、やはり自分の欲を持っているようには見えなかった。

「……ラトナにいい武器屋を聞きましょう。ただし、ルイさん、……私はあなたがそれを使うような状況は、望みません」

そういつて離れたカイトに、ルイは少しだけ、寂しさを覚えた。

「この先……ああ、ここですね」

そういつてカイトに促されて、ルイは大きな傘の中からそつと外を覗き見た。

ラトナに武器屋の場所を聞き、カイトと外を出る時にラトナに渡されたのは一本の傘だった。

大きく、ルイが見知ったものとは多少形状が違うものの、木でできた傘は魔力石がはめ込まれており水を弾く。しかし、渡された一本では所謂相合傘をする形になり、ルイは先ほどの空気を背負ったままで重い足を動かす事になった。

傘を持ち隣を歩くカイトは終始周囲を気にしながら歩いているのがわかったが、ルイと目が合うことはなかった。それでも歩調はルイにあわせてくれるとわかっていて、申し訳なさが募る。ただ雨が傘にぶつかる音だけがルイの心を落ち着かせてくれた。

「いらつしゃいませー……お、騎士様ですか」

店に入ると現れたのは、いかにも働き盛りと言った中年の男だ。よく焼けた肌に、茶色の短い髪。カイトを見るとすぐに騎士と気づき、驚いたようにその濃い茶色の瞳を見開いて駆け寄ってきた。

「今日は、どのようなものをお探して」

「こちらの女性が使えそうな武器をいくつか見せていただきたい。

……できれば、希望は遠距離系のものを」

「カイトさん、遠距離って」

言葉にありありと前線に立たせたくないという気持ちににじみ出ている、ルイは困ったように上を見上げる。カイトは少し硬い表情で、無理にとは言いませんとだけ言った。

「はい、はい。遠距離ですと、やはり弓でしょうか。しかし、お嬢さんは随分とほっそりとした腕に指……弓ではお身体に負担をかけるかもしれませんね」

言いながら店主はうろろと狭い店内を見て周り、いくつか武器

を並べたものの、納得しない顔で首を傾げる。

「ルイさんは……腕力はあまりありませんでしたね」

カイトも結局選ぶことで腹を括ったのか、じっと武器を真剣に見つめながらルイの腕を見た。以前移動術などで共に稽古をしていた時に、ルイの腕力のなさはカイトがしっかりと見抜いている。というより、元から無理をするとすぐ熱を出していたルイは、筋肉が殆ど無かった。

武器を持つこともできないのかと落ち込み自分の腕を見つめたルイは、自分の考えの甘さを突きつけられた気がして少し目に涙を溜める。もちろん、零れることはなかったが。

考えても見ればさまざまな武器は腕力がなくては殆ど使えないようなものばかりだ。人並み以下しかないルイには、厳しいものがある。

「でしたら、ご自分の身を守る程度でよければ……そうですね、石武器はいいかですか。見たところ、お嬢さんも騎士か。魔力石を持つておいでだ。魔力を使えるのでは？」

「ええ。……そうですね、身を守る……石武器を見せてもらえますか」

店主とカイトの会話に出てくる「石武器」がわからずルイが顔を上げると、店主がすばやく何点か武器を並べ始める。

それはどれも小ぶりで、そして必ずと言っていい程存在を大きく示す宝石がはめ込まれていた。

「カイトさん、石武器って何ですか？」

「ああ、物理的な力ではなく、魔力を使って力を発揮する武器です。もちろん能力者以外は使うことができません。ただし、能力者でも魔法と違い行動が制限される点がありますから、魔法とまでは言えない、身を守る護身用の武器、と考えて下さい。小ぶりのものが多いのも特徴です」

カイトの説明に再び視線を武器に戻す。小刀、忍者の使う手裏剣やクナイのような物に、鞭や用途はわからないがリング状のものが

いくつか重なったものなどが置いてある。

護身用、というのは少しルイの希望とはずれているが、ルイは武器は武器、ないよりましだと思っていたのが事実なので、特に文句を言わずそれをしばらく眺め、リング状のものを指差すと店主にどう使うのかと尋ねた。

「これは捕縛武器ですね。敵に投げ、魔力を使ってそれを操り敵を縛り上げます。と言っても殺傷能力はないし拘束時間も短いので、足止め、もしくは逃げる時に使うものですね」

その後暫く他の武器の説明も聞いたルイは、捕縛武器と言われた五連のリングと、同じ石武器の小さな剣を選び、ポーチから自分のお金を取り出して渡した。少し前にルイが始めてもらった給金だ。

「カイトさん、ありがとうございます」

店を出てお礼を言うと、カイトはそこで漸く微笑む。

「遅くなってしまいましたね。急いで戻りましょう」

帰りも雨の音を楽しんだルイは、腕に五連の銀のリングをつけ、

腰に小剣を着け部屋に戻るとすぐ窓に張り付いた。

ここで漸く、ランに言われた神殿の最奥についてきてもらわなければならぬ「大切な人」についてどうすべきかルイは考える。

思いつくのは、誰よりもまずカイトだった。しかし、一番大切な人という言葉がなんとも恥ずかしくて、首を捻る。

アイラに頼むべきか。それとも、やはりカイトに頼むべきか……

悩んでいるルイの後ろで、食事の準備がされているのにも気づかず

ルイは外を眺め俯いていた。

「ルイ様、ルイ様？」

「んー……」

「ルイ様？」

「え！ あ、はい！ あれ、おかえりなさい、アイラさん」

「どうされましたの、ぼんやりなされて。お食事はこちらに運びま

したけれど……」

「あ、あれ、すみません、気づかなかった。えっと、私だけ、ですか」

「カイト様が、ルイ様はお疲れでしょうから、と部屋に。恐れながら、私の分まで、ですが」

「一緒に食べましょう、アイラさん」

いつものように和やかな会話を楽しみつつの、アイラとの食事はルイにとって心休まる時間となっていた。しかし、今日はどこか落ち着かない様子のルイに、アイラがいくら首を傾げて尋ねてもルイは苦笑してなんでもないというばかり。

その日、そのまま部屋にはアイラが共に寝る事になり、ルイはどこかカイトと一緒にでなくてよかったと安心する心と、やはり少し寂しい気持ちに葛藤しながら床につき、目を閉じる。

眠気は、まったく訪れなかった。

「まあ、ルイ様。すごい限ですわ!？」

朝一アイラにそんな事を言われ暖かなタオルと冷やしたタオルを交互に当てたルイは、自分以上に慌てているアイラに苦笑する。

しかし、こんな顔でカイトに会うのは嫌だなあとルイがため息をつく、アイラは心配そうに悩み事があるのかと尋ねてくれた。その行動が本当に友人なのだと思わせてくれ、ルイは微笑む。

「なんでもないんです。いろいろ、緊張して」

「無理はなさらないで。やはり、同室はカイト様のほうがよかったかもしれません」

「え」

「やっぱり、安心なさいますでしょう?」

いえ、今はちよつとある意味寝れません、とルイは思ったものの口には出さず苦笑して「アイラさんがいいです」とだけ言って話を終え、身支度を整えた。

その日は一日明日の準備に追われる予定だった。

朝から神殿に訪れる際に身につける服のサイズの調整だったり装飾具選びだったり、手順の説明だったり忙しい。

空いた時間をルイは、自分で気に入った果物を少しだけ持ってアイラとシャルの元を訪れたものだから、カイトとは夜に明日の予定の話をしただけで殆ど顔を合わせる事はなかった。

しかし、その日一日を通してルイの頭を占めるのはやはり明日の同行する人間の事。

朝、アイラも大切な友人であると再確認はしていたのだが、アイラを選ぶのかと言われるとどうしてもカイトが頭から離れない。幸い誰にも、誰を連れて行くのかと急かされる事はなかったのだが、そのせいで相手も決まらずとうとうルイは当日まで持ち越してしまっ

た。朝、ルイは金のラインがいくつか入った真っ白な長いローブを着せられ、大きなフードで殆ど顔を隠された。視界が危うい程なのだが、それが正装だと言われルイはしぶしぶ口を噤んだ。

髪はサイドに纏めて前に垂らされ、ラインと同じ金の髪がきらきらと輝くが、決して華美なものではなく、どこことなく高貴な雰囲気すらあるというのはアイラの言葉だ。

普段どおりにカイトに挨拶をし、共に旅をした光の騎士、カイトとデュオ、ラトナと、地の神子であるラン、そして数人の地の騎士と共に、長の屋敷を出る。神殿は、馬車に揺られて四時間程でたどり着いた。

カイトが言っていた通り、長の屋敷を離れて暫くすると、周囲は緑に囲まれ地の町がとても自然に囲まれた美しい街であるのが見て取れた。

景色に夢中になったルイはもちろん神殿に到着しても奥へ連れて行く相手を決めることが出来ずにいた。というよりは、決めかねて

現実逃避し、景色を見る行為に意図して意識を向けていたのだろう。どこかぐったりとしたようすで馬車から降りたルイに、カイトが心配したのは言うまでもない。カイトは馬車には乗らず馬で移動していた為、姿を現したルイが疲れきった顔をしていれば当然の事だった。

神殿内に入ると、茶色のロープをつけた神官と呼ばれる人たちにルイは案内され、すぐに広めの開けた場所にたどり着いた。騎士達は同じ部屋の少し離れた所に控えた。

ルイとラン、そして一人の神官だけが前に進み、祭壇のようなものに向かって神官が本を開き何事が唱え始めるのを、ランが膝を突き胸の前に両手を合わせたのでルイも真似てその時間を過ごす。

神殿に入る前に聞かされた話では、これは準備に過ぎず、そこそ本番はルイと、ルイが「大切な人」のみ奥の部屋に進み何かを受けるらしい。未だ明かされない内容に、ルイは煩い心臓を押さえつけるように胸の前で手を組んで神官の言葉を聞いていた。

実は、アイラが修行をすると聞いていたルイは、アイラがこの場にいなければ自分がカイトを選ぶのは当然の流れになるのでは、と考えたりもしたのだが、アイラは元よりルイの侍女。ここに付き添わない筈がなく、そしてアイラの修行は特に場所は関係なくできるらしい。馬車の中でも馬車に結界を張る事に集中していたようだし、修行は順調のようだ。

つまり、そんな事を考える程ルイの心中では既に選んでいるのはカイトだったという事だ。本人は気づく事なく、ただ選ぶのが気恥ずかしくて頭を悩ませていたようなのだが、それも空しく、時は来た。

「では、光の神子様、奥へ」

そっとランに囁かれて、おずおずと立ち上がりルイはランを仰ぎ見た。目が合った先の瞳は優しく微笑んでいる。

「お付のものは、どなたに？」

その声に、後ろに控えていたカイトを初め騎士達、アイラが首を傾げた。奥に進むのはルイ一人だと思っていたのだろう。

ああ、いきなりついてきて、と言われた者は、迷惑に思うだろうか、とルイが不安そうに視線を向けた先で、金の髪をさらりと揺らした青い瞳とかち合った。

「……、かいと、さん」

どこか、うわ言のようにルイが呟いた。言った後にはっとして口元を押さえ、瞬時に俯き頬を染める。

その様子を微笑んで見つめながら、ランはカイトを手招いた。

「この奥へ進むのは、神子ともう一人と決まっていますの。あなたが奥へ」

「そう、でしたか。わかりました」

不思議そうな表情をすぐさま真剣なものに戻し、カイトはゆっくりと俯くルイの傍にいくとその手を取った。

ルイがそつと顔を上げると、カイトは嬉しそうに微笑んでいた。

「知りませんでした、神子の場合は奥へ進むのは二人なんですね」

「あ、あの。ごめんなさい……何が、用事とかありましたか」

アイラや騎士達が控えている部屋から奥へと進み、窓のない真つ白な壁、ほこり一つない床の上を進んでいたルイは、部屋から遠ざかり二人きりになったとき急に声をかけてきたカイトの顔色を伺うように覗き見た。

しかしカイトの表情は微笑んだまま、優しそうな瞳をゆつくりとルイに向けて捉える。

「いいえ。私にはルイさんをお守りする事を差し置いて重要な事柄などありません。ですが、どうして隠していたのですか？ ルイさんは知っていたのでしょうか」

「えっと……秘密、です」

「秘密ですか。それでは、仕方ありませんね」

くすくすと笑うカイトに、ルイはほつと息を吐いた。選んだ理由を聞かれたら、答えられる自信がなくて。

しんとした廊下に、二人の足音とルイの腕にはめられた腕輪の音だけが響く。

カイトは石以外の武器を持っていない。神殿奥に入る前に、連れの間は武器の持ち込みは禁止と言われ、デュオに預けていた。ルイはなぜ自分だけは武器を所持する許可が下りたのかわからないが、昨日買ったばかりの武器の立てる音に少しだけ緊張して、足音に集中した。

「ここ、ですね。最奥は」

「……開けます」

暫く歩くと、金の取っ手の大きな扉が二人の前に現れる。開ける為にそつと手を伸ばしたルイは、その冷たさに緊張を煽られ唇を引

き締め、ぐつと力を乗せる。

ぎ、ぎ、と軋んだ音を立てて扉が開かれ、二人が中を覗き見る。部屋は左程広くはなく、薄暗い。少しの明かりでルイの視界に映りこんだのは、中央に祭壇、そしてそこにふわりと浮かび、光を発する一つの石。

「……ダイヤモンド……」

「入りましょう」

カイトに促されルイが室内に入る。続けてカイトが部屋に入り込んだ時、扉が音を立てて閉じた。退路を断たれたようで心細く思いながらルイは後ろを振り返り、しかし急に室内が明るくなった事ではっと視線を中央の祭壇に戻す。

「何!？」

「ダイヤモンドが……」

カイトが驚いてルイを庇うように前に出る。その反応で、カイト達が加護を受けに来た時と様子が違うのだと気づいたルイは不安を煽られ、自分の前に進み出たカイトの腕を思わずぎゅっと引き寄せる。

『……待ちわびた……』

「えっ!」

突然頭に響いた声に、ルイとカイトはぎょつとして視線を合わせた。声は間違いなく脳内で響き、しかし発しているのは間違いなく目の前にある石だとわかる。

「神の声……!」

カイトがかたかたと手を振るわせた。何が起きているのだらうと必死に考えを巡らせるルイの目の前で、ダイヤモンドは再びその光を強める。

『光の神子、我が試練……乗り越えて見せよ……!』
「ぐっ!」

突然強い光が辺りを埋め尽くし、ルイはカイトの腕を強く抱いた

まま目を閉じる。しかし、すぐに耳元でうめき声が聞こえ、ルイの腕の中からずるりとカイトの身体が離れた。

「え……っ！？ か、カイトさん！？」

漸く視界が戻った時、ルイの目に映されたのは衝撃的な光景だった。

ずるりと蠢く鳶がまるで大樹のように絡まり、つい先程まで自分の隣にいた筈のカイトの身体を巻き込んだまま締め上げ、ずるずるとその身体を取り込もうとしている。

カイトは武器は持っていないが、魔力石は何一つ手放してはいない。しかし、魔法を使おうともがいているようなのだが、その顔色は目に見えて青くなっていた。

「カイトさん！ 嘘、どうして！？」

「近寄るな！」

慌ててルイが傍に寄り鳶に触れた時、カイトが叫んだ。そのいつもとは違う乱暴な声に、ルイはさっと青くなる。状況は、思った以上に悪い。

鳶に少し触れたルイは、眩暈がする程の魔力を持っていかれたのだ。そして締め上げられたカイトを見て、カイトが魔法を使えないのはこの鳶のせいだとルイは気づいた。

「この鳶……魔力を吸ってる！？ や……やだどうして！！」

「ルイ……さ……逃げ……」

途切れ途切れにカイトが発した言葉に、ルイの目にじわりと涙が浮かんだ。

カイトを締め上げる鳶は既にカイトの右腕と首から上だけを残し体が見えない程に巻きついている。

逃げられる筈がなかった。

ルイがここにカイトを連れてきたのは、「一番大切な人を連れて」という指示があったからに他ならない。

「そうか……だから……っ」

自分が大切な人間を連れて行くことで、先ほどダイヤモンドが言

った「試練」が開始されるのだろう。

自分がカイトを選んだから、カイトが今苦しんでいる……そう考えたルイは、大きく嫌だと叫んだ。

「カイトさんを離して！！ 私が代わりにどんな試練でも受けるから！ やめてえええ！」

わっと叫んだルイは腕の昨日買ったばかりの捕縛武器全てに魔力を注ぎ、使い慣れないながらも鳶目掛けて投げつける。いくつか鳶を縛り上げるも、慣れない武器の扱いが上手くいくはずもなくカイトを縛り上げる鳶は緩みもしない。

すぐ腰の小剣を鞘から抜き、ルイは全力で鳶に切りかかった。その様子を見て、カイトが顔を歪めて「逃げて」と呟く。

「どうして！ どうして私じゃなくてカイトさんなの！？ ……カイトさんがいなくなるなんて嫌だああ！！」

とうとう涙を零してルイは叫んだ。振り上げた小剣を鳶の根元に突き刺し、ありったけの魔力をぶつける。爆発するように鳶の根元でルイが流し込んだ魔力が弾け、ルイの身体は吹き飛んで白い壁にぶつかり、そのまま床に叩きつけられた。

「かはっ！」

胸を強く打ち、ルイは息を吸い込む事が出来ず呻いた。涙で歪む視線の先で、焼けた鳶が見える。そして、自分と同じく床に倒れたカイトが見えた。

鳶から逃れ床に倒れたカイト。しかし、その上で蠢く鳶が、再びカイトの身体を取り込もうと動くのが見えたルイは、はっとしてポケットに手をつ込み強く握る。ポケットには、カイトに渡されていた伝達石と練習で使った結界の石が入っていたのを思い出し、ルイは最後の力を振り絞るように唇を噛んだ。

「カイトさんを守って……っ！」

ぱん、とカイトの胸の辺りで何かの石が光り、その周囲に結界が広がる。ずるずるとカイトに迫っていた鳶はその身体に触れる事ができずにはじけた。

「……ルイ、さ……？」

カイトは床に落ちた自分の周囲に自分が意図していない結界が張られ、首から提げていたルイと対の伝達石が淡く光っている事で自分の周りの結界がルイによるものと察し、慌ててルイの姿を探した。

「カイトさん……よかった……っ！」

カイトが顔を上げたのを確認したルイは、笑顔を見せた。

カイトに触れる事を諦めた薫が、ルイの身体を取り込み始めた、その状態で。

「ルイさん……！」

瞬く間にルイの身体を、ところどころ焼けた薫が取り囲んだ。それでもルイは全身に力を入れ、カイトの結界は解かず、どこか表情は安心したように微笑んでいた。

「カイトさん……逃げて、下さい。私は大丈夫……！」

巻き込む薫が、自分の身体から魔力を吸っているのがわかる。吐き気がしそうなその感覚に、ルイは笑みを見せ続けながら耐えた。

「駄目ですルイさん、結界を解いて！」

「いいの！ お願い逃げて……私ここで……っ」

ルイの言葉に、カイトは固まった。彼女は今何を言い出しているのだと、重たくて起き上がらない身体で何とか首を持ち上げルイを視界に捉える。

「私は私の大切な人を……守りたい！ 来て！」

ルイが強く叫ぶ。その時、散らばっていた捕縛武器がルイの声に反応したかのように動いた。

薫を絡めとり、ルイを締め上げていた薫をルイの武器が縛り上げる。

ルイの身体が開放され床に落ちたその時、薫は大きな光りに包まれ……消えた。

「消え……た……？」

『……神子の願い、しかと聞き届けた』

また、脳内に直接声が響き、ルイは頭を押さえた。既に限界まで魔力を使い果たしたルイは、激しい頭痛と共に響く声を必死に受け止める。

『尊き想いに気づく事を願う……我が分身を、光の子に』

ふつと身体を包んでいた重苦しい空気が解かれ、ルイは身体のが抜けて座り込んだ。周囲の光りは徐々に薄れ、また薄暗い空間となり落ち着いた。

「カイトさん……っ！」

身体が自由になった途端ルイは慌ててカイトに駆け寄る。しかし、身体が自由に動かない程魔力を使い尽くしたルイは、同じく重い身体を引きずっていたカイトの腕の中に崩れ落ちた。

「っ、ごめんなさ……っ、カイトさん、大丈夫ですか！？　どこかまだ痛みますか！？　ごめんなさい、ごめんなさい！　こんな事になるなんて、思わなくて私……っ！」

「落ち着いて、ルイさん。私は、大丈夫です」

座り込んだままルイを腕に抱き、カイトは腕の中のルイを抱き寄せてその肩に頭を預けた。カイト自身動く事が出来ず、その体勢のままルイに謝罪する。

「油断しました。まさか、こんな試練だったとは……護衛騎士失格です」

「そんな……違います！　私、見ました。薫が触れている時、カイトさんの持っている石、鈍った色に変わってました。ダイヤモンド様は、ここで私以外の魔力を封じていたんでしょう？」

ルイの言葉に、カイトは苦笑だけしてみせた。

それでも守れなかったのが悔しいといった様子で、ルイの腕に触れる。ルイの細い腕は怪我をしたのか、右腕が赤く腫れ上がっていた。

「あれを見てください、ルイさん」

そつと労わる様に右腕に触れながら、カイトが顔を上げた。つられてルイが顔を上げると、祭壇の上に初めから存在を主張していた石とは違う石がふわりと浮かんでいる。

「あれがルイさんに与えられたダイヤモンド……純粋な魔力石です」
ふらふらする身体を支えながら、ルイはゆっくりと祭壇に左手を伸ばした。そつと細やかな細工の石に触れると、それはルイの手に待っていたかのように収まり、淡く発していた光を吸い込んだ。

「これが……」

「成長型の魔力石……最高レベルですね」

「成長型？」

「魔力石にはいくつか種類があるのはアイラに習いましたね？ 能力が無いものでも日常で使える独立型の魔力石と、」

「えつと、能力者が自らの魔力を石に注ぎ込んで魔法を形にする具現型、石が能力者に力を分け与える形で威力を出す支援型？」

「そうです。それともう一つが、この成長型。魔力を注ぐ事で能力者の意のままにその力を具現し、更に力を分け与えて能力者を支え、尚且つ能力者の力に応じてどんどんその力を強くする石……魔力石の最高レベルです」

「……そんな凄い石……」

「現在この石を持つものは少ない。ダイヤモンドはラトナと地の神子、地の長と私だけです」

「え、カイトさんも持つてゐるんですか」

「私は……ええ、成長型を頂きました」

「……そうなんですか」

じつとカイトの顔を見つめて、ルイは呆けた声を出した。未だ自分の手にある石に実感がわかず、どこかぼんやりしたまま再び視線を落とし、手を握る。

その様子をカイトは微笑んで見つめ、しかしすぐに表情を険しい

ものに変えると、ルイの肩に手を回した。

「わっ」

ルイが僅かに悲鳴を上げたが、カイトはその自分より小さな身体を抱きこみ俯いた。ルイの右腕に気をつけながら、強く強く抱きしめる。

「無事で……よかった……」

「カイトさん、待つ……」

ぐっとカイトの胸に顔を押し付けられ、心地よい体温に包まれたルイは、慌てて離れようと抵抗した手を止め大人しく腕の中に納まった。

ふわりと甘い、落ち着く匂いが鼻腔を攪り、ルイは心地よさに目を細める。

しかし、その状態で暫く過ごしていたルイの耳に、不意に何かのまじないが聞こえて、ルイは身体を強張らせた。

どくどくとカイトに触れている部分から、身体に力が流れ込んでくるのがわかる。

「カイトさん、やめて！ カイトさんだつて魔力を吸われて……っ！」

「私の魔力はあれ位なら底を付いたりしません。確かに多少持つてかれた上に石を抑えられて多少なりダメージはありましたが、回復しました。それでも騎士隊長ですよ？」

魔力を殆ど使い切り疲労が激しいルイに、自らの魔力を注ぎ出したカイトはしかし、何かに堪えるように唇を噛んでいた。

それを苦痛に耐えているのだとルイは心配し、顔を覗き込んでやめたと呟く。

「私、大丈夫です。カイトさん、辛そうです、お願い」

「……少しだけ、我慢してくださいますか？」

カイトの声が酷く掠れて聞こえ、ルイは視線をカイトの瞳に映した。

カイトの海を思わせる青い瞳はゆらりと濡れて揺れ、どこか熱っ

ばい眼差してルイを見つめる。

「……がまん？」

「ええ、……お願いします」

ルイが呆然と呟くと、もう一度何かまじないを呟いたカイトがゆっくりと顔を近づけた。

「ふ、うつ、……！」

暖かく柔らかなものがルイの唇に触れ、思わず口を開いたルイははつきりと身体に熱い魔力が流れ込んでくるのを感じた。

柔らかく、軽く、それでも重く身体の中に溜まっていく魔力が、じんわりと身体を癒していく。

それ程わかりやすい身体の変化だったがしかし、ルイの神経は一点に集中したまま目を見開いていた。

甘く、熱く、柔らかく

唇に触れるそれは、優しくルイの下唇を啄ばんだ。

「……すみませんでした」

ルイにとっては永遠とも思える時間、ただしかしほんの数秒の時間が過ぎた時、カイトがそっと離れてルイの瞳を見つめる。

「……あなたがいなくなってしまうかと思った時、身体が冷え切りました。冷たくて息が出来なくて……苦しかった。……ルイさん、私を大切だと言ってくださったのは、本当ですか？」

カイトの指が呆然と固まるルイの髪を梳る。その甘い痺れにルイは視線を動かした。カイトの指は少し震えている。

「ルイさん、あなたが無事で、本当によかった……私は……私も、あなたが大切なんです」

その言葉がルイの胸にじわりと、ゆっくりと広がる。ルイはふに

やりと顔を歪めて、甘えたようにカイトの名を紡ぎ、一粒涙を零した。

気高き護りの町―15（後書き）

やっと今回でカイトが動いてくれました……！

長かった……

目指せ溺愛、甘です。今後ともよろしくお願い致します。

騎士の苦悩と神子の変化― 1

「神子がお戻りになられました！」

ルイとカイトが元来た道を戻り部屋に姿を現すと、予想より早い帰還だったせいもあるだろうが人は疎らだった。

ルイがきよろきよろと見回してみても、アイラの姿はない。恐らく修行の為席を外していたのだろう。

神官達はただ頭垂れているだけで、驚いてこちらに駆け寄ってきたのはラトナと地の神子の二人だけだった。

「随分と早いな！ 大丈夫だったのか…… おっと、姫さんが持つてるのは確かにダイヤモンドだ」

「お帰りなさいませ、光りの神子様」

やったな、と微笑んでくれるラトナに、柔らかい笑みで祝福してくれるラン。素直にルイは微笑みを返したが、ルイが探していたのは別の人物だ。

（うう、アイラさん、いない……っ！ 相談、したいのに……っ）

ルイの心の中はせつかくダイヤモンドを手にしたというのに、落ち着かずいっぱいいっぱいの状態だった。

カイトとの口付け。されたのだとわかった初めのうちは、どうしたことが落ち着いていたというのに……あの部屋を出てからというもの、ルイの脳裏にちらちらと浮かぶのは柔らかく暖かいあの感触。それは自分を助ける為、魔力を流し込む為だと頭で理解しているはずなのに、落ち着かない。アイラに相談したい、助けてほしいという気持ちだけが焦って視線を泳がせる。

「……姫さん？ どうした？ 何かあったのか？」

ルイの様子がおかしいと気づいたのは、正面にいるラトナだった。怪訝そうに屈んでルイに視線を合わせると、ルイが瞬時に顔を赤く

染め上げ、ぱつと一步下がると胸の前で手を組んだ。

その拍子に、掴むものを失ったカイトの腕が所在無さげに揺れ、落ちる。ルイと手を繋いでいたのだ。あの部屋から、ずっと。

「……騎士団長様、仲がよろしいよーで。見せ付けたいのか、おい」
「……そんなつもりではありませんよ」

ゆつくりとカイトとラトナの視線から逃げるように後ずさり視線を泳がせるルイを見ながら、カイトは苦笑交じりに答えると、すぐにラトナに今後の予定の変更を話し始めた。

と、神子の帰還を告げられた光の騎士とアイラが姿を見せる。漸く、ルイはほつとした笑顔を浮かべた。

その日は夜遅く、神殿に一泊となったが翌日すぐに地の長の屋敷へと戻る事になった。

夜のうちにルイは渡されていた魔法の基礎が書かれている本に隅々まで目を通す。いくらアイラが寝ましようと思っても、首を振るばかりだ。

「ルイ様、どうされましたの？ 何かお話があるとお伺いしておりますのに、やっぱりいいです、の後からずっと口を閉ざされて。何がありましたの？」

「う……いい、んです。よくなりました、ごめんなさい」

「ルイ様つてば。そんな顔の隅々にまで困ってます、と書いてありますのに」

「え、そんな顔してますか」

「ええ、そんな顔してます」

腰に手をあて、少し頬を膨らませたアイラにルイは眉尻を下げ、情けない表情で「あ」や「う」など頼りない言葉を続けた。

「ダイヤモンドを手に入れる試練がそんなにルイ様を困らせるものでしたの？ それともカイト様が無体をなさったとか」

アイラとしてはそちらの可能性は低いだろうと思いつつなとな

く口にした言葉に、ルイは肩を震わせて過敏に反応した。もちろん、見逃すアイラではない。

「え、まさか、え、カイト様が、ルイ様にあんなことやそんなことを!?」

「ええ!?　ち、違います!　魔力注ぐのに、キスされて、どうしようかと……」

「はあ!?　き、キス!?　カイト様が!」

ぼんぼんとアイラにつられて吐き出してしまったルイに、アイラは今度こそ目を見開いた。ルイははっとなって口を押さえるが、もう遅い。

アイラはしばらく驚きで目を見開いていたが、すぐににやりと笑みを零し、それで?　とルイに近寄った。

「ルイ様は、嫌で困っていらっしやいますの?」

「え!　違います」

「まあ!」

ルイの言葉にアイラは感激のため息を吐き、漸くですね、と呟いて頬に手を当て、わくわくとルイの前に椅子を引っ張りだし座り込んだ。

様子は完全に恋バナに花を咲かせようとする年相応の少女のものであり、しかしそういった事を経験したことの無いルイはアイラの様子に首を傾げつつ、染まった頬に手を添えた。

「それでルイ様、告白はどちらからされましたの?」

わくわくと尋ねるアイラに、ルイは告白、と繰り返した後、ゆっくりとアイラに視線を合わせて首を傾げた。

まるで何のことかわからないといった様子で、しばらくアイラの瞳を見つめた後、まさにそうだった。

「告白って、何をですか?」

「……え?　何って……ルイ様の気持ちですわ」

「気持ち?　ええっと……」

「カイト様と想いを通い合わせたものではありませんの?」

「へ、……ええ！？ まさか！」

ルイは慌てて首を振った。まさかと焦る様子のルイに、アイラはがつくりと肩を落とし違いましたの？ とルイを覗き込む。

「ち、違うんです。私そんなつもりじゃないし、カイトさんは、魔力を私にくれただけで……」

「それでも、まさかカイト様が女性にく……口付けをされるなんて、それこそルイ様を想えばこそかと……」

「違いますよ、だってカイトさんちゃんとする前に我慢して下さいねって……私が普通に魔力を分けるだけじゃ駄目なくらい、多分消耗していたんです。それでその……カイトさんが口移しで魔力を分けてくれて、でもそのやつぱり申し訳なくて……だって、何度考えてもキス、だし……」

「そ、それはそうですね。ですから……」

「だ、だから私、どうしようかと思って。カイトさん普通にしようとしてくれるのに、申し訳ないやら恥ずかしいやらで顔、見れないんです。どうしよう、アイラさん。カイトさん助けてくれたのに避けちゃうなんて私……」

「で、ですから……はあ。……カイト様の意気地無し」

アイラはしばし説得しようと思気込んだが、それはじぶんのするところではないと諦め、がつくりと項垂れた。ぽそりと最後にカイトについた悪態は、ルイには聞こえておらず聞き返される。

「……なんでもありませんわ。ええと、ルイ様。気にする必要はございませんわ。カイト様は、自業自得です」

「ええ？ でもカイトさんは助けてくれて……」

「いいんです。あんなへた……いえ、そんな中途半端なことなされる方が悪いですわ。ルイ様しばらく無視でもしてやればいいんですよ」

「あ、アイラさん？」

少し怒った様子のアイラに、ルイは訳がわからず、と言った様子でアイラを見つめている。

アイラはこつそりと、この方もどうしてこんなに鈍いのやら、とため息を吐いた。

一方、ルイたちが休む隣室に控えていたのはカイトとデュオだ。デュオが何か言いたそうにカイトを見つめているのに対し、カイトは視線を合わせずどこか苦い顔をしている。

「で、カイト。おまえ、神子に何したんだよ。明らかに避けられてただろ」

「……何でもありません」

これが、ここ数十分の会話の内容だ。

「いい加減にしろって、おまえ、あの神子があんな態度取るの、絶対なんがあるだろ。しかも、大幅の信頼を寄せているおまえに対して、だ。おまえが何かやらかしたに、十万ベル」

「……高額賭け過ぎだ、デュオ。……はあ。そんなの払うつもり、無いからな」

「やつぱ何かしたんだな。吐くのが遅い。そしてとつとと俺をすつきりさせる」

ほんと庶民の家が建つような金額を賭け、さあさあと詰め寄り自分の前に椅子を運んだ親友に対して、カイトはため息を吐いた。

「……神子の試練が」

「ああ」

「また、過酷で。ルイさんがあまりにも魔力を消費しすぎ、立つ事すら叶わない程で」

「そりやまた、神子の試練は随分過激だな。戦闘があつたとは聞いたが……俺達は祈るだけなのにな。で？」

そこで試練の内容にでも気が向いてくれればいいものを、先を促すデュオにカイトはもう一度ため息を吐いた。

「魔力を分け与える呪文じゃ、足りなかったんだ。それで」

「……おまえまさか、直接送り込んだのか？」

「……、ああ」

頷いたカイトに、デュオは啞然とした後片手で頭を抱えた。

「ばっかだなー」

「煩いな」

「どうせ気持ちも伝えずやったんだろ」

「……、どういうわけか、抑えられなかったんだよ。俺だって別に……」

「神子様が可愛すぎて？　ならとつと告白しろ、告白。言う前に手出してどうする」

「手を出したって……！　俺は魔力を、」

「やましい気持ちがあるからんな悩んだ顔してるんだろ？　ったく、おまえ何歳だよ、落ち着けて」

すっかり友同士の会話となり砕けたカイトに、デュオは呆れたように椅子に背を預ける。ばつが悪そうに目も閉じたカイトは、これだけ言ってもまだ悩むところがあるのか口も閉ざしたままだ。

「あーあ、恋人でもない男に魔力を分ける為だとはいえキスされて神子は混乱してるだろーなあ。魔力を分ける為だもんなあ？」

同じことを二度繰り返したデュオに、カイトは不審そうに漸く視線を合わせた。

そこでにやりと笑うデュオに、対しカイトは眉を顰める。

「何が言いたい？」

「別におまえが嫌で拒否してるわけじゃないだろ、神子は。キスした理由言ってやればいいだろ？」

「だから魔力を、」

「それだけだから混乱してるんだろ？　神子の事だ。カイトさんにキスさせちゃったでしょうーなんて悩んでるんじゃないのか？」

「……俺は、得しただけだと思うんだけど」

はあ、とため息をつき、片目を覆うように頭を支えたカイトに、デュオは少しだけ寂しそうな顔をした。

「……なあカイト、おまえの『立場』じゃ難しいかもしれないけどさ」

「………難しい、だろ。つまり彼女に神子だけではない重圧を押し付けるって事だ」

「神子の気持ちは、神子に聞け。決め付けるなよ、彼女はまだ何も知らないんだ。……王妃はあんな状態だし、王女はライトさんと婚約した。そうだろ？ 言い方は悪いが、おまえにとっていい方向に向いてる筈だ」

なだめるように言い募るデュオから、カイトは視線を外し何度目かわからないため息を吐いた。

しばらく俯いていたが、ゆるゆると視線を上げるとデュオに頼りない笑顔を見せる。

「彼女に好意があるのは認めます。とつくに自覚してますよ。それが抑えられないのもね。彼女は頼りなく見えるが強い……でもひどく不安定だ。まるで、張り切った弦のように。彼女を『うち』のごたごたに巻き込みたくはないんですよ」

「……それを理由に振られるのが嫌なだけなら、知らないぞ。彼女がシャルにとられてもな」

「そっちのほう、幸せかもしれませんがね、彼女が望むなら」

いつもの敬語に戻ってしまったカイトに、これ以上は説得は無理かと諦めたデュオは仕方なくベッドに身を投げた。

「わかつてるくせに……先延ばしにするなよ」

「……わかつてます。でも、もう少し……せめて彼女が不安定な原因を、もう少し掴むまでは……言えません。気持ちも、もちろん、『うちのことも』。抑えられていない事なんて、私が一番わかっています」

この会話にどんな意味があるのか、光りの神子であるルイにとってどれほど大切な会話だったのか。隣室にいるルイはそんな会話がされていたことすら知りもしないのだった。

翌日、ごとごとと揺られる馬車の中で、アイラとひたすら念じながら結界の修行をしていたルイだったが、ダイヤモンドの能力の違いに驚き続けていた。

もともと神子はそのような存在である、と聞かされてはいたが、今まで修行を重ねてなんとか魔法を使っていた状態だったというのに、ダイヤモンドの威力は凄まじい。あつという間に、並みの騎士より魔法力はぐんと上がってしまった。

足りないのは、むしろ経験だけとも言える。そしてそれを補う程の魔力。ダイヤモンドの属性である守護の術にかけては、今までの何倍も強固で範囲の広いものをかけられた。それを使えるのが神子という存在で、自分達なのだと横にいる地の神子ランに何度言われても、ルイは納得しがたい状態に少しだけ身が震えた。

しかし、万能ではないようで、神子の力を使った後は酷く体力が削られた。ラン曰く、毎日力を使い果たすまで魔力を行使し、回復させるを繰り返して自分の中の魔力容量を少しでも大きくする事と、具現する魔力の方法……つまり魔法の種類を増やすことが今後の修行内容になるだろう、との事だ。

馬車の中でああでもないこうでもない魔力を行使したルイは、長の家に到着する頃にはぐったりとし、避けていたカイトに抱きかかえられて長の屋敷へと戻る事になる。

合いそうになる視線を逸らし、おろおろと俯くルイにカイトは苦笑してその身体を愛しそうに腕に抱える。後ろからそれを見ていたアイラとデュオがため息をつく程の光景でありながら、空気が甘いものへと代わらないのが、二人の目には痛々しい。

「重症ですわね」

「カイトが今一歩踏み出さないからな。まったく、あのへたれめ」

「まあ、言い切りましたわね、すつきりしましたけど……でもまあ、仕方ないのかもしれないわ。ルイ様は、たぶん……王妃の存在を

知らないほうが幸せです」

「いずれ聞くのは確かにわかってるんだがな。……なぜ王女も王妃も、神子に姿を見せないのか」

ルイは神子。光の街、王都を守る唯一選ばれた、世界にとって大切な存在。王自らその神子に声をかけているというのに、王妃と王女に挨拶する機会すら与えられない事にルイが疑問を感じないのは、彼女がまだ神子という存在がこの世界にとってどのようなものか理解していないからだろ。

王と並び世界に必要な存在。何よりも守られる、そして世界を守る存在。

ルイがその事を理解する頃には、大きな波乱がある時なのかもしれない。

水の街へは、王都に戻らず続けて訪問する事が長の屋敷を訪れたルイたちに告げられた。王都の王から、許可する書状が届いたらしい。

水の神子が街へ戻る四日後にあわせて移動となるようで、ルイはそれまでの三日間をひたすらに修行に当てた。

朝から昼にかけて全力で魔力を使い、昼から少しの休憩を本を読んで過ごし、夕方からまた魔力が途切れるまで魔法を使い続け、夕食をとって就寝と、ルイ自らが望んだその三日間の修行でもともとほっそりとしていた彼女はさらにやつれたように見える。

心配したカイトがその手を止めた三日目の夜、ふらついたルイはどつさりとそのままカイトの腕の中で倒れ、意識を失った。

「随分追い込んでるな、神子様は」

「デユオ」

現れた親友に声をかけて、カイトは視線を腕の中に落とす。

血色の悪い肌、荒い息。苦しそうにしている彼女の細い指先は、カイトの胸元をぐっと掴んでいる。

「わかりやすいと思うんだけどな、神子の行動」

「は？」

「いや。それでさ、明日の隊列についてなんだが」

明日の出発、地の町へ王都から旅立った時とは隊列が変わり、光りの騎士と護衛の為地の騎士が同行し、神子二人を守りながら水の街へ出発する事になる。

何しろここに来るまでに高位の闇の民との戦闘でぼろぼろになっていた為、厳重な警護になる。

また、水の神子とルイは馬車での移動となり、今度は一番騎士であるカイトが何かあった場合に戦闘に加わる事が大前提として今日の昼の会議では決定していた。

「俺ら二番騎士以下がおまえの足元にも及ばないのが原因なのはわかってる……が、ルイ様はできればまたおまえと同じ馬上での移動のほうがいいと思うんだが」

「それは今日の会議で決定しているだろう？ 変えるつもりは……」

「そもそも水の神子だってラトナが連れて行けばいい。馬車はやっぱりどうかんがえても狙われやすいだろ、時間がかかりすぎる。せつかく地の町から直接水の町へ移動だつてのに、意味がない」

「だが、テルスとアQUALの間の道は殆ど両町の長の力が届いていて、結界から出るのは馬車でもほんの数時間の間だと地の長も……」

「その地の長から嫌な情報が入った。二日前から、町の周囲に闇の民が姿を見せなくなったらしい。あれほど結界の外は危険だつてのに、騎士達が巡回してもまったく、それこそねずみの一匹も闇の者の存在がない」

「……何？」

「これは、ルイ様がこの町に向かったときもあつた現象だそうだ。つまり」

「またこちらの情報が闇の者に流れているという事か」

「ああ、情報が漏れてる。俺達が結界を出たところを、また上位の闇の民に狙われる可能性が高い」

デュオの苦々しい言葉に、カイトが眉を寄せた。

カイトの視線の先ではルイが穏やかな息になり、すやすやと寝息を立てている。目を開く様子はない。

「どうせ狙われるなら馬車でもいいのかもしれないが……目の届くところにいたほうがいいと思うんだが、どうだ。神子がダイヤモンドを手にした今、おまえがこの前心配していた神子の力の暴発はないと思うんだが。それに……なぜ情報が流れているのか、気になる」

「……問者がいる可能性……？ いや、まさか。一般市民ならまだしも、神から与えられた本物の石を持った騎士や上層部には闇の民は乗り移れない」

「そうだ。この状況は明らかにおかしい。ディーネ様もルイ様も、おまえらの腕の中にいるほうが安全じゃないか？ 結界の外は。なんとって一番信頼できるからな」

「……ラトナのところにいきます」

さつと歩き出したカイトに、デュオは従い共に歩きだした。

神子に与えられた部屋を通りすぎラトナの部屋に向かったカイトに、デュオは首を傾げる。

「神子、連れて行くのか？」

「ええ、今魔力を分けるまじないをかけていますから。このまま眠っていても構いませんが、明日体力が落ちた状態で出発するのはまずいですからね」

「……キスでもしてやれば？」

からかったデュオに、カイトはにっこりと綺麗な笑顔を浮かべて次の瞬間数メートル後方に彼を吹き飛ばした。

「おはようございます、ルイ様」

翌朝目覚めたルイは、ふわりと笑顔でアイラに挨拶され、挨拶を

返しながらも首を傾げた。

「……あれ？ 私……」

「ルイ様、昨日は修行場で倒れたそうですわ。カイト様が運んでくださいました。あまり無理されないでくださいね？」

「……えっ」

慌てて記憶を辿ったルイは、自分がカイトに修行を止められたところで記憶を失っていることに気づき顔を青くした。

「は、運ばれたって……」

「はい、カイトさまにお姫様抱っこで」

につこりと笑うアイラの笑みは、明らかに何かを含んでいた。瞬時に青い顔を赤くしたルイは、その両頬を手の平で隠す。

「わわ、私の馬鹿……っ！」

「無理なさるからです。ついでに、カイト様が魔力を分け与えてくださったようです」

「え！！ ど、どうやつ……っ」

言いかけながらルイは慌てて身を起こし、そのまま体勢を崩してベッドから転がり落ちた。

どさどさとベッド脇の本が倒れ、アイラが覗き込んだ先で本につぶされながらも真っ赤なルイが両手足を投げ出しひっくり返っている。

「る、ルイ様!？」

「アイラ!？ ルイさん、何が……え？」

物音に驚いた隣室のカイトがばんと扉を開け部屋に飛び込み、アイラに手を伸ばされ助け起こされたルイと視線が絡む。

ルイは起きたばかりで、寝ている間にアイラに薄着に着替えさせられたらしく、薄い夜着を着ていた。ただ、アイラ一人ではワンピースを被せるのが精一杯だったようで、手足を露出している。

そのせいで落ちてきた本で腕に少しばかり怪我をしていたのだが、カイトはその曝け出され際どいところまでめくれあがったワンピース状の寝巻きから伸びた真っ白な細い足に視線を移動し、固まった。

カイトの視線を追ったルイは自分の足に視線を落とし、しばらくの沈黙。

「あ、あの、ルイさ、」

「ひゃー……!?!」

ぱつと立ち上がって裾を直したルイは、ベッドのシーツを手繰り寄せて身体に巻きつけ、涙目でカイトを僅かに睨んだ。

「カイトさん、出てって下さい!」

パン、と魔力がはじける音とともに、カイトの姿は部屋から消える。

ダイヤモンドを手に入れたルイの魔力は、高かった。

「……カイト、おまえ朝っぱらから何してんの」

「何でもありません……」

デュオが顔を出した時、真つ赤な顔を手で押さえるカイトが、廊下に投げだされていた。

「隊列の変更?」

準備を終え部屋から出たルイとアイラに、その情報が伝えられたのは水の神子ディーネと合流した時だった。

「なぜですか?」

ディーネのぴりりとした声に、ルイはおろおろと状況を見守った。ディーネは地の町に何かの用事で来ていたようで、ルイは殆ど顔を合わせずじまいで、先ほど漸く穏やかに挨拶を済ませたばかり。

突然の彼女の変化に、隊列の変更がよくない事なのだと慣れていないルイも気づき、緊張に唇を引き結ぶ。

「ただ念には念を、というだけです。馬車で移動する事になっていたルイさんとディーネ様、アイラには馬で移動していただく事になります」

「馬で？ わたくし、馬は苦手ですのに」

「安心しろ、おまえは俺の腕の中、だ」

「……安心できませんわ。あなた手つきがいやらしいんですもの」
ひよいと手を丸めたラトナに、ディーネは鋭い目つきで睨みつけた。

もしかと思ってルイが視線を動かすと、にっと笑ったアイラが視界に入る。

「えつと私は……」

「すみません、また私と移動していただく事になりますね」

苦笑したカイトを見てルイが真っ赤になると、その様子を見ていたディーネはにこりと笑みを二人に向けた。

「あらあら、殿方はみんな狼ですものねえ。ルイ様お気をつけ下さいな、カイト様だってその爽やかそうな笑顔で馬上の身動きできないルイ様にあんな事やそんな事をされるかもしれませんわ」

「ふえ」

「おいおいディーネそんな事いってお姫様が拒否したらどうすんだっつーかカイト笑顔が怖いぞ」

「人の足を馬上で撫で回すようなやつのは台詞は説得力ありませんわね」

「……ラトナ、君ディーネ様に何教えてるんだい？」

「待てカイト、俺が教えたわけじゃない！！」

「ぎゃあぎゃあ」と騒ぐ一行の横で、一人がおずおずと前にでて手を上げる。

ディーネの治療のおかげですっかり体調を戻した騎士、シャルだ。

「あの。僭越ながら、僕……私が神子様を馬上にてお守りしましうか」

「……シャル」

突然の申し出に、カイトはぴたりと行動を止めた。

「以前の怪我はディーネ様のおかげで完治いたしました。しかししばらくの休養で私が前線で戦う事は難しい。ただ、守護結界は衰え

ていない自信があります。隊長は今回戦闘が起きた場合前線に立たれると聞きました」

つまり、後方支援になるシャルの馬上にルイがいたほうが安全ではないか、という事だ。

その考えは当然カイトの頭にあり、そして言われたことで目を逸らしていたその言葉はカイトの中で最善の選択肢として理解はできていた。

その選択肢を排除していた理由はただ単に、自分の腕の中にいてほしかっただけなのだ。

「……そう、ですね」

視線を揺らがせたカイトだがしかし、ルイが困惑した表情でその様子を見ていた事には気づかなかった。

その様子を目の前にいたシャルはしっかりと見ていたが、口を閉ざした。

「それが最善ではあると思います」

「おいカイト」

後ろからデュオが、咎めるような声を上げる。しかしカイトは答えず、思案するように顎に手を当てて俯いた。

（わ、私シャルさんと馬に乗るの？）

背を向けたカイトの後ろで、ルイはおろおろと様子を見守る。

シャルが嫌だというわけではない。確かに緊張はするが、守られねば馬に乗れないルイは意見を言える立場ではないのだろう。

だがしかし、アイラの言葉を意識するわけではないが、ルイは自分の中でカイトが特別だという意識は自覚し始めていた。それが恋や愛だというのはわからないし、一致するのかと問われれば返事はないが、とにかくカイトの腕の中は安心するのだ。

突然のキスで動揺し視線を合わせられないのだって、恥ずかしいのと申し訳ないので一杯なだけで、カイトを嫌っての事ではない。

のにここ数日カイトと上手く会話できない事でルイは自身を責めていたし、今違う馬で進むというのはルイの不安を掻きたてた。

（で、できればカイトさんの馬がいいんだけどな……お話したいし）
どうしようかと悩む先で、カイトは「そうですね」と肯定を意思を示し、ルイは更に動揺した。

自分がカイト以外に守られて旅をする。まるで考えていなかった出来事に、頭が付いていかない。

しかも自分が後方に回るシャルの馬に乗るという事は、また守られるだけの位置にいるという事だ。今度戦闘があっても、ルイは前に出られない。

前に出る事を望んでいるわけではないが、ルイは何も出来ない思いをするつもりはなかった。

（私は……）

自分はカイトに対しどういう思いを抱いているのだろう、とルイはカイトの背を見つめた。

嫌いではない。傍にいたいと思う。安心する。親と疎遠だったルイは自身が始めて傍にいたいと願った人物である事は理解している。ただ、最近アイラがやたらと気にするような恋愛感情かどうかは、まったくわからない。

しかし、カイトがどう思っているのかひどく不安で、カイトが今シャルの馬上に、と思案する様子を見るのが辛い。

「ルイさんは、」

「あ、あの！」

カイトが次に口を開いたとき、ルイはたまらず声をあげていた。振り返ったカイトと、シャルの視線が突き刺さり、ルイは「あ」と呟いて俯く。

何て言えば、とぐるぐると混乱する頭で考えたルイは、考えも纏まらないうちに焦って口を開いた。

「わ、私カイトさんと一緒にいたら、迷惑になりますか」

「……え？」

驚いたような表情のカイトの視線が自分に向けられているのがわかって、ルイはますます混乱した。どうしよう、どうしようという言葉だけが頭を回り、次の言葉が出てこない。

「えっと」

「神子様は、私と一緒にでは不安ですか？」

「ち、違」

混乱に加えてシャルの声で、ルイは顔を真っ赤にした。

顔を上げたルイは、周囲の視線を全て自分が集めている事にととう爆発し、慌てて口を開く。

「違います、私がカイトさんといいたいんです」

言つてすぐ、あ、と口を押さえたがもう遅い。

視界に嬉しそうなアイラとうんうんと頷くデュオが見えて自分の言つたことを頭で反芻する。

あら、と口を押さえるディーネと、笑うラトナを見て自分が言つた言葉の意味に気が付いたときには、ルイはカイトに視線が移せずおろおろとシャルを見上げた。

「……そうですか」

シャルはそういつて微笑むと、失礼致しました、と礼をとり一歩下がった。

「ま、決まりだろ？ ほら、出発の準備、急ぐぞ」

ラトナの声で周囲が動きだし、ルイは傍に寄つたカイトに手を取られた。

視線は、合わせられなかったけれど

「ルイさん、行きましょう」

柔らかな声は、ルイを暖かく迎え入れてくれた。

騎士の苦悩と神子の変化―2（前書き）

今回流血、戦闘シーンがございますので苦手な方はご注意ください

騎士の苦悩と神子の変化―2

地の長、神子に挨拶を終え、以前と同じようにカイトに腕を引かれて馬に乗ったルイは緊張で唇を引き結ぶ。

どきどきと胸の内で跳ねる心臓は、緊張の為だと唇を噛みながら、ルイの神経は全て背に触れる暖かなカイトの胸、そして自分を守るように包む腕に注がれていた。

（緊張するなあ……）

どきどきしながら後ろをちらりと見上げれば、優しい微笑みが向けられる。むず痒いような感情を持て余し、ルイはむうとすこし唇を尖らせて前を向いた。

「ルイさん？」

「……カイトさんなんでそんな綺麗なんですか？」

「……はっ！？」

再び見上げるルイの視線に、カイトは驚いて視線を合わせる。ルイの頬は少しばかり赤く染まり、唇を尖らせて上目遣いにカイトを見上げるルイに、今度はカイトが心臓を高鳴らせた。

「……ねえデュオ様。あそこのバカップルはいつまで見つめ合っていると思います？」

「……さあ、ほつといたら永遠じゃないか？」

そんな会話が後ろでなされていたとは露知らず。

旅は順調だった。

今回は地の町と水の町が親密で行き来が多いため結界の範囲が広く、結界の外に出る時間はほんの少し。警戒はしているものの、や

はり街中の馬での移動は大分楽なものとなる。

暗くなれば予定していた宿で休息を取る事ができるし、食事も小さな食堂や飲食店で食べる事ができる。何より、地の町は緑が多く、天気の良い日は景色を楽しむ事もできた。

「この辺りで少し休憩にしましょうか」

予定通りの行程で進み、その日は森の広がる場所で一度休息を取る。ルイはカイトに馬から下ろしてもらいアイラの所に走り寄ると、手を取った。

「では行つて参りますわ」

「行つて来ますカイトさん！」

この辺りは珍しい花や可愛い動物が多いと聞き、ルイが休憩になったら散歩に行きたいとカイトに頼んでいたのだ。

もちろん一人では行かせられないが、騎士達はこの後結界を抜ける数時間の隊列確認、そして休むという水の神子の警護に当たる為、ルイの護衛に抜擢されたのはめきめきと守護魔法の力を伸ばしているアイラ。

二人はうきうきと手を繋いだまま周囲の景色に感嘆の声を漏らしながら森を散策する。

桃色に黄色、そしてルイには少し珍しく見える淡い水色や緑の花に視線は釘付けになり、そして風にゆれるとちりんと鈴のような音がする実でルイははしゃぐ。

「すごい！ いろんな植物があるんですね！」

「あ、ルイ様。あちらにいるのはラビですわ」

「ラビ？」

ルイが視線を送った先にいたのは、桃色の毛に長い耳、ぴよこんと跳ねるそれは、毛色は珍しいもののルイの知るうさぎに似ていて、ルイは可愛いと胸の前で手を組んだ。

「うさぎさんだ！」

「うさぎ、ですか？ ルイ様の世界にも？」

「似ているのが、いました。えっと、ちょっと色が違うけど」

あんな花のような桃色のうさぎは見たことがないかもしれない、とルイは驚かせないようにしながらそっと近づく。ラビはルイをじっと見つめると、自ら近寄ってきた。

「わ、寄ってきた。可愛い！」

「神子は動物にも植物にも好かれると聞いた事がありますわ。纏う空気が違うとか」

「うさぎさん触るなんて初めて。うわあ、可愛いなあ、ふかふか」
ひとしきりうさぎや花と戯れたルイは、アイラに言われて少し残念に思いながらも来た道に戻ろうと立ち上がる。その時。

「キャンキャン！」

「うわあ！ 助けてくれ！」

突然聞こえた悲痛な叫び声に、ルイとアイラは顔を見合わせた。どう聞いても助けを求める男の声。そして、ぱん、と何かはじけるような音がする。

「……アイラさん」

「魔法、ですわね、この感じ」

ひしひしとルイとアイラは先ほどまでは感じなかった空気を感じた。魔力を使う、そしてそれがはじける、まるで戦闘時のような感覚。

「ルイ様、カイト様達を呼びに戻りましょう」

「そんな、間に合わないかもしれない。カイトさん、呼びます」

ルイはそう言うのとポケットから伝達石を取り出し、ぐっと握る。そのまま手を握り締めて、音と魔力を感じる方にルイが走り出し、アイラも慌ててそれを追った。

「ルイ様！ いけませんわ、何かありましたら！」

「駄目だよ！ この魔力、何か暗い感じがする。攻撃を受けてる人、

危ない！」

近づく度に聞こえる魔力の音。確実に誰か魔法使いが悪意を持って使っていると、ルイはその身で感じていた。

そして走る二人の前に、どつと音を立てて何かが落ちてきた。

白い毛にとろどろ血を滲ませて呼吸も荒く腹部を上下させる空から落ちてきた塊。

「……犬？」

「アルカライトの子供ですわ！ 誰がこんな酷い事を！」

アルカライトといわれた犬の子供はまだ小さく、弱々しく前足を動かし顔を必死に一点に向けていた。そこにいるのは

「人ですわ！」

「大丈夫ですか！？」

同じく白い、小型の犬を抱きかかえた初老の男が足から血を流しそこにいた。

よく見ると全身が細かい傷だらけで、腕を押さえている。

「っ、お嬢さん達ここから逃げ……っ！」

「ああー……可愛い獲物、増えたじゃん？」

ぞつとする声が聞こえて、ルイとアイラは傷だらけの男の横で、震えた。

しかし瞬時に危険と理解したアイラが強力な守護壁を初老の男と自分達の周りに張り巡らす。

「あれえー？ そっちの子、魔法使えるんだ。なあんだ……でもいつまで持つかなあ？」

そう言つて男がにたりと笑う。まだ若く見えるその男は茶色の髪で片目が隠れ、しかし覗く片方の目はゆらゆらと揺れて焦点が定まらない。

男が手を上げた。

「行くよおー…… ロックアタック！」

瞬時に結界の周囲の地面が盛り上がり、鋭い刃となって結界にぶつかり始める。

「つく、」

アイラは少し息を詰めたものの、すぐに余裕の表情を取り戻しその攻撃を難なく耐える。

直撃していたら、確実に怪我をしていた。

そう、怪我を。刃は全て、足や腕等を狙っている。

「何て…… 人ですの…… っ！」

攻撃の惨さにアイラが顔を顰めたのと同時に、男も顔を顰めた。

「何…… 余裕そうじゃん？ おつかしいなあ、俺の攻撃耐えるなんて、あんたそこらの魔法使いじゃないね？」

鋭い目つきになる男に、アイラは少しだけ顔色を悪くした。ルイもそうだ。それだけの気味悪さが、男にはあった。

（カイト…… さん…… っ！）

握ったままの手を、そつと背に隠してルイは祈る。

ルイが戦って勝てる相手なのか、わからない。アイラは守護壁を張るので精一杯だ。

相手が本気でないのは見てすぐわかる事だった。実践が初となるルイは二の足を踏んでしまう。

そして、アイラも危険な事をルイにさせるわけには行かず、守護壁だけはカイト達が来るまで持たせようと唇を噛んだ。

しかし早く手当てをしなければ、初老の男はまずい事になるかもしれない。出血が、ひどかった。

「もうちょっと…… 本気出さないと駄目かなあ？」

男がまた、にたりと笑う。手を振り上げたその瞬間に、背後の木がずるりと枝を伸ばした。

「なっ！」

結界を囲むようにぐるぐると囲むと、締め出す。結界は揺らぐ事はなかったが、続けて岩の槍が無数に出現し周囲を飛び交った。

「どうしてこんな使い手が……こんな野放しに……っ！」

アイラは青ざめた。話には聞くが、自分が世間で言う「悪の魔法使い」というものに会った事はない。

魔法を使える者は、生まれた時から管理され教育を受ける。素質がないものでも専用の石を使えば魔法は使えるが、魔力の桁がそもそも違うのだから、徹底的に一般の人間を傷つけないように教え込まれるのだ。

稀に現れるこうした悪い術を使う人間というのは、騎士や兵によって拘束され処罰を受ける。

また、ルイも唇を震わせていた。この世界に来て、大切にされていたルイはこんな魔法の使い方をする人間を知らなかったのだ。

以前王都の街で拘束されたことはあるが、あの時は魔法は使われなかった。

自分の敵は結界の外にいる闇の民だけだと思い込んでいたのだ。

怖いと

助かりたいと

ルイは願った。思い浮かぶアイラとの日々の生活や、デュオやラトナ達の顔。

そしてカイトの優しい笑顔。

無気力だったルイの、初めての強い生への願い。

「やるねえおねーちゃん！でもコレはどうかなあ？」

男が更に攻撃を激しくした。がんがんとぶつかる岩の礫にアイラ

はまだ耐えている。

アイラの守護壁は完璧だった。

それなのに……

「ルイ様!!」

ルイはふとあるものを見た瞬間に、自ら木の枝を避け結界を抜け出した。ひょいと身軽に体を翻すと、ずるりと追ってくる木の枝を小剣で叩き落とし、ルイが向かった先には……アルカライトの、子犬の範囲の広がりすぎた攻撃に、少し離れた場所にいたアルカライトの子犬が、危険に晒されていたのだ。

飛び出したルイはすぐさま子犬を抱え周囲に薄い守護壁を張ると同時に、子犬に自らの魔力を注いだ。簡単にしか知らない、弱い弱い回復魔法。

「もう大丈夫だからね」

「キュウン」

犬は少しだけ目を開いて、弱々しい声を上げた。
守護壁のおかげで石の礫はルイと子犬に当たらない。

しかし。

「おねーちゃん、自ら出てきてくれてありがとお」

楽しそうな声が耳元で聞こえる。

回復魔法を使う為に張った、石礫だけを遮っていた薄い結界。

その守護結界をいとも簡単に破り、男がルイの胸倉を掴みあげた。

「っああ!」

「わお、超可愛いじゃん。これなら殺す前に楽しませてもらうか」

男は下卑た薄笑いを浮かべて、ルイの顔に自らの顔を近づける。

アイラが顔面蒼白で叫んだ。

「ルイさまあああ!」

騎士の苦悩と神子の変化―3（前書き）

暴力的な表現がございます。ご注意ください。

騎士の苦悩と神子の変化―3

「おやめなさい！ ルイ様に触れる事は許しませんわ！」

「じゃあなんだい、キミはその結界を解く？ そのじじい見捨てる？」

今アイラがルイを助けに動くという事は、怪我人を守っている結界を解くという事になる。

男はそれをわかっていてにやりと笑い、胸元を掴みあげて持ち上げたルイを地面に投げ捨てるように落とし、喚くアイラの前でルイの上に覆いかぶさった。

あつという間に手を纏めて片手で押さえられ、ルイはひっと息を飲む。

ルイはパニックになっていた。既に自身を守るための魔法は、頭から抜け落ちてしまっていた。

彼女はこの世界にくるまで、魔法に触れたことすらなかったのだから当然といえば当然だった。

「やめ……っ！ 離して！」

暴れるルイの足を自らの足で押さえつけ、男は面倒くさそうに舌打ちするとパンとルイの頬を叩く。

「っ！」

「ルイ様……！」

アイラの集中力が、途切れた。途端、囲んでいた木の枝がぐるりと倒れこんでいた初老の男とアイラを縛り上げる。

「あんたさあ、そこで見てなよ、この子やられんの」

「ルイ様あああつ……！」

にやにやと笑った男は屈みこみ、ルイの首筋に顔を埋める。ねつとりと触れた舌に、ルイは歯をぎりぎりとしめした。

（いやだ……っ！）

ルイの手の中には、未だ握られたままの伝達石。それが、淡く、光る。

首筋に感じる痛みに耐えるように歯を噛んだまま、ルイは何も見たくない顔で横に背ける。

男の手がルイの胸に触れ、男が笑んだ。

その時。

「何か申し開きはあるか？ もっとも、聞きはしないが」

一瞬。ほんの一瞬で現れたカイトが、男をルイから引き離しその体を金に輝く光で縛り上げ、首に手をかけていた。

周囲に浮かぶばちと雷を纏う光の玉。それがほぼ一秒毎に増えていき、カイトは静かに魔力を高め続ける。

その表情はルイがこれまでに一度も見ることがない程冷え切っており、普段柔らかくルイを見つめる眼差しは鋭く見るものを怯えさせるに十分なものだった。

声も普段より数段低く、ルイは震える身体を押さえつけながら、はつと息を吐く。

「カイトさん！」

「ルイさんに何をしました？ 私はあなたを許せん……騎士、カイト・フォルストレの名においてここに我が魔力を開放します」
「ぐっ」

男が呻く。ぎりぎりと光りが体を縛り上げ、皮膚が変色する。

「つイト、フォルス……っなんでこいつがここに……っ」

「おいカイト、そんなに魔力使うな。そいつはこっちの方で預かるから、姫さん助けてやれ」

ぱつと姿を見せたのは、ラトナ。デュオも焦り縛り上げられていたアイラと傷だらけの男を救助する。

「しかし……っ」

カイトは何か言いたげに口を開いたが、ちらりと視線をルイに移

動させるとそのまま縛り上げている男をドンと突き放しラトナに任せ、未だ震えているルイの傍に寄ると優しく抱き起こす。

「ルイさん、もう大丈夫です。落ち着いて」

「カイト、さん、すみません……っ！」

「謝罪など、ルイさんがする必要はありません。どこか痛みますか？ ……っ、これは」

カイトはルイの首筋に指を伸ばし、眉を顰め、唇を噛んだ。

ルイの白く細い首筋に一つの赤い痕。

カイトの胸の内に激しい炎が燃え上がる。怒り、嫉妬、己への叱咤。

「もつと早く駆けつけていれば……いえ、護衛騎士である私が傍を離れたりしていたから……」

「私が散歩したいって無理言っただんです。それに守ってくれたアイラさんの結界、自分で抜けちゃって。だから私が悪いんです。本当にごめんなさい……っ」

カイトの腕の中に納まったルイが喚くようにそう続ける。アイラは悪くない、それを言いたいのだろう。

「キュウン」

その時足を振るわせた小さな犬が、ルイの横までふらふらと歩いて近寄った。

犬の周りには、強固な結界と回復魔法が漂う。

「……ルイさん、この子犬を助けるのに全力を注ぎましたね？」

「……、助けたかったの」

ルイは自分に魔法を使う事は忘れていたが、子犬を守りたいという意思は守り通したらしくその結界は揺らぎない。

近寄った子犬にそつと腕をルイが伸ばすと、子犬はぺろりとその指を舐めた。

ルイの指先はまだ震えていた。それを必死で止めようと舐める子犬。

「デイーネ様にアイラと共に捕らわれていた方とアルカライトの回

復をお願いしましょう。我々の回復力では、特に男性の回復に時間がかかってしまいます」

そういうとカイトはルイの様子を伺いながら子犬を抱き上げるとルイの腕の中に下ろし、自分はすつとルイを横抱きに抱き上げた。

「ひゃ」

「子犬を落とさないで下さいね。馬の場所までもどりましょう。水の神子がお待ちです」

「そういえばディーネさんの護衛……っ」

「大丈夫です、私とデュオ、ラトナ以外は全員残っていますから。ラトナは初めからよくない魔力の波動がするとデュオと探索に出ていたんです。ルイさんの伝達石からよくない波動を感じたので、私も後に続きました」

「……本当にごめんなさい」

「無事でよかった……ルイさん、私はあなたがいなければ……」

カイトは言葉を続けながら、悔しそうに眉を寄せた。視線は、ルイの首筋を見つめている。

「つく、首、怪我してますか？ 噛まれたみたいで、その」

「……いえ」

カイトは少し息を飲むと、ゆるりと首を振る。

ルイが視線を移動させると、いつの間にか気を失ったのかアイラがデュオに抱えられ、ルイが腕に抱くアルカライトの子犬より少し大きな白い犬と初老の男性がラトナに魔力を注がれているようだ。その横に、拘束されたまま頭をだらりとさせているルイたちを襲った男がいくつもある雷の玉に囲まれるように宙に浮かんでいる。

その雷と光の拘束を見て、ルイはカイトの魔力だと悟った。カイトは腕の中にいるルイにも魔力を注いでいる。

いくつもの魔法の同時使用、そして瞬速の速さの攻撃魔法に拘束術、これがカイトのほんの一部の実力なのだろうと推測して、ルイは少しだけ震えた。

これだけの能力者に守られる自分に。

凄まじいプレッシャーを感じてしまう。

「クウン」

ルイの指先を舐めながら、子犬が心配そうにルイを覗き込んだ。

休憩地点であった馬の場所に帰ると、すぐさま水の神子ディーネはデュオと数人の騎士に連れられ初老の男の救出へと向かった。

ルイとアイラ、アルカライトの子供は残った水の騎士に回復魔法を施してもらい、ルイはしきりに謝るアイラに首を振りながらカイトの腕の中で魔力を注がれている。

アイラは何も悪くない。結界の中を抜け出したのは自分なのだ。

「あの、この子犬、アルカライトって言うんですよね？」

「ええ、そうですわルイ様。珍しく動物の中でもたまに魔力を使うものが現れるので、軍犬としても大切にされておりますの」

「わあ、すごいんだね、いい子。私を励ましてくれているの？」

ルイは子犬の頭を撫でながら笑う。カイトはその様子を見つめながら、ルイを離そうとはしなかった。

まもなく戻った水の神子、ラトナ、デュオと怪我をした男性とアルカライトの犬を連れて、ルイ達は予定を変え地の町テルスの結界内ぎりぎりにある宿で今日は休む事になった。

突然の大量の客に驚きながらも丁寧案内してくれた宿の主人に連れられてルイが入った部屋だけ、シングルのベッドが一つだけ置かれた個室。

アイラと他数人の女性騎士が同室で、ラトナの水の神子が同室。他は数人ずつで少しの部屋に散るらしい。

ルイについていたのは……カイトだ。

「今宵私と同室になります。申し訳ありません」

カイトがさらりと、事務的に言葉を吐いた。

いつもと違うカイトの声音に、ルイは首を傾げつつも頷く。

それはカイトへの信頼。そして、未だ恋に気づけない感情の幼いルイの無邪気な返答に、カイトは少しだけ眉を顰めた。

ルイは、男を知らなすぎるのだ。

食事と入浴を手早く済ませたルイは、まるで当然のようにソファのない小さな個室でベッドの端に身体を横たえた。

「カイトさん、寝ないんですか？」

躊躇うカイトに、ルイはきよとした様子でカイトを大きな瞳で見つめる。

カイトは、唇を噛んだ。

「ルイ、さんは……っ」

「え？」

ルイは目を見開いた。自分を押さえ込むようにカイトがルイの首を両手で押さえ、覆いかぶさっている。

「ルイさん、私は男です」

「え？ えっと」

わかりきっている事を言うカイトに、ルイは首を傾げた。その手に昼間のような震えはない。

「他の男にあなたを渡せません。意味、わかりますか？」

「……カイト、さん？」

漸くルイはカイトの様子のおかしさに、不安そうに顔を歪めた。

カイトは泣きそうな表情でルイを見つめる。

「私は……あなたが」

苦しそうに、呻くようにカイトは呟くと、そっとルイの首筋に顔を埋めた。

「んっ」

昼に痛みを感じた場所と同じところに、カイトの吐息が触れる。熱い。

ルイは熱さに身悶えた。

とつくに首の赤い痕はルイがそれを確認する前に水の騎士の魔法によって消されていた。

その場所が、ちくりと痛む。

新たな、赤い花が咲く。

「は、あ、カイトさん……っ」

濡れた感触がルイの首筋を伝う。

それとは違う何かが、ぽたりとルイの頬を濡らした。

「私は…… っ俺はあなたの前では騎士でいられない。ただの男だ」

「好きなんです、ルイさん」

ふっとルイの耳朵を吐息がくすぐる。

「好きなんだ、ルイ」

小さく呟くような声は、しっかりとルイの耳に届いた。

騎士の苦悩と神子の変化―4

ルイの頬を伝う雫が、輪郭をなぞってぼたりとシートに落ちた。ルイは大きな緑の瞳を見開いて、呆然と口を薄く開けたまま目の前の海のような青い瞳から零れる雫を視線で辿った。

好き

好き……？

「カイトさんが、私を……え……？」

好き。幾度となく、アイラとの会話で出ていた言葉。

でもまさか、自分が他人からその言葉を貰えると考えてもいなかったルイは、ただ事態を飲み込めず瞬きをした。

カイトは確かに自分を大切にしてくれていたと思う。

でもそれは神子としてで、ルイをではなくて……そう考えたルイは、ちくりと胸が痛むのを感じた。

おかしい。私は神子としてでもいいから、誰かに必要にされるのが嬉しくて神子として努力していた筈だと自問自答してみても、胸の痛みは増すばかり。

カイトが必要としてるのは、私ではなく神子である、と考えるのが辛い。

その気持ちは……カイト限定なのだろうか？　それが好きと言う事だろうか？　と、混乱した頭でルイは考える。

「あなたが神子として努力し、役に立ちたいと願っているのは知っ

ています。そんな大変な時に言うべきではないとわかっているんです。でも、抑えられない」

カイトが呻くように言葉を続ける。ルイの耳を擦る低い声は、微かにかすれていて、ルイの心臓がどくりと跳ねた。

「好きなんです。自分は二の次で危なっかしくて、みんなの為にと頑張つて、常に何かを背負っているあなたを守りたいと思った。あなたの笑顔を見た時思っただけです。私がこの笑顔を守りたい。いつもどこか寂しそうにしているあなたに安息を与えたいと本気で思ってしまったんです。大切なんです」

「カイト、さん、私……」

「わかっています。今そんな事を考える暇なんてないって。ですが少しでもいいです。私を男として見てください。あなたの傍に男としていたい。騎士としてではなく、一人の男としてあなたを守りたい。あなたに私も必要とされたいんです」

ルイの瞳に、自然に涙が溜まって零れ落ちた。

必要なのは神子の自分ではなくて、ルイ自身だといわれているのだと理解して、何かが溢れてしまった。

それはルイが言われた事のない言葉だった。

愛を知らない幼い彼女に初めて注がれた愛は、ルイの孤独と寂しさで埋まっていた心に暖かな熱を与えた。

（おまえなんかっって言われてた。努力すればいつかきつと自分を見てもらえる……なんて、そうじゃ、ないんだってもう諦めてたのに……）

いつの間にか両手の拘束はなくなっていて、そつとカイトの大きな手のひらが、ルイの目じりから溢れて伝う涙を辿ると、頬を包む。「答えは今、いりません。ただどうか嫌でなければ、もう一度触れさせてください。騎士としてではない、男の俺がどういった人間なのか知ってほしい」

カイトの指が、ルイの唇をなぞった。

「俺は……ずるいな。ルイ、男って怖い生き物なんだ。だから、今日の光景はもう見たくない。耐えられない」
そつと。

ルイの唇に、カイトの唇が重なった。

二度目のキスは魔力を注ぐ為にされた前回とは違って、何度も何度も角度を変えて、重ねられる唇から確かに感じる熱を、ルイは心地よく感じた。

心臓はカイトに聞こえやしないかと焦る程高鳴るのに、嫌ではなくて、でもその気持ちがい体何なのか感情の幼いルイにはまだ理解できていなかったけれど。

やわらかな唇がルイの下唇を啄ばむように数度触れた後、名残惜しそうに離れる。

「好きだ、ルイ」

ぎゅっとカイトの腕が背に回って、ルイの身体を抱きしめる。

ルイはカイトの背に手を回した。ただ、ただ溢れてくる涙をとめる事ができずに声を上げた。

「カイ、と、さん……っ」

呼び捨てにされた名前が、カイトとの距離が近くなった気がしてルイの頭で何度も、カイトの低い柔らかい声で反芻されて、ルイの思考を支配する。

そのまま、カイトの温かい胸の中でルイは意識を手放した。

「え……そん、な」

次の日。部屋から出たルイが教えられた事実は、酷な言葉だった。
「なく、亡くなったんですか、昨日のおじいさんと、」

「……発見が遅かったんです。ディーネ様のお力で傷は塞がりまし

たが、血を既に流しすぎておりました。あの初老の男性と、子犬の母親と思われるアルカライトの成犬は……」

俯いてしまったルイを、さっと隣にいたアイラが支える。

「私が……ちゃんと回復魔法を使えたら……」

「ルイ様は、十分できる事をなさいましたわ。現に酷い怪我をしたのに子犬は無事でした。確かに人の怪我を治す魔法はまだ使えませんが、きつとこれから水の街を訪れば。水は治癒の街です。ルイ様、気を落とされないで」

アイラは「私も治癒を使えば」と思う心を必死で抑えた。ただでさえ神子という重荷を背負っているルイの前で言っではいけないと堪えるが、アイラの目にも涙が浮かぶ。

「キユウン」

突然、足元から聞こえた声にルイがぱつと目を開くと、真っ白なふわふわの毛を揺らして、小さな犬がルイの足に前足を乗せ見上げている。

「昨日の子」

そつとしゃがみこんでルイはその子犬を抱き上げる。

「キミも、一人になっちゃったんだね」

「わふ」

子犬はぺろりとルイの手をなめると、少し足を動かしてねだるようにルイの胸に身体を預ける。

「随分とアルカライトの子犬に好かれたようですね」

騎士団への指示で離れていたカイトが戻り、目を潤ませているルイを見るとそつと腕に収め頭を撫でた。

「どうする、ルイ。連れて行きたいのなら、君が飼うといいよ」

カイトはそつと耳元でそう囁く。アイラにも聞こえないであろう声で、「ルイ」と呼ぶカイトの声はとても優しい。

こくこくと頷いて子犬を抱くルイは、ぱつと顔を輝かせた。

「連れて行っていいのなら、連れて行きたいです！」

「そつ。なら、屋敷に戻るまでその子犬も私がちゃんと守りますか

ら、安心して、ルイさん」

カイトはルイから少し離れてそういつて微笑む。

ルイ、と呼ぶのは二人きりのときだけなのだと理解して、ルイの心臓はどきんと跳ねた。

自分は好きだといってくれたカイトに対して、何も返事はしていない。

カイトといるときのあの暖かな感情は、他では与えられないだろう。そうは思っても、「好き」がまだよくわからなくて。

いつか人前でもルイと呼んでくれる日がくるのだろうかと胸を高鳴らせた。それが恋とは気づかずに。

「まあ！ 朝から人がいるのも忘れていちゃいちゃして！ カイト様、ここがどこだかわかっておりますの！？ ルイ様お顔が真っ赤ですわ。さあ、こちらへ」

騎士達が驚いた瞳で見つめる中、ルイは漸くその事実に気づいて大人しくアイラに連れられてその場から離れた。

昨日捕まった男は、そのままこの地区にいた兵に引き渡され長の町で刑を待つことになったらしい。

ばたばたと予定が遅れたものの、今日は結界を越え水の街アクアールへと移動する日だ。

途中、闇の民襲撃が予想されている中での移動で、騎士達の顔にもここ数日とは違う緊張が走っている。

ルイはアルカライトの子犬に「六花^{りっか}」と名前をつけて大事に胸に抱いたままカイトと馬に乗る。

カイトはいつも通りルイが落ちないように抱いて、見上げれば微笑む。まるで昨日の事が嘘みたいだと思うのに、ルイが気づいていなかっただけで首には赤い花が一つ。

アイラが反応してルイの首を隠すようにストールを巻いてくれたのだが、それが嬉しかった。回復魔法で消してしまうことができる

印を、ルイは消したくなかったのだ。もちろんアイラにはからかわれまくったのだが。

「さあ、ここから先は結界外だ。皆の者、気を引き締めよ！」

カイトの声が周囲に響き、力強い返事が返ってくる。ルイとカイト、ディーネとラトナ、アイラの周りに、デュオを先頭にまるで囲むように陣が組まれる。

兵の守る小さな門を出たそこは、見晴らしのいい草原。

「行くぞ！」

ほんの少し今までよりも速度を上げて、馬が地を蹴る。

一時間、二時間と時間が過ぎる。もう少しで、水の街。

しかし。

ルイがいち早く気づいた。自分達が走るより左の方向から来る闇の気配。

「止まって！！ ダイヤモンドよ、皆を守る結界を！」

ルイが叫ぶとほぼ同時にカイトも止まる指示を出し、ルイと同時に結界を左に張り巡らせた。

ルイは皆を囲むように丸く結界を、カイトは左に絞って結界を。

特にカイトの堅い結界が、何かを防ぐ。

結界内に強い衝撃。結界が揺れる。すぐさま事態に気づいた優秀な騎士達は気を高め始める。

黒い球体が何度も結界にぶつかって、漸く薄れたときに現れたのは……以前ルイ達を襲った人の言葉を理解する闇の獣と、人の身体を持つ闇の民。

「またおまえら……っ！」

すぐさまルイ達の左に回ったのは、前回腕をやられたシャルだっ

た。

「シャルさん、結界から絶対外に出ないで！ 皆も！」

ルイは叫ぶと、少し震える腕で六花を抱きながらきつと闇の民を睨む。

「私は、そちらには行かない！」

前回こちらに來いといわれた言葉を忘れていなかったルイは、力強く叫ぶ。

「はっ！ 少し強くなったくらいでいきがるなよ、光の神子。それに安心してよ、僕達は今日戦いに來たわけじゃない」

「散々攻撃しておいて、それか？」

カイトが吐き捨てるように言う。

「實際君ら怪我してないだろ？ 君と光の神子の術のおかげでさ。よく気づいたね、あんな薄い魔力で」

『それくらいでなければ、面白くもないがな』

小さな闇の民の少年と、獣がそう言うて笑う。周りの騎士は怒りに顔を歪めたが、誰も飛び出そうとはしない。

「何をしにきた？」

初めて目の当たりにする人型の闇の民に、漸くラトナが口を開いた。ディーネを守るようにぐつと引き寄せ、ディーネは唇をかみ締め事態を見守っている。

「なに。ちよつと忠告に來ただけだよ。もう攻撃しないさ」

『もつとも、おまえ動けないよなあ？ 治癒能力しか能のない、我らと戦えもしない神子を守るので手一杯だろ？』

その言葉に、かつとラトナがなんだと、と叫んだ。ディーネが泣きそくに顔を歪める。

アイラは周囲にもう一段階結界を張り巡らせ、デュオはラトナをなだめるように落ち着けと叫んだ。

「用件を聞こう。お前らに付き合っている暇はない」

カイトがずつと低い声でそういうと、面白そうに幼い少年はけらけらと笑った。

「光の神子のナイト様。気をつけるんだな。いずれ、お前が神子を傷つけるよ、きつとね！」

「何？」

「おまえのせいだ！ あはははは！ 神子は戦えなくなるさ。我らが神子に叶う神子なんていてはいけないんだ！」

ルイは意味がわからず顔を顰める。カイトがそんな事をするはずがないのだから。

「私は、あなたたちに負けたりしない！」

『いつまでそういつていられるかな？ お前は、きつと後悔する』
笑い転げる少年の変わりに、にやついた声で獣が答える。

『そいつらを信じた事を。自分が生まれた理由を。きつと後悔するぞ？』

「あはははは！ いなくなればいいんだ！ さあ、行こうみんな、我らが神子が、お待ちだからな」

高笑いを残して、闇の民はその場からふっと消えた。

清き癒しの町―1

「カイトさんが、私を傷つける……？」

高笑いが静まった草原で、ぼそりとルイが呟いた。キュン？と子犬が鼻を鳴らす。

はっとして周囲の騎士達がルイ、そしてカイトへと視線を移動させ、そして揺らがせる。

カイトの表情は俯いていて、騎士達にはわからない。しかし、ルイはきよとしたまま周囲を見渡し、そしてカイトの腕の中からカイトを見上げて、その表情を見た。

気まづげに、揺れる瞳。

「カイト、さん？」

「私は……私はあなたを」

揺れる瞳に、ルイは目を見開いた。
そして。

「……カイトさんは私を傷つけたりしません」

突然、ルイはそういつて前を見た。

はつきりと口にし、そして凜とした大きな声で、それは周囲の騎士達への言葉のようで、自分に言い聞かせているようで、カイトに伝えているようでもあって。

「ルイ様……」

アイラとデュオが、ルイを見つめる。その表情は複雑そうで、ルイは『何かあるのだ』と確信した。しかし、ルイは言葉を繰り返す。
「カイトさんは、私を傷つけたりなんてしない。行きましょう？」

ルイの言葉で出発を始めた一行は、静かに水の町アクアル結界内

へと到着した。

水の町の長のいる場所へは、二日かからないらしく、ルイはぼんやりと六花を抱きながらもう少しなのだと言った。周囲の様子を見ていた。地の町とは打って変わって川、そして湖が増え、植物と水の緑と青の色合いがルイの心を落ち着かせる。

「ルイさん」

ぼそりと上から降ってきた小さな声に、ルイは景色から視線を外して上を見上げた。

「カイトさん、あの」

「今夜時間、貰えますか？ あなたに話したいことが……」

「それは、さっきのと関係ありますか？」

ルイは見上げた状態で、覗き込むカイトの視線をじつと見つめた。「私、信じてます。カイトさんが私を……その、えっと。好きだっで、言ってくれたの」

ルイは視線をまた下げて、言いくそうに俯いた後小さくそういった。耳が赤くなっている、カイトはルイの発言に驚いて目を見張る。

「何かあるんでも、カイトさんが私を好きって言ってくれたのに嘘がないなら……それは私にとってすごく嬉しい言葉だったから、話してくれるのならいつまでも待ちます。えっと、その、なんていうか」

「好き、という気持ちに偽りはありません。……好き。好きだ。だけれど俺は君に言っていない事がある」

「私、好きってよくわからない。けれど、カイトさんに好きって言われたのは凄く嬉しかったと思うんです。それにその……カイトさんの傍にいて、とても嬉しいから」

ルイの精一杯の好きという気持ちを、一生懸命伝えるルイは俯いたまま小さな声で言い続ける。

「傷つくって、私がカイトさんを信頼していないと、傷つきませんよね。私、きつとカイトさんが大切なんです。だから、傷つく事が

あるかもって思うと、少し怖い、けど」

「……、」

カイトは、そっとルイの身体に片腕を回し、抱き寄せた。ルイは大人しくカイトの胸に身体を預ける。

「だけど、それを乗り越えてでも……カイトさんを信じたいと、思ってるんです」

それはルイにとって大きな変化だった。

諦め続けていたルイは、もちろん何の期待もしていなかった。もし誰かに裏切られようと、初めから何も未来を欲していなければシヨックも少ないから。だから、未来に何があるか、危惧しようと思わない。

けれど、確かに諦められないものが今はあるから。欲しいものがあるから、ルイは敵の言葉を受け入れながらも、諦める事をやめた。

いつの間にか、少しだけ騎士達は離れて歩を進めていた。声は聞こえていなかっただろうが、気を利かせたのだろう、デュオがちらりとカイトを見る。

「私、カイトさんの傍にいたいです」

「俺は、必ず君を守るよ。ルイ、大切にすること……どうか、お願い。信じていて」

傷つくのが怖いから……全てを諦める。それではいけないと漸くルイが頷いた瞬間。

カイトの腕の中で、ルイはふわりと、それは嬉しそうに笑みを浮かべてカイトを見上げた。

「お部屋はどうされますか、隊長」

「神子と同室にしてくれないか？」

そんなやり取りが聞こえて、ルイはかっと顔を赤く染める。

「まあ、ルイ様、ルイ様とうとう……っ」

同時に、アイラがきらきらとした笑みを浮かべる。

先ほどのカイトとのやりとりを、しどろもどろながらルイはアイラに説明したのだ。

恋、愛はわからない。それでもカイトが大切なのだとルイは素直に受け止めて。

ぎゅっと手を握ってくるアイラに、ルイはふにやりと、頬を染めて可愛らしい笑みを浮かべた。その瞬間、アイラの目に涙が浮かぶ。「その、笑顔を待っておりましたの……っ！」

「わっ、アイラさんっ」

ぎゅっと抱きしめられて、ルイは顔を赤くしたまま慌ててアイラの抱擁を受け止める。

ワン、と間に挟まれて一声吠えた六花をルイは静かに横に下ろし、おろおろと彷徨った手は、静かに控えめにアイラの背に触れて落ちて着いた。

「可愛らしいですわ、ルイ様！ これならカイト様も一発でやられちゃいますわっとうしまししょう、私、友人として嬉しいやら寂しいやらっ」

「あ、アイラさん落ち着いて」

「で、でもでもまだ神子様は忙しい身。ああ、カイト様に避妊だけはお願いしてくださいませね、いえ、カイト様は承知の上だと思いますけれどもっ」

「は、ひ、ひにっ」

話が飛びすぎだ、とルイは言われた言葉にびっくりして立ち上がった。

ぱっと手を離れたアイラが、何事ですか？ といわんばかりに涙

を溜めた大きな目をぱちぱちと瞬きする。

「わ、わわ、私そんなじゃ……っ」

「え？ でも恋人になられたのでしょうか？」

「わ、わからな……っ そうなのかな……っ」

「でしたらすぐではなくてもいずれ……っ、ルイ様、大丈夫ですわ。カイト様にお任せして……」

「ま、待つてアイラさん、ついていけない！」

「いーえついてきていただきますわ、ルイ様、大切な事ですのっ！ これも私のお役目としてしっかりと勤めさせていただきますわ」
にや、とアイラが笑う。

ひっと、ルイは息を飲んで。

「ルイ、部屋を取ったから今日はもう休……っ」

「ひゃわっ!？」

そつと伸びたカイトの手がルイの肩に触れた瞬間、ルイが奇声を上げて飛び上がる。

顔はみるみるうちに赤くなって、瞳にはじわりと涙が溜まって。

「わ、わたし今日はアイラさんと同じ部屋で……っ」

「え、ルイさん？」

「まあルイ様、大丈夫です、何も怖くありませんわ」

「……アイラ、ルイに、何を言いました？」

「る、るいつて、カイトさんあの……っ」

「ああ、そんな可愛い顔をしないで。このままどこかに閉じ込めてしまいたくなる」

「だーおまえらとつとと部屋行け！ こいつは預かるから」

デュオにひよいとアイラの手が引かれ、アイラに縋ろうとしたルイがバランスを崩してカイトの腕の中へ。デュオの腕の中には六花がいて、預かるとは子犬の事だろう。

「今日は同室、です。話したい事もありますし」

「つつあ、アイラさんっ」

初めて聞くルイの元気な笑みや話し声に、カイトの聞いている方が赤くなりそうな熱い台詞。

ぽかんと見つめるラトナ達騎士の横で、さっと横抱きにされたルイはもがく暇もなくあてがわれた部屋へ。

「ひ、ひどいです、わ、私その……っ」

「無理矢理、君の望まないことをしたりしないよ？」

「でもあの、だって、アイラさんが……っ」

「ルイ、君は俺のものだ。好き。絶対に守ってみせるから、ねえ、今は俺の事だけ考えて」

「ひあっ」

ぐっと抱きしめられて、ルイの頬、額と次々にカイトは唇を落とす。

「さっきのは……いいんだよね、俺の傍にいてくれると思って」

微かに迷った後こくと頷いた頭にカイトは手を伸ばして後頭部を支え、反対の手で顎をそっと持ち上げるとカイトはゆっくりルイに唇を重ねた。

「ふあ、待つて、カイトさ……」

「待てない。でも、本当に嫌ならすぐやめるから。今はまだはつきり好きってわからなくても、わからせてあげるから。キスが嫌ならほら、首を振って？」

「ん、んん、ふっ……」

唇を重ねながら涙目でルイはカイトを見つめ、ずるいと呟きながらその唇を受け入れる。

柔らかいカイトの唇が触れるキスは心地よかった。

首を振ろうとしないルイに満足気にカイトは笑みを浮かべて、その下唇を軽く啄ばむと、そのままルイをベッドにそっと下ろす。

寝転んだルイにゆっくりとカイトが覆いかぶさって、びくりとル

イの肩が震えた。

「そんなに怯えないで。怖がるようなことをしないから。でも、あまり可愛いしぐさをされると俺も辛いんだ」

は、と短く息を吐いて、少し掠れた声で耳元で囁かれて、ルイは感じたことがない熱に浮かされて瞳に涙が自然と溜まってしまう。

ばくばくと煩い心臓と、緊張でルイはぎゅっと目を瞑る。と、また重なる唇。

「俺は君を傷つけたりしない」

「は、しんじてま、す」

「可能性があるとすれば……俺がまだ話していない事を君がどう捉えるか」

触れるだけのキスの合間にカイトが言葉を綴る。

「俺は……ルイ、この国の王位継承者だ。母が王の妹、そして王には男子がいない」

「おう、い」

突然の告白に、ルイはきょとんとカイトを見つめる。

「でも俺はあまり興味がないんだ。俺の夢はずっと、いつか現れる神子の護衛を引き受ける事だったから……兄さんがいるから王女と婚約した。限りなく現時点では兄さん、もしくは兄さん達に男の子が恵まれればそちらが王位につくだろう。ただ……」

「ただ？」

「神子は常に今まで王の血族だった。でも今回は……違う」

「……え？ 私？」

突然自分の話題に触れられて、ルイは戸惑った視線をカイトに送る。カイトは唇を一旦離し座ると、ルイの身体を抱きかかえ膝に座らせた。

「悔しいけれど今の俺よりライト兄さんの方が守護の力が強い。王位に興味があるわけではないけれどそれは認める。ただ、俺が神子に……好意を持ってるっていうのは貴族院に周知の事実だったんだ」

「えっ」

「わかりやすかった、らしい。デュオに言われたよ。それで……貴族院は、次の神子こそ王族から……つまり今の神子を王妃にと望んでいるから」

「ええっ？」

話の大きさに、ルイは身を乗り出して声を上げた。さっきまで真っ赤だった顔は少し青ざめる。

「ごめんね、これ以上負担をかけなくなかったから言いたくなかったんだけど……つまり、俺が王位狙いで君に近づいたと思わせたかったんじゃないかな、闇の民は」

「そんな」

「違う、よ？ 王女と兄さんが婚約した時点で、王位はほぼ兄さんが継ぐので決定しているんだ。神子が神子を生むわけではないんだから、君が王族にならなくても大丈夫なんだから」

「混乱、してきました。カイトさん」

「ごめんね。とにかく俺は……そんな目的で君を好きだと言ったんじゃない」

「それは、その。疑ってなんか……っ」

カイトに覗き込まれて、また唇が重なって、ルイはどきどきと煩い胸を押さえる。

「可愛い。あまり誘わないで。そんな目はずるい」

「誘ってない……っひあ！」

ぺろりと耳を舐められてルイはぐつとカイトの腕を掴んで。

「黙っていてごめん。でも……本当に好きだから」

「んんっ、変わりません。信じてます」

ルイの一つ一つのにぎさに、カイトは堪えようのない熱を身体の内を感じた。

このまま唇を貪ってしまいたい衝動を、必死に堪える。

「さあ、横になって？ 大丈夫。疲れた身体を休めないで。昨日から続けて魔力を使っていたから、疲れているでしょう？」

「カイトさん、も……一緒に休みます?」

ああ、なんでこんなに……と、カイトが唇を噛んだのは仕方ない事だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2940q/>

たった、ひとこと

2011年4月20日01時40分発行